第Ⅵ章　考察

第１節　集落遺跡に関する考古学的研究

宮城弘樹・玉城靖（今帰仁村教育委員会）

1. はじめに

遺跡を構成する個々の遺構や出土遺物について前章まで詳細を報告した。ここでは遺跡を俯瞰して今帰仁ムラ跡の集落としての特徴や実態について考えていきたい。

地理学で言う「集落」は、共同生活を営むための住居の集まりで、土地・道路なども含めたものを言う。考古学でも集落遺跡とは複数の住居とそれに付随する各種の遺構で構成されている。今回発掘調査を行った箇所に住居跡が埋没することは、これまで実施された調査によって予見されていた。しかし、その集落規模や集落の構成である屋敷、住居、道などといった諸施設の配置や具体的な規模などについては不明な点が多かった。今回実施した調査では、現在までの今帰仁村教育委員会による調査で、おおよそ集落として想定する約40,000㎡の遺跡想定範囲のうち、4,000㎡の発掘調査を実施している。これは遺跡全体の約１割を調査したことになる。

2. 関連分野の成果と発掘調査の成果

集落の構成要素を確認するにあたって、今回の調査ではこれまで対象とならなかった包含層や明確な遺構の分布しない地域の調査を一部実施している。これによって集落を構成する空間そのものの解明に役立てることができたと考える。具体的には集落遺跡は「柱穴を主として遺構が集中的に分布する地域」と「遺構の分布しない自然岩盤が露頭する地域」によって構成されているということが確認できた。この事実は遺跡調査前に地表面の観察によって読み取ることができる。今回、この周知の事実をまとめるにあたり、報告では「遺構の分布しない自然岩盤が露頭する地域」を「第Ⅴ章　第５節　その他」で扱っている。完掘後の様子は既に詳述したように、岩盤が露頭している土地で大半が占められていた。言えば平坦な土地であれば一定の計画のもと居住地として利用することもできたが、自然地形そのものに凹凸が多く居住には不便であったため、必然的に利用されなかった土地と考えることができる。このため、今帰仁ムラ跡一帯の土地利用は、地形上の制約から小さな平坦地を居住地として選択･利用することとなったのであろう。

若干本論からは逸れるが、沖縄の集落研究について理解する上で重要な先行研究に触れておきたい。伝統的集落における屋敷区画の論考については、人文地理学や民俗学、都市計画からの研究等が知られる。最初にこれに着目したのは高原三郎である。集村における「計画的碁盤目型」を「南島式村落」として、均一性の高い集落景観と説明している（高原1939）。これを発展させ、仲松弥秀は御嶽に接し不井然的形態を示す「自然発達型」とゴバン目状に計画的に発達したものに分け「ゴバン型」の登場を王府によって1737年に実施されたとする（仲松1993）。その後、坂本磐雄が『沖縄の集落景観』を著し、宅地区画のみならず、家屋の配置や母屋一番座の配置などを加え詳細に論じている。同書には、多くの沖縄の集落の図面を添付している点も指摘しておきたい（坂本1989）。現在、集落研究を知る上で最もまとまったテキストの１つに高橋誠一の『琉球の都市と村落』がある（高橋2003）。高橋は碁盤目状に整然と整備された村落について、正方形の区画よりはむしろ長方形の区画が卓越し、道路は必ずしも直線にならず、交差点におい

ても微妙な食い違いがあることを指摘、実態に適当と考えられる「格子状集落」という名称で説明している。また、首里や久米村の重要な要素として風水思想を有していることを論じている。

さて、このような沖縄全体の集落景観に関する研究の中で、今帰仁城跡周辺や今泊（今帰仁邑・親泊邑）についても紹介されている。これについては仲原弘哲（1993）、高橋誠一（2003）、石野裕子（2004）によって詳細に論じているので各氏の論考を参照にされたい。ここでは、本稿にかかる重要な部分について、長文ではあるが発掘成果との関わりから興味深い所見を多く含む高橋（2003）の論文を箇条書きし調査成果と突き合わせて考えてみたい。

①今帰仁・親泊の旧集落は、今帰仁城跡前面の地（外郭を含む地）に存在していた。
②地割りは、かつての集落における屋敷地･宅地の痕跡であると推定することができる。これらは円形もしくは楕円形で、移動後の集落の格子状の形態とは異なる。
③今帰仁城跡前面の外郭を含む旧集落推定地のうち、特に、シニグンニから阿応理屋恵按司火神、今帰仁ノロ殿内、古宇利ノ火神を経て今帰仁城跡の正門へと連続している標高75m前後の比較的平坦な面に広がる地筆群は、移動前の今帰仁集落の痕跡と考えられる。
④親泊の旧集落については、明確な塊村としての形態を持たない家屋群であった可能性が強い。
⑤結論として、今帰仁城の前面には、核心的な100軒程度の塊村状の集落(＝今帰仁ムラ)が存在、さらにその北方には付属または延長という形で、150軒ほどの家屋が存在していた(＝親泊集落)と想定できる。今帰仁城の前面には、250軒ほどの家屋群がかつては存在していて、そのうち城からやや離れた家屋群がまず移動し、時を経て、より核心的で重視されていた今帰仁集落も移動したことになる。
⑥これらの推定旧集落内部には、明確な道路網が設定されていなかった可能性が強い。
⑦旧集落地の聖地化ばかりではなく、今帰仁城そのものの聖地化は大きな問題として考えるべきである。軍事的な施設は、その地域に居住する住民にとっては、自らを守ってくれる場所あるいは火急時の避難場所という期待を抱き得るものであった。その種の施設の設置されている場所が、次第に心の拠り所としての神性を帯びていくことは、必然であったと言ってよい。

高橋が導き出した結論として本論に関連して①～⑦の重要な指摘を列記した。以下に上述の内容に関して、発掘調査の成果との比較を列記する。
①について　今次調査以前から周知されていたことであり、当然これらの集落が今帰仁城跡との関連する集落として調査を行った。その成果からも今帰仁城が機能していた時代に同時期に存在した集落遺跡であることが確認できた。
②について　地筆は指摘どおり屋敷地・宅地の痕跡であると推定できる。しかし多くの地筆の形状がそのまま屋敷区画になるケースは希である。また、地割りが格子状形態とは異なるものの、塊状、楕円形状になるかについてはさらなる検討が必要である。
③について　高橋が20世紀初頭の畑の地筆界を旧集落との関連を述べ、あくまでも仮説と前置きしながらも図１中にｎで示している地域がある。しかし、今回調査した地域はｎで図示した地域の西側の縁辺及びその外にある地域にあたる。高橋のあくまでの想定部分よりも、広い地域が遺跡となっている。高橋自ら最初に指摘したとおり、畑地が屋敷地の認定において重要な要素となることが確認されたと考えられる（図１・本文第５図参照)。今回発掘された地点を太線で図示、１～４は発掘された屋敷地を示す。
④について　今回の発掘との関連地より離れているので省略するが、遺物の採集例から言えば親川原一帯、現集落の親泊原の一部ではグスク時代の遺物の採集例や包含層の確認を行っている。集落の移動がグスク時代のある時期に行われていたのか、あるいは親泊集落がより散村的な集落で親川原や親泊原にも散在的ながらも家屋群を有していたのかは今後注視しなければならないと考え

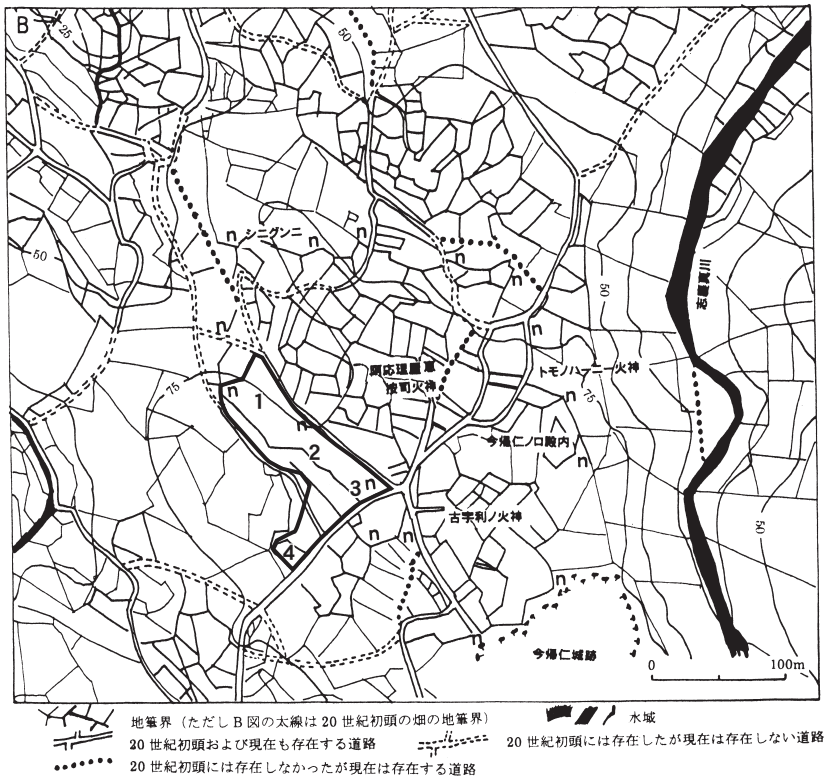


図１　今帰仁・親泊の旧集落推定地の地割（高橋2003に加筆）

る。いずれにしても、当該地域の本格的な発掘調査を行い検討したい。

⑤について　今回調査地点では遺構が集中分布した地域は４（ないし５）軒程度で、これらは家屋群からなり、概ね遺構の分布が粗になる地域とあわせて、屋敷地として区画できると考えた。高橋の想定では今帰仁ムラ＝100軒を想定している。現状からは今帰仁ムラ全体の１/10の面積の調査で見積もると最大５軒という数を考える。しかし一方でこれは集落の縁辺部であるため低い数となっているとも考えられ、事実建蔽率も志慶真門郭に比べると低いようである。今後城内の外郭地域の調査を行うことでより具体的に推測することができると考えるが、それでも屋敷数は100よりも下回る可能性が高いと考える。

⑥について　指摘するとおり、今回の４つ(もしくは５つ)の屋敷比定地を貫くような道路網は設定されていない。但し、屋敷地３から４への行くのに最も最短となる線上に確認された小石敷きの用途不明遺構がある。時代も新しいように思われるが、明確に整備した遺構としての道が発達していなかったと言うだけで、獣道的な道によって各屋敷が結ばれていたのではないかと想定される。

⑦について　旧集落の聖地化については大きな問題ではあるが、考古学的な発掘成果からこれを導き出すことは困難である。しかし、Ⅱ区で勾玉が出土する。勾玉の出土をもって祭祀と結びつつけることは早計であるが、今後この問題については更なる検討を必要とすることは言うまでもない。

以上に示してきたように地割りや民俗事例から確認されている集落に関する見解と想定が、発掘調査によっても追認され集落跡と一定の整合性を持つことが確認できたと考える。

3. グスク時代の集落の実像

次に今帰仁城以外における、城下に展開する集落、あるいは16世紀以前に発生・発展を遂げた集落について比較検討しておきたい。検討した事例ではグスクとの関連から14～16世紀の浦添・首里を、グスク築城初期の事例としてシイナグスクを、最後に近年確認される13世紀を遡る沖積地・台地上の集落遺跡の３つに分け紹介する、。

グスク時代前夜の集落跡（13世紀を遡る沖積地・台地上の集落遺跡）

●ウガンヒーラー北方遺跡(読谷村)　2000年に5,000㎡の発掘調査が実施された。標高約30mの琉球石灰岩台地上に立地、海岸までの直線距離は約１㎞である。建物跡（母屋15・付随建物23）が合計38棟復元されており、母屋と高倉の建物のセット関係が窺える好例として、調査担当者の仲宗根氏によって「吹出原型建物」と提唱している（仲宗根2003)。出土遺物からその年代を

12世紀～13世紀の集落として、建物配置を各母屋＋高倉のセットがそれぞれ南北軸を基準に移動、母屋と高倉には一定の空白部があることも指摘している（仲宗根ほか2003）。また、これと同様の隣接遺跡としてタシーモー北方遺跡（仲宗根ほか2001）がある。

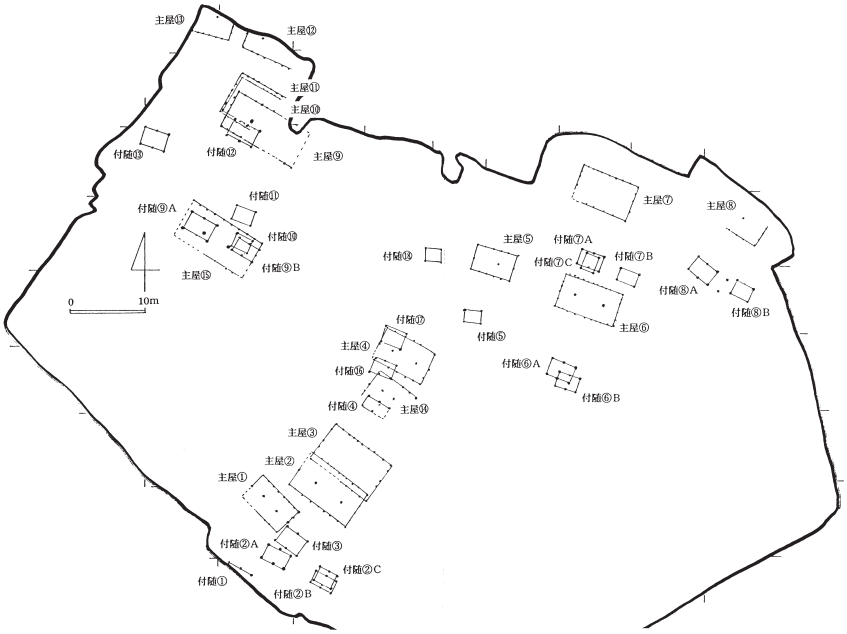


図２　ウガンヒーラ北方遺跡の建物跡配置状況（仲宗根2003）

●伊佐前原遺跡・伊佐前原第一遺跡（宜野湾市）　石灰岩段丘の縁辺を中心に、標高約15mの平坦地に立地する。1992年に第１次調査（調査面積470㎡）、1995年に第２次調査（調査面積480㎡）が宜野湾市によって実施されている（呉屋ほか1993・呉屋ほか1998）。また、1998～2000年には沖縄県教育委員会・沖縄県埋蔵文化財センターによって900㎡の発掘調査が実施されている。ここでは後者の調査を中心に紹介する。伊佐前原第一遺跡は第Ⅲ層以下が11世紀末～14世紀にかけての時期とされる（鶴元ほか2001）。両者の調査によって掘立柱建物跡、土坑、溝、埋葬跡（土壙墓）、列状遺構（植栽痕）などが検出されている。

●後兼久原遺跡（北谷町）　小丘陵の縁辺を中心に標高約４～５ｍの緩やかな斜面から平坦地に立地。1996～97年に町によって（調査面積6,210㎡）、2000～01年に県埋蔵文化財センターによって（調査面積1,080㎡）調査されている（片桐ほか）。前者の調査によって第Ⅲ層ｂ～第Ⅵ層が第Ⅰ期（11～13世紀）とし、住居跡を検出する良好な状態で確認されている。建物配置は母屋＋高倉のセットで確認されるとともに、屋敷内の構成として母屋は石灰岩の丘陵部に近接し、海側に高倉を配する。また、この他にも、屋内・屋外炉、柵列状遺構、鍬跡を伴う畠、砂鉄貯蔵穴などが３・４区のいずれでもセット関係として認められるとされる（山城ほか2003）。

グスク時代開始期の集落跡（グスク築城初期の事例）

●シイナグスク（今帰仁村）　2002年範囲確認を目的とした試掘調査が実施された。標高約90mの山頂部に立地するグスクで、西側は深い谷をつくり大井川が流れる。海岸までの直線距離は約３㎞である。試掘調査と合わせて約40,000㎡の縄張り確認踏査が行われている。これによれば山頂部は狭小な石積み囲いを持つスペース、がありこれを一の郭とする。一の郭南側は比較的緩斜面となり仮称二の郭が広がっている。他方一の郭北側は自然岩盤に囲まれた狭い空間が分布し調査の結果、いずれの空間からも13世紀後半の陶磁器に加え大量の土器が出土している。（宮城ほか2004）

図３　シイナグスクの縄張り図（宮城ほか2004）

グスク時代の中核的なグスク麓の集落遺跡（14～16世紀の浦添・首里）

●当山東原遺跡（浦添市）　浦添城跡の城下にある集落遺跡。1997～2000年に実施された調査によって約2,000㎡の発掘調査が行われている。この調査ではグスクから近世の遺構が検出される。Ⅰ地区とⅡ地区の両者ともグスク時代の遺構が確認され、遺構はピットや溝などで構成される。また、平地造成跡として地山の緩斜面を削平して平場を造作していることが指摘される。Ⅰ・Ⅱ地区は岩盤で画されている。(渡久地ほか2003)

●天界寺跡(那覇市)　首里城跡の城下にある集落遺跡。1995年より数次にわたり市と県によって総計約4000㎡の発掘調査が実施されている（島ほか1999・2000・島袋ほか2001・2002)。天界寺の創建以前の層より柱穴が多数検出されており掘立柱建物の存在が想定され、調査担当者によってグスク期の集落跡と報告される(島ほか2000)。年代は14世紀後半～15世紀前半と捉えられており拠点グスク近傍に展開した集落跡を実証的に示す事例として好例である。遺構は掘立柱のピット群で、性格不詳の竪穴状遺構が検出されている。

集落遺跡について通史的に見るには些か資料不足の観は否めない。しかし、13世紀のシイナグスクを境にそれ以後と、それまでででは大きく様相を異にする。１つには立地する土地の条件である。伊佐前原遺跡は丘陵を背にした海岸を望む沖積地にある。ウガンヒーラー遺跡はこれに対して台地上に立地、開地遺跡である。このような沖積地もしくは台地上の開地における立地は当該期の遺跡として幾つか指摘することができる。例えば、沖積地の遺跡として屋部前田原遺跡（名護市)、熱田貝塚（恩納村）があり、台地上の遺跡として伊波後原遺跡（石川市）などがある。

しかし、13世紀後半と目されるシイナグスクでは、「グスク」名が付されるため砦としての性格を考慮することができるとともに、発掘調査成果から見ると山頂部に集住し自衛意識が強い集落遺跡としての性格を有するようにも考えられる。シイナグスクの土地条件としては、岩が多く露頭するため一見して宅地としては不適であること、このため岩盤に画された小さな平坦地を利用して住居を配したことが想定される。このような集落の多くは、後年城郭として整備されてしまうことで、城郭の前身的な集落の調査事例に恵まれないのではないのかもしれない

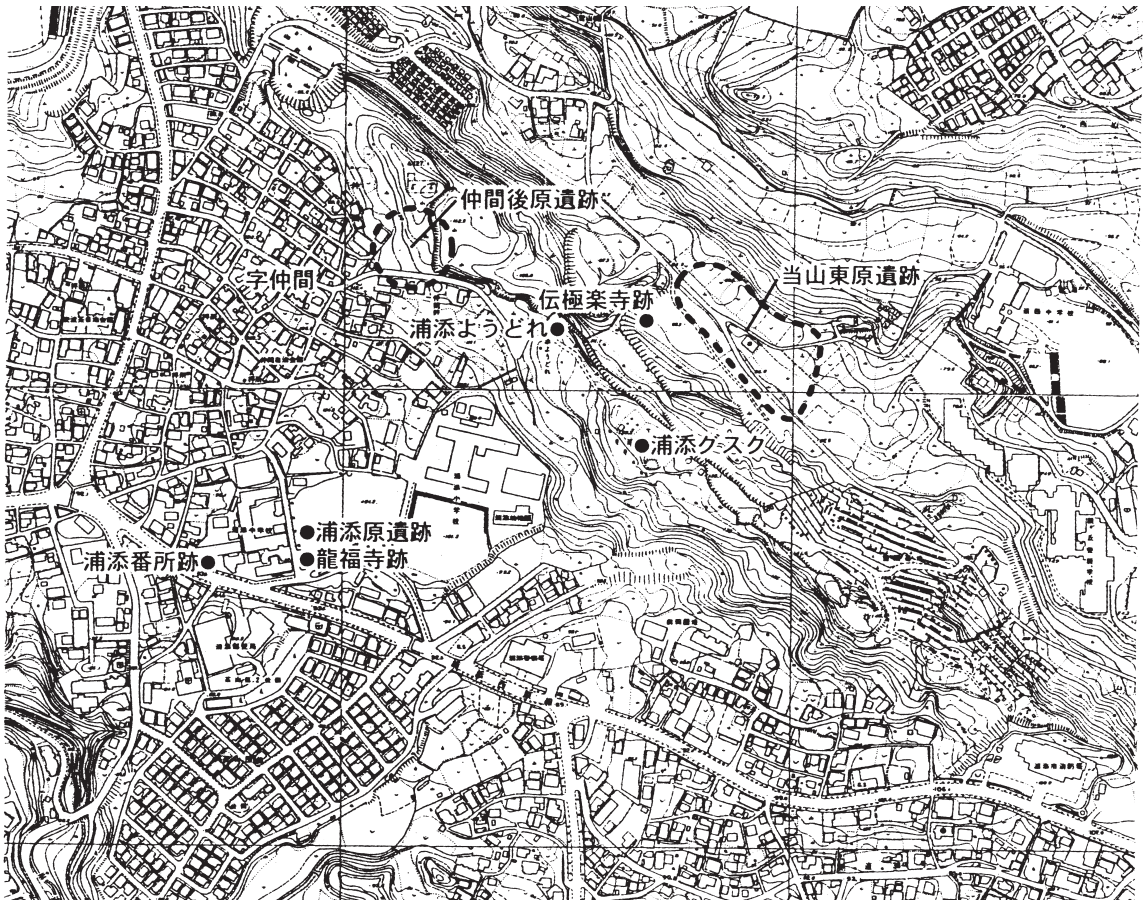


図４　浦添グスク周辺の遺跡（渡久地ほか2001）

図５　天界寺創建以前の遺構群（山本2000）

が、幸いシイナグスクは伝説では今帰仁城築城以前に築城したグスクと語られており、発掘調査ではこれを裏付ける資料が出土していることから、短期間で廃絶したグスクと考えられ、砦化する初期のグスクの様子をうかがうことができる。

以後、グスク時代において核心的な役割を担ったと考えられるグスクの城下に展開した集落で、グスク周辺地域の多くは自然地形が残っていたようである。しかし一方で、平坦地を得るために平地造成を行うような造成層や、土留石積みの検出などが認められており、平坦地の造作によってより広い宅地を得る努力を行っていたと考えられる。このような造作がグスク時代の集落に普遍的なものであるのか、それとも、そのような造作を行える一定の階級的に上位者であったのか、経済的に豊かな人であったのかは今後の課題である。

もう一つ指摘しておきたい事象として城郭内における倉跡の未見と集落各屋敷における倉の所有を上げておきたい。グスク時代前夜とした12世紀頃の集落において既に倉と母屋のセット関係が認められる(仲宗根2003)。これは「イエ」を単位とした家族のような概念を指摘することができ、これらが１つの社会構成の単位となっていたことが考えられる。このような状況は今回の調査によって城下の集落にも認められる現象である。他方、城郭内における調査として今帰仁城跡志慶真門郭の調査が既に行われている。この調査では住居と想定される建物跡のみが検出されており、このような状況からは住居のみで、付帯施設としての倉や納屋のような建物が未見であることとなる。鑑みればこれまでの城内の調査においても、首里城京の内で発見された王の倉「SK01」以外の倉跡はほぼ未見である。城内において核心的な役割を果たした建物は城内最高所に設置される礎石建物跡であるとは周知のとおりで、山本正昭氏はこれを１類型から３類型に分類整理したうえで、石積囲い内において礎石・基壇が複数配置される３類型の出現を首長権力による新たな政治秩序の形成を示していると説明ている（山本2000)。今帰仁城内においても主郭・大庭・御内原の３つの郭のみが礎石建物が配され、これ以外の郭で礎石建物は今のところ発見されていない。

以下推定を含むが、１つは城内のより核心的な郭である城内最高所には按司の居住するスペースとともに王権が表出される象徴的な建物群が配され、その城域の複数の郭には家臣団的な集団が王権の庇護の元に居住していたのではないだろうか。家臣団的な存在の居住者各戸では倉を所有せず、特定の郭などに倉が配されていたのではないであろうか。現在の所今帰仁城跡内において財産管理を行うような倉の発見には至っていないが、今後調査が進むことによって明らかにされるであろう。

他方、城外には経済的に独立した「イエ」を社会構成の単位とした集住形態が見られると考える。仲原弘哲によれば倉が集落によって所有され群倉（ブリグラ）として立地する事例は薩摩侵攻を受け納税が義務づけられた近世的世界の所産である可能性が高いとされる[註1]。グスク時代の前夜あるいは、グスク時代において今帰仁城や浦添城のように核心的な役割を果たした城下直近の集落においてては、各屋敷において倉を持っていることは重要な意味を持っていると考える。

5. おわりに

以上見てきたように今帰仁城跡周辺遺跡における発掘調査の成果からグスク時代の集落について検討を行った。グスクと集落の問題は、グスク論争の重要な論点の一つである。表側のテーマが「グスクとは何であるか」とすると、その裏側には「グスク時代の集落とはどのようなものであったのか」というテーマが設定されていたと考える。これは仲松弥秀氏が示した、集落における拝所地域の重要性にも通じており、グスクとよばれているエリアとは石積みによって囲まれたどの部分のエリアであったのか、はたしてグスク時代の集落をどのエリアに捉えているのかということにも繋がる。また、グスクの発生を集落との関係で捉えた嵩元政秀の「グスク＝集落説」の重要な指摘にも繋がると考える。

今帰仁城で言うならば13世紀後半頃に城地の山頂部（主郭）を中心とした地域一帯に居住地をもとめた人々が開拓し、彼らが集落を築いた。その後13世紀末葉頃にはその山間部でも、最も頂上部である現今帰仁城跡主郭部分に砦を築きはじめる。初期の砦は柵によって囲繞された単郭式のもので、14世紀前半にはこれが拡張し石積みに変わる。14世紀中頃の主郭Ⅱ期の城郭はおそらく単郭であったのだろう。これがやがて多郭化しはじめ、おおよそ集落として展開した地域が城郭に取り込まれる、あるいは集落を外に押しだし城域を広げていったのであろう。このようなグスク時代における城郭整備にともなって集落が外へ押し出されたという概念的な指摘は、仲原弘哲によっても想定されているとおりである[註2]。

今回は発掘調査を行った今帰仁ムラを中心に考古学的に検討を行った。今後は今帰仁城跡の南側に展開する志慶真ムラ跡、あるいは城から一定の距離をもって離れた親川原遺跡、兼次古島遺跡などのグスク時代の集落跡や村内各所のグスク時代集落遺跡と今帰仁城跡との検討からグスク時代の具体的な生活史の復元に期待したい。

註　釈

註１　仲原弘哲氏私信

註２　仲原弘哲氏は高橋誠一氏へ示した見解として「今帰仁城が本来はその中に住民の居住する村落であり、それが次第に石垣の構築などによって軍事施設としてグスク化される過程で、城内から住民が排除されて純然たる城郭になり、それゆえにこそ今帰仁の旧集落は、今帰仁城の全面に営まれるに至っている」としている（高橋2003）。

参考文献

石野裕子　2004年「今帰仁グスクが抱えたムラ－今帰仁ムラ・親泊ムラ・志慶真ムラの移動について－」『グスク文化を考える』新人物往来社

片桐千亜紀・ほか　2004年『後兼久原遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第22集

呉屋義勝・ほか　1993年『伊佐前原遺跡』宜野湾市文化財調査報告書第17集

呉屋義勝・ほか　1998年『伊佐前原第一・第二遺跡』宜野湾市文化財調査報告書第28集

坂本磐雄　1989年『沖縄の集落景観』九州大学出版

島弘・ほか　1999年『天界寺跡』那覇市文化財調査報告書第42集

島弘・ほか　2000年『天界寺跡』那覇市文化財調査報告書第43集

島袋洋・ほか　2001年『天界寺跡（Ⅰ）』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第２集

島袋洋・ほか　2002年『天界寺跡（Ⅱ）』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第８集

高橋誠一　2003年『琉球の都市と村落』関西大学東西学術研究所研究叢刊23

高原三郎　1939年「沖縄縣下の聚落」『地理學』第７巻第７號　古今書院

渡久地政嗣・ほか　2003年『当山東原遺跡』浦添市文化財調査報告書第33集　浦添市教育委員会

鶴本寿充・ほか　2001年『伊佐前原第一遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第４集

仲宗根求　2003年「読谷村発見のグスク時代の掘立柱建物跡について（「吹出原型掘立柱建物」の提唱）」『読谷村歴史民俗資料館紀要』第27号　読谷村歴史民俗資料館

仲宗根求・ほか　2001年『タシーモー北方遺跡』読谷村文化財調査報告書第10集　読谷村教育委員会

仲宗根求・ほか　2003年『ウガンヒーラー北方遺跡　発掘調査の報告』　読谷村教育委員会

仲原弘哲　1993年『今帰仁研究』Vol.3　今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史文化センター

仲松弥秀　1993年『うるまの島の古層－琉球弧の村と民俗－』梟社

宮城弘樹・ほか　2004年『シイナグスク』今帰仁村文化財調査報告書第17集　今帰仁村教育委員会

山本正昭　2000年「14、５世紀の礎石・基壇考」『琉球・東アジアの人と文化』上巻　高宮廣衞先生古希記念論集刊行会

山城安生・ほか　2003年『後兼久原遺跡』北谷町文化財調査報告書第21集　北谷町教育委員会

第２節　今帰仁城跡周辺遺跡出土のカムィヤキ

新　里　亮　人（伊仙町教育委員会）

1. はじめに

今帰仁城跡周辺遺跡からは、総計52片（推定個体数15）のカムィヤキが検出されている。その内訳は、第１表に示す通りである。これらの特徴と年代ついて私見を述べてみたい。

第１表　各調査区における出土破片数

		屋敷地１	屋敷地３	屋敷地４	その他			計
		Ⅱ区	Ⅲ区a,c	Ⅴ区	Ⅰ区	Ⅳ区	ハラクブ	
破片数	口縁部	1						1
	頸　部		2	1				3
	胴　部	2	15	23	1	2	1	44
	底　部		3		1			4
	総　計	3	20	24	2	3	1	52
推定個体数		2	6	7	・	・	・	15

※推定個体数は個体識別法による推定値
「・」は１個体以上

2. カムィヤキの分類

伊仙町教育委員会に保管されているカムィヤキ古窯跡群出土資料は、調整、器質、文様などの特徴から以下の２群に大別できる（伊仙町教育委員会2005、註１）。

Ａ群：器壁は薄く、焼成が堅緻である。外器面には綾杉文、平行線文の叩き痕が確認でき、格子目状の当て具痕が残るものが非常に多い。格子目当て具痕は、碁盤目状に刻まれるものと蜘蛛の巣状に刻まれるものがある。平行線文、円文の当て具が用いられたものも少量ある。外器面が波状沈線文によって飾られる資料も多い。

Ｂ群：器壁は厚く、Ａ群と比して焼成が軟質な印象を受ける。外器面の叩き痕は、ナデ、ケズリによって消され、無文となる資料が多い。綾杉状の当て具痕、平行線文当て具痕、花状文当て具痕が認められる。当て具痕は、Ａ群と比べてまばらになり、叩打成形が簡略化される傾向が見受けられる。

これらの特徴は、全ての器種に認められるものであり、破片資料であってもおおよその判別が可能である。

カムィヤキ古窯跡群の阿三亀焼支群第Ⅱ地区１地点（旧第１支群）では、それぞれ間層を挟んだ灰原が４層検出され、層位的な発掘調査が行なわれている（伊仙町教育委員会1985）。調査資料を再び検討すると、上層（灰２、３層）ではＢ群が多く、下層（灰４、５層）においてはＡ群が主体的に検出されている。したがって、生産遺跡での出土状況からはＡ群がＢ群に先行して出現し、徐々にＢ群が増加する傾向がうかがえる。

3. Ａ群とＢ群の年代

筆者は、カムィヤキの口縁部形態の差によって６型式18種に分類し、編年案を示したことがある（新里2002）。その中で、口縁部下端を下方に挽き出し、口縁に縁取りを加えるもの（Ⅰ～Ⅳ式）から口縁部の側縁が外側に拡張し断面が三角形状のもの（Ⅴ式）、口縁部形態が単純化し素口縁となるもの（Ⅵ式）へと型式が変化すること述べた。そして、Ⅴ式段階以降、無文化、当て具文様の変化、焼成の軟質化などが認められることを指摘した。消費遺跡における伴出陶磁器から年代を推定すると、ⅠからⅣ式は11世紀後半代から13世紀前半代、Ⅴ、Ⅵ式は13世紀後半代から14世紀前半代頃に位置付けられる。

口縁部形態の分類による型式と上述の２群を対比させると、Ａ群はⅠからⅣ式、Ｂ群はⅤ、Ⅵ式と概ね対応し、Ａ群は11世紀後半代から13世紀前半代、Ｂ群は13世紀後半代から14世紀前半代の年代を与えることができる。

4. 今帰仁城跡周辺遺跡出土カムィヤキの所見

今回の調査で発見されたカムィヤキ52片を上の分類に沿って大別し、調査区ごとの破片数を一覧表にした（第２表）。本遺跡からはＡ群、Ｂ群ともに検出されているが、いずれの地区（屋敷地）においても、Ａ群は少なく、Ｂ群が主体的に出土する傾向がある。

5. 今帰仁城跡周辺遺跡出土カムィヤキの年代

本遺跡から出土した陶磁器は、15、16世紀頃ものが大半を占めるが、12世紀から14世紀頃の資料も検出されている。検出されたカムィヤキは後者の12世紀から14世紀の陶磁器と共伴関係にあるものと考えられる。

第２表　各調査区における分類別出土状況

		屋敷地１	屋敷地３	屋敷地４	その他			計
		Ⅱ区	Ⅲ区a,c	Ⅴ区	Ⅰ区	Ⅳ区	ハラクブ	
破片数	Ａ群	1	6	5	0	1	0	13
	Ｂ群	2	14	19	2	1	1	39
	総計	3	20	24	2	2	1	52

今帰仁城跡周辺遺跡におけるカムィヤキは、Ａ群が少量、Ｂ群が主として検出されている。年代的には11世紀後半代から13世紀前半代に収まるものが少量検出され、13世紀後半代以降の資料が増加する状況にある。

総遺物数と比べると、出土数は僅かであるため、カムィヤキの年代を遺構群の年代にそのまま当てはめる事はできない。しかし、本遺跡においては、11世紀後半代から14世紀後半代の間に何らかの形で生活が営まれていたと考えられ、中心的な年代は、カムィヤキの破片数が増加する13世紀後半代以降の可能性が高いと思われる。

今帰仁城跡主郭のⅨ、Ⅶ層からは、Ｂ群のカムィヤキと青磁鎬蓮弁文碗、白磁口禿碗、ビロースクタイプ白磁碗などが出土しており、13世紀後半代から14世紀前半代の年代が与えられている。この時期は、第Ⅰ期と区分されており、築城のための版築と整地が行なわれ、掘立柱建物と城柵が構築された時期にあたる（今帰仁村教育委員会1991）。今帰仁城跡周辺遺跡から検出されたカムィヤキは、この第Ⅰ期の年代と重なるものが多く、城郭と周辺遺跡の関連を探る上でも大変興味深い資料である。

註　釈

註１　同様の分類は金武正紀氏も行なっている（金武1986）。ここで示したA群、B群は金武氏によるⅠ群とⅡ群にそれぞれ対応する。金武氏はⅠ群出土遺跡（12世紀：熱田貝塚、大泊浜貝塚、12世紀末～13世紀：ビロースク遺跡、伊波後原遺跡）、Ⅰ、Ⅱ群共伴遺跡(12世紀末～14世紀：稲福遺跡、伊良波東遺跡、ヒニグスク)、Ⅱ群出土遺跡（13世紀末～14世紀:今帰仁城跡、14～15世紀：佐敷グスク）と消費遺跡における出土状況を把握し、ⅠからⅡ群への段階的変化を示している。調査資料の蓄積が少ない時点での分類であるが、習うべきところが多い。

参考・引用文献

伊仙町教育委員会　1985 『カムィヤキ古窯跡群Ⅱ』 伊仙町文化財調査報告書５

伊仙町教育委員会　2005 『カムィヤキ古窯跡群Ⅳ』 伊仙町文化財調査報告書12

金武正紀　1986 「沖縄の南島須恵器」 南島の須恵器シンポジウム資料

新里亮人　2003 「琉球列島における窯業生産の成立と展開」『考古学研究』49-４

今帰仁村教育委員会　1991 『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』 今帰仁村文化財調査報告書第14集

第３節　出土遺物の組成

宮城弘樹・与那嶺俊（今帰仁村教育委員会）

1. 陶磁器の出土量について

今回報告分の今帰仁城跡周辺遺跡の陶磁器は推定個体数で総数3,783点（グスク時代相当の遺物の推定個体数）を数える（第１表・第４表）。この中で今帰仁ムラ跡とする集落にかかる屋敷地１・３・４の出土陶磁器は、それぞれ屋敷地１が871点、屋敷地３が1,489点、屋敷地４が1,000点となり屋敷地３が圧倒的に多いことが分かる。１㎡あたりの包蔵量で考えると、おおよそ屋敷地１が1.09個、屋敷地３が2.48個、屋敷地４が3.08個と屋敷地４が面積に比して多く出土していると言える。一方、その他の屋敷地以外ではⅠ区が0.96個と屋敷地１と近接した出土状況となる。また、Ⅳ区や道跡では0.1個程度となっている。

	屋敷地１	屋敷地３	屋敷地４	その他Ⅰ区	その他Ⅳ区	その他道跡	その他ハラクブ	計
出土陶磁器数(個)	871	1,489	1,000	287	100	17	19	3,783
調査面積(㎡)	800	600	325	300	700	150	150	3,025
１㎡あたりの出土量(個)	1.09	2.48	3.08	0.96	0.14	0.11	0.13	1.25

第１表　今帰仁城跡周辺遺跡出土陶磁器量比較表

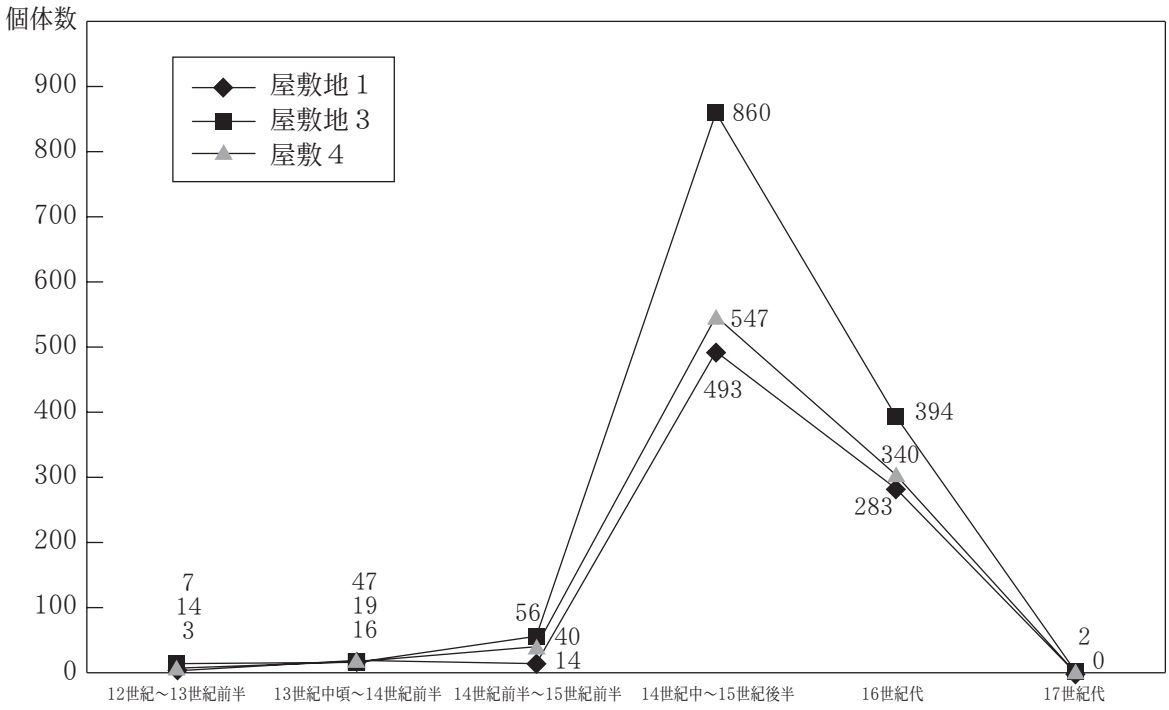
2. 出土陶磁器の年代構成

陶磁器の編年的研究は比較的進んでいるため、今帰仁城跡周辺遺跡の年代を考える上では陶磁器の年代観が遺跡の年代を考える上で最も参考になる。このためそれぞれ分類された陶磁器に帰属年代を与えて遺跡の始期→隆盛→終焉について見ることができる考えられる。遺物個々の年代的な位置づけについては諸種の研究があるが、年代傾向を見るために青磁碗・皿、白磁碗・皿、青花碗・皿を用いて検討した。今回の年代の評価は青磁・白磁を金武編年（金武1990）、大宰府編年（山本2000）、新垣・瀬戸分類（新垣・瀬戸2005）、青磁は上田編年（1982）、白磁は森田編年（1982）、青花は小野編年（1982）などを参考に用いた。ここでは概括して今帰仁城跡主郭の時期区分（金武ほか1991）のⅠ期以前（12世紀～13世紀前半）、Ⅰ・Ⅱ期（13世紀中頃～14世紀前半）、Ⅲ期（14世紀前半～15世紀前半）、Ⅳ期前半（14世紀中～15世紀後半）、Ⅳ期後半（16世紀代）、Ⅴ期廃城（17世紀代）で区分して数値化、グラフにした。数値化することで陶磁器の複雑な帰属時期を平板にした可能性は否めないが、遺跡の年代を考える上で参考になると考える。

第１図は時期毎の陶磁器の推定個体数を示している。この結果、屋敷地それぞれで大きな変化は認められなかった。いずれの地点も概ね時期を同じにして消長したものと考えられる。時期毎に区分した結果で見ると、成立期は12世紀から13世紀頃と考えられるが、この時期の陶磁器は極めて少量である。次代の13世紀後半から14世紀前半は屋敷地３・４の陶磁器出土量は増えている。しかし最も陶磁器を多く出土したのは14世紀中頃から15世紀後半で、次いで16世紀代となる。このことからこの時期に盛期を迎えたと考えられる。上位五種の陶磁器を下記に示した（示した個体数は３つの屋敷地の合計）。

無文直口碗（新垣・瀬戸編年15世紀中頃～16世紀）推定611個体
無文外反碗（金武分類14世紀～15世紀）：推定551個体
線刻細蓮弁文碗（金武分類15世紀～16世紀）：推定406個体
雷文帯碗（金武分類14世紀後半～15世紀前半）：推定217個体
青花碗（小野分類C群15世紀後半～16世紀）：推定107個体

この上位とも概ね15世紀を前後する時代を中心としている。遺跡の終焉については17世紀前半にあたる資料が皆無と言っていいことから、1609年の実質的な廃城と時を同じくして陶磁器の供給がなくなったものと考えてほぼ間違いない。即ち各屋敷の廃絶もこの時期にあったことが出土陶磁器から看取できる。



第１図　時期毎の陶磁器個体数

3. 用具としての陶磁器組成

陶磁器の機能組成を見るためにそれぞれの焼き物を下記のように区分して概観してみたい。

食膳具＝碗・皿・大皿・盤・杯・小杯・鉢　　調理具＝鍋・擂り鉢・深鉢

貯蔵具＝壺・壺の蓋・小型壺・甕　　暖房・明かり＝燈明皿・火鉢

その他＝酒会壺・瓶・器台・置物・合子・水注・急須・花鉢・等

その結果、各屋敷地毎に概括したが大きな偏りは認められなかった（第２表）。そこで、全体としてその傾向を紹介する。陶磁器の傾向は約93％が食膳具で占められ、そのうち中国産の青磁の碗・皿・盤、白磁の碗・皿、青花の碗・皿の７器種だけで90％を越えている。貯蔵具は陶磁器全体の４％に留まる。しかしいずれの器種もほぼ中国産の陶磁器が主体となるが、貯蔵具ではタイ褐釉陶器壺が30％を占め定量得られており、特徴的な傾向を示している。

調理具や暖房具は陶磁器全体の0.5%以下と少量の出土となる。その中で屋敷地４だけが他の屋敷の倍近い比率を有しているが、これが屋敷毎の機能差を示すものであるのかは判然としない。最後にその他の資料であるが、ここには瓶や磁器の壺などが含まれている。様々な陶磁器があるが陶磁器全体ではその出土量は多くない。

	屋敷地1	屋敷地3	屋敷地4	その他Ⅰ区	その他Ⅳ区	その他道跡	その他ハラクブ	計
食膳具	834 95.75%	1377 93.04%	921 92.28%	260 90.59%	88 88.00%	16 94.12%	11 57.89%	3,507 93.64%
調理・煮沸具	1 0.11%	2 0.14%	4 0.40%	1 0.35%	3 3.00%	0 0.00%	0 0.00%	11 0.29%
貯蔵具	23 2.64%	65 4.39%	43 4.31%	12 4.18%	6 6.00%	0 0.00%	7 36.84%	156 4.17%
暖房・明かり	1 0.11%	4 0.27%	1 0.10%	1 0.35%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	7 0.19%
その他	12 1.38%	41 2.77%	31 3.11%	13 4.53%	3 3.00%	1 5.88%	1 5.26%	102 2.72%
	871	1,489	1,000	287	100	17	19	3,783

その他内訳	屋敷地1	屋敷地3	屋敷地4	その他Ⅰ区	その他Ⅳ区	その他道跡	その他ハラクブ	計
茶道具？	4	4	6	2				16
元青花		3						3
器台			1					1
置物					1			1
合子	2	1	3	3				9
酒会壺	1	6	3					10
水注	2		2	1				5
壺		2	5	1	1			9
花鉢	1	2	1					4
瓶	2	19	10	6		1	1	39
不明		4			1			5

第２表　各屋敷地出土陶磁器の機能組成

4. 生産地別に見た陶磁器組成

陶磁器を産地毎に区分するとグスク土器やカムィヤキ須恵器を南西諸島の在地産と考えると、中国、タイ、ベトナム、高麗、日本本州の５つの地域から搬入される陶磁器によって構成されている（第３表）。

	在地	中国	タイ	ベトナム	高麗	日本	総数
屋敷地１	2 0.23%	861 98.85%	7 0.80%	1 0.11%			871
屋敷地３	8 0.54%	1453 97.45%	22 1.48%	4 0.27%	2 0.13%		1,489
屋敷地４	5 0.50%	970 97.00%	22 2.20%	1 0.10%		2 0.20%	1,000
その他	7 1.65%	408 96.45%	8 1.89%				423
合計	22 0.58%	3692 97.54%	59 2%	6 0.16%	2 0.05%	2 0.05%	3,783

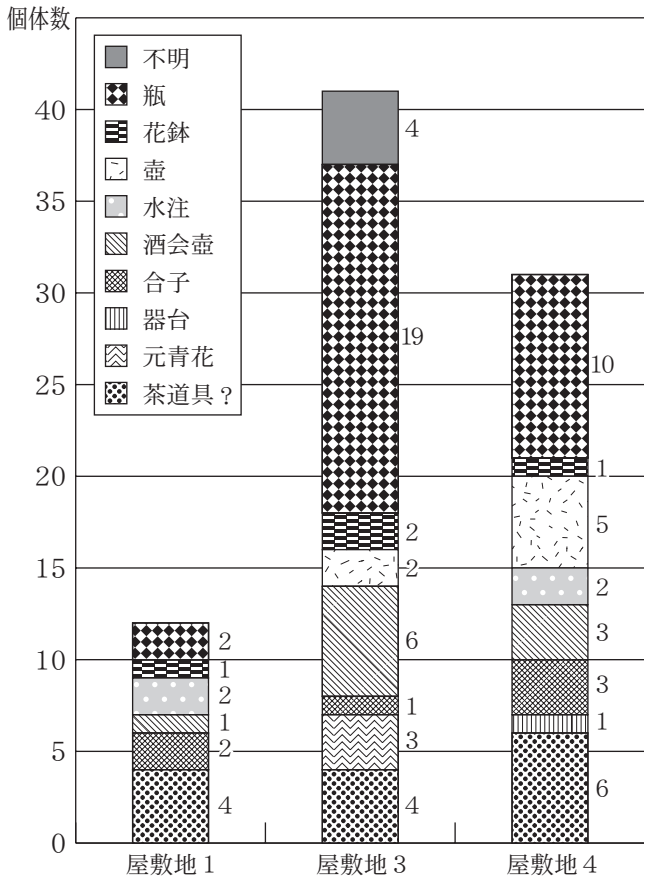
第３表　産地別陶磁器組成

屋敷毎に傾向を見たが大きな偏在は認められない。ここでも今回報告分の資料全体をもって見ていく。先ず中国産の陶磁器資料が約97%と圧倒的に他の地域を凌駕している。中国の資料も景徳鎮や龍泉などの窯や福建や泉州などの地域毎にも区分することが可能かと考えるがここでは一括した。他方、在地の資料は0.6％と低率となっている。時期的には土器やカムィヤキが14世紀頃までの製品でやや古式の資料であることを鑑みると、15世紀以降の食器が中国からの搬入品で構成されていたことがうかがえる。他方、それ以外ではタイ産の資料が約1.5％、ベトナムが約0.2％、高麗が0.05％、日本本州（備前）が0.05％と沖縄島の北方よりタイ・ベトナムなどの東南アジア地域の資料が多いことがうかがえる。しかし、これはあくまでも陶磁器から見たもので、金属製品等の他の遺物は北から搬入されている可能性も考慮する必要があることは断るまでもない。

5. 優品の陶磁器

さて上述の検討に加えて貿易陶磁器を評価する場合、食器のような一般財とは異なる器種について考えることも重要である。具体的には特殊な用途を持ったものや、一定の付加価値をもって流通した高級品、特殊品である。例えば、元青花や青磁酒会壺の大型の製品などがこれにあたる。これらの製品はグスク時代の遺跡で一定量出土が認められるものの、集落遺跡よりはグスク、グスク内でもより中核的な機能を果たしたと考えられる主殿部分に近いところで多く見られる傾向にあると思われる。特に今帰仁城跡主郭では調査・整理中にかなり多く出土しているという印象を得ているが、残念ながら報告においてはその数値化を行えていない。

一方、今帰仁ムラ跡でも一般の食膳具とは異なる優秀品が散見的であるが出土している。山本信夫氏は、時期によって異なった種類で構成されるとされるが、Ａ～Ｃの水準によって出土陶磁器の評価基準を与えている（山本2003）。



第２図　各屋敷地出土優品の陶磁器

レベルＡ＝高級品、特殊品、食以外の用具で威信材として評価できるもの。
レベルＢ＝流通量はＡより多いが、一般食膳用磁器の10分の１以下で、比較的上質の種類。

レベルＣ＝一般質の陶器で、定番＝汎用セットとしてランクづけするもの。

上述のランクを当該遺跡のどの遺物に充てるかは大いに検討を要する。ここでは暫定的にこれまでの調査に係わった経験からレベルＡ・Ｂにランクされると考えた元青花・茶道具？（天目碗・急須・茶入れ）・瓶・酒会壺・水注・合子・器台などの製品について屋敷地毎に出土量を集計した（第２図）。屋敷地１・３・４を比較するとそれぞれの器種が少量づつだが出土していることを指摘できる。また量的には屋敷地３が多く、次いで屋敷地４となるのは全体的な出土傾向と同じである。興味深いのは屋敷地３のみから元青花が得られている点を指摘しておきたい。他方、屋敷地４では屋敷地３に比べて茶道具、器台、合子、水注が多く得られている。この結果が屋敷間の差を示しているものかは今後更に検討を重ねたい。

6. 陶磁器以外の遺物

今帰仁城跡周辺遺跡の人工遺物は約93％が陶磁器である。その一方で残り約７％が玉、銭貨、金属製品、石製品、貝製品、骨製品で構成される（第５表）。玉はガラス製のビーズが多く出土している。屋敷地３で22点と遺跡全体の84％出土しており他を圧倒する。銭貨は約75％が中国の渡来銭で構成され無文銭が残りを占めている。金属製品の多くは現況をほとんど保っていないため約40％の出土品が用途不明で判然としない。用途が判別できる製品を見ると釘が46％と最も多い。他は日常的な道具と推量される刀子や鋏、また武器の鏃なども３％前後で少量出土する。やや偏って出土している資料として屋敷４では装飾品の簪が出土しており特徴的である。最後に石器は約90％が砥石であったが、硯なども屋敷地３では得られている。

7. 植物遺体の組成

今回調査では試みとしてフローテーション法による炭化種子の回収を行った。しかしあくまでも実施したのは一部のサンプリングである。具体的には屋敷地１が包含層から、屋敷地３は土坑（SK520・SK92）から、屋敷地４も土坑（SK102）のものであった。包含層からサンプリングした屋敷地１よりも土坑からサンプリングした屋敷地３・４が比較的多く得られるようである。特にSK92はサンプルの量に比して植物遺体の数は多い。

植物遺体の組成は、大きな傾向としてコムギが33％～48％、アワが36％～54％と高い比率で確認されている。他方イネはほとんど出土しておらず、最も高い比率で得られた屋敷地３の土坑２つでも４％前後とコムギやアワに比べると少ない。

	屋敷地１	屋敷地２		屋敷地４	（ＮＮＩ）
	包含層	SK520	SK92	SK102	計
分析量（ﾘｯﾄﾙ）	49	24	20	50	143
コメ	1 0.6%	3 4.2%	11 3.7%	6 1.7%	21 2.4%
コムギ	58 36.3%	24 33.8%	145 48.5%	114 33.0%	341 39.0%
オオムギ	20 12.5%	5 7.0%	17 5.7%	18 5.2%	60 6.9%
アワ	58 36.3%	38 53.5%	119 39.8%	187 54.2%	402 45.9%
キビ	5 3.1%	1 1.4%	3 1.0%	20 5.8%	29 3.3%
カヤツリグサ科	17 10.6%	0 0.0%	2 0.7%	0 0.0%	19 2.2%
マメ科	1 0.6%	0 0.0%	2 0.7%	0 0.0%	3 0.3%
同定不明	196	127	315	467	1,105
植物遺体数計（粒）	356	198	614	812	1980
植物遺体分布密度（遺体数／リットル）	7.3	8.3	30.7	16.2	13.8

第４表　各屋敷地出土植物遺体

8. まとめ

今帰仁ムラでの陶磁器包蔵量は屋敷地内の中核的な地域では１㎡あたりの陶磁器出土個数は約３～2.5個程度で、少し離れた屋敷地に隣接する平坦地では約１個前後の出土となるようである。他方岩盤の露頭する地域や道などでは陶磁器はほとんど出土しなくなると言える。産地から見ると97％が中国産のもので占められ、続いてタイ産の陶磁器となるようである。ベトナムや高麗、日本本州の製品は１％以下と極少量であるが出土している。年代傾向は14世紀後半から15世紀に集中している。機能毎に見ると90％以上が食膳具で占められている。続いて貯蔵具になるが、調理具や暖房具・燈明皿などは１％以下と少ない。その他の器種でまとめた瓶・水注・酒会壺などの珍品・優品は各屋敷地で10～30個体程度見られる。また、陶磁器以外も興味深い資料が多く得られており今後比較検討を要する。

自然遺物については植物遺体のみ筆者によって分析を行った。専門の知識が少ないため同定した植物遺体の結果については多少の誤謬も予測されるが、それでもある程度の出土傾向を示すことができたと考える。その傾向はコムギ・アワの雑穀類が多出しているのが特徴的である。シイナグスク出土資料を分析した高宮広土氏は「沖縄県中南部の雑穀農耕と、奄美沖縄県北部の稲作農耕を想定（高宮2004)」する。しかし、今回の今帰仁ムラ跡の出土状況からは稲作農耕を旺盛に授与した集団とは考えられない。志慶真門郭の調査や主郭の植物遺体については数量化されていないが、イネが多く出土する印象は強い。以上の状況を考えると、遺跡の隆盛期である14世紀中頃から16世紀頃には城内と城外の穀物の消費に差があったのではないかと考えられる。他方、高宮氏が想定した地域差は今帰仁城跡の成果から見ると否定的に捉えざるを得ない。もちろん今帰仁城に監守が居住し監守の影響下にあったと考えれば、高宮氏の指摘する中南部の雑穀農耕の消費者の一集団と捉えることも可能であるが、今回のケースからは地域差よりは時代的な差を含めより複雑な状況を示しているものと考えられる。

以上、出土遺物についての統計的所見をまとめた。今後、今帰仁城跡内の出土資料や村内の各グスク時代遺跡についても同様の量把握を行い、比較検討することが重要である。

参考文献

新垣力・瀬戸哲也　2005年「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理　付14～16世紀の青磁の様相整理メモ」『紀要　沖縄埋文研究』第３号　沖縄県立埋蔵文化財センター

上田秀夫　1982年「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁器研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

小野正敏　1982年「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

金武正紀　1990年「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』No.320　ニュー・サイエンス社

金武正紀・ほか　1991年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集　今帰仁村教育委員会

高宮広土　2004年「シイナグスク出土の植物遺体」『シイナグスク』今帰仁村文化財調査報告書第17集　今帰仁村教育委員会

山本信夫　2000年『大宰府条坊跡XV －陶磁器分類編－』大宰府市教育委員会

山本信夫　2003年「12世紀前後陶磁器から見た持躰松遺跡の評価－金峰町出土の焼き物から追求する南海地域の貿易・流通－」『古代文化』Vol.55　財團法人　古代學協会

森田勉　1982年「14～15世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁器研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

				屋敷地１	屋敷地３	屋敷地４	その他Ⅰ区	その他Ⅳ区	その他道跡	その他ハラクブ	計	率		
												細別	種別	産地別
陶磁器	在地	土器	鍋・鉢・壺・等	1	4	4	1	2			12	0.32%	0.32%	0.58%
		カムィヤキ	壺・鉢・甕・等	1	1		1	1		1	5	0.13%	0.13%	
		瓦質土器	蓋・不明		3	1		1			5	0.13%	0.13%	
		沖縄産陶器	壺							1	1			
	中国	青磁	碗	494	850	563	133	37	6	5	2,088	55.19%	72.03%	97.59%
			皿	129	160	85	54	18	5	1	452	11.95%		
			盤	22	66	25	6	8	2	3	132	3.49%		
			杯	5	6	5	8				24	0.63%		
			香炉	2		4	1				7	0.19%		
			瓶		3	4	2			1	10	0.26%		
			器台			1					1	0.03%		
			酒会壺（身・蓋）	1	6	3					10	0.26%		
			置物					1			1	0.03%		
		白磁	碗	21	30	30	8	4	1		94	2.48%	8.43%	
			皿	52	65	46	11	2		1	177	4.65%		
			杯	7	9	7	5	1	1		30	0.79%		
			燈明皿	1	4		1				6	0.16%		
			壺		1	4	1				6	0.16%		
			瓶		6				1		7	0.19%		
		青花	元様式		3						3	0.08%	13.64%	
			碗	60	139	109	16	14	1	1	340	8.99%		
			皿	38	38	41	18	2		1	138	3.65%		
			大皿	1		1					2	0.05%		
			杯・小杯	3	5	5	1				14	0.37%		
			壺			1		1			2	0.05%		
			瓶	1	4	2	4				11	0.29%		
			鉢			1					1	0.03%		
			水注	1							1	0.03%		
			合子（身・蓋）	2	1		1				4	0.11%		
		青白磁	瓶	1							1	0.03%	0.05%	
			合子			1					1	0.03%		
		天目	碗	1	2	1	1				5	0.13%	0.13%	
		白濁釉陶器	壺		2						2	0.05%	0.05%	
		褐釉陶器	茶入れ	1	1						2	0.05%	2.59%	
			急須（身・蓋）		1	1					2	0.05%		
			小型壺	4	15	11	4	2			36	0.95%		
			大型壺	10	20	10	4	2		3	49	1.30%		
			長胴壺	1							1	0.03%		
			擂り鉢			1		1			2	0.05%		
			深鉢		1	1					2	0.05%		
			花鉢	1	2	1					4	0.11%		
		五彩	碗		2	1		1			4	0.11%	0.11%	
		瑠璃釉	碗	1	2	1		1			5	0.13%	0.24%	
			瓶		3	1					4	0.11%		
		翡翠釉	皿		1	1					2	0.05%	0.13%	
			壺		1						1	0.03%		
			瓶		2						2	0.05%		
		緑釉	不明		2			1			3	0.08%	0.08%	
		三彩	水注	1		2	1				4	0.11%	0.11%	
	タイ	土器	蓋	2	1		1				4	0.11%	0.13%	1.56%
			壺		1						1	0.03%		
		鉄絵	合子			2	2				4	0.11%	0.11%	
		褐釉陶器	大型壺	3	17	15	1			2	38	1.00%	1.32%	
			中型壺	2	2	2	1			1	8	0.21%		
			小型壺			1					1	0.03%		
			瓶		1	2					3	0.08%		
	ベトナム	白磁	碗	1	4						5	0.13%	0.13%	0.16%
		青花	瓶・その他			1					1	0.03%	0.03%	
	高麗	青磁	碗		2						2	0.05%	0.05%	0.05%
	備前	焼締め	擂り鉢			2					2	0.05%	0.05%	0.05%
	肥前	染付	碗						1		1			
陶磁器			総計	871	1,489	1,000	287	100	18	21	3,786			
玉類			勾玉	1							1			
			丸玉・小玉	2	22	2					26			
銭貨			中国銭（有文）	2	6	2					10	76.92%		
			無文銭		2	1					3	23.08%		
			寛永通寶	1							1			
金属製品		鉄製品	釘	9	21	35	5				70	46.36%		
			刀子			4					4	2.65%		
			鏃		2	2		1			5	3.31%		
			鋏	1							1	0.66%		
			その他・不明	3	14	36	4	1	1		59	39.07%		
		鉄製品	推定・近現代	2	11	2	4	8	2		29			
		銅製品	座金・飾り金物等		2	2					4	2.65%		
			鋲等	1	1	1					3	1.99%		
			簪・装飾品			3					3	1.99%		
			その他・不明		1	1					2	1.32%		
石製品			砥石	1	4	11	1				17	89.47%		
			硯		1						1	5.26%		
			錘		1						1	5.26%		
貝製品			タカラガイ製漁網錘？	25	5	9					39			
骨製品			骨ヘラ		1		1				2			
			歯ブラシ						1		1			
陶磁器以外の人工遺物				48	94	111	15	10	4		282			

※網掛け部分は今帰仁城跡周辺遺跡の主体時期である12～16世紀以外の近世期以降の遺物
※遺物の比率については12～16世紀のものだけを対象としている。

第５表　出土遺物集計表

第４節　今帰仁城跡周辺遺跡出土脊椎動物遺体

名　島　弥　生（慶応義塾大学大学院）

はじめに

今帰仁城跡は、沖縄島本部半島北部中央に位置する13世紀～17世紀初頭の遺跡であり、沖縄三山時代には北山王の居城であった。今回発掘調査が実施された今帰仁城跡周辺遺跡はその北西部に隣接し、同時期（13世紀～16世紀）に城に仕える武士階級の人々が居住していたと想定されている。

本調査では、Pick up法とFloatation法によって、食糧残滓と考えられる多くの動物骨資料が得られた。Pick up法検出資料には、出土地点を記録して取り上げた資料（Dot ナンバー記載資料）と調査区ごとに層位一括で採取した資料（一括 No 記載資料）があり、魚類117点、獣類921点、総数1038点の資料が確認できた。Floatation法は、Ⅴ区検出の土坑（SD102）より採取した約50リットルの土壌を、乾燥後、専用水槽に沈め、沈殿してフルイ（２㎜メッシュ）にかかったもの（Heavy Float）を回収し、骨片の抽出を行った。本報告ではその上で部位同定の可能な資料を抜き出し、分析対象とした。その結果、魚類652点、獣類２点の資料を確認できた。なお浮遊させ回収した資料（Light Float）については、未分析である。

これらの動物骨資料は、今帰仁城に仕えた人々の動物利用を示す貴重な資料である。今帰仁城跡ではこれまで、主郭出土の動物骨資料についての報告がなされている。本報告では出土動物種ごとに出土状況を記述し、その上で今帰仁城跡主郭出土資料との比較を行い、両者の相違点について検討したい。

1. 魚類

魚類はPick up法でⅠ・Ⅱ区より６点、Ⅲac区より64点、Ⅴ区より47点、Floatation法でⅤ区より652点、合計769点検出された。このうち同定可能であった資料は、Pick up法採取資料でⅠ・Ⅱ区より３点、Ⅲac区より17点、Ⅴ区より10点、Floatation法採取資料でⅤ区より44点、合計74点である。確認された魚種は、サメ類、ハタ科、アジ科、クロダイ属、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、ニザダイ科、モンガラカワハギ科、ハリセンボン科の10種である（表１～３）。このうちサメ類、アジ科、クロダイ属、フエフキダイ科はPick up法のみで、ハタ科、モンガラカワハギ科はFloatation法のみで検出された。Floatation法ではこのほか、体長15㎝以下と想定される径２㎜以下の椎骨や、モンガラカワハギ科のものと思われる鱗が多数抽出されている。以下魚種ごとに出土点数、出土割合（%MNI）、サイズについて報告する。

①　サメ類　（Lamniformes fam. indet）

Ⅴ区で椎骨が２点出土している（表２）。椎体の最大径は27㎜と21㎜である。最小個体数（MNI）は２で、出土割合は8.3%である（表5，図２）。城跡主郭では15点（MNI）出土しているが、出土割合は2.2%である。

②　ハタ科（Serranidae gen. indet）

Ⅴ区でFloatation法により左歯骨が１点検出されている（表３）。出土割合は4.2%である（図1，2）。連合部の高さ（DH）は３㎜で、全長20㎝以下の小型個体と推定される。城跡主郭では前上顎骨長40~50㎜で、全長50㎝以上と推定される大型個体が多く出土しているが、本調

査では確認されなかった。

③　アジ科（Carangidae gen. indet）

Ⅲac区より尾椎骨が１点出土している（表２）。本資料以外、回遊性魚類は確認されていない。城跡主郭では回遊性魚類としてダツ科とシイラが報告されているが、各１点ずつの出土でやはり少ない。回遊性魚類の利用はサンゴ礁魚類に比べ、両遺跡ともに乏しかったと考えられる。

④　タイ科クロダイ属　*（A canthopargas sp.）*

Ⅴ区より左関節骨が１点出土している（表２）。本資料以外、内湾・汽水性魚類は確認されていない。城跡主郭ではミナミクロダイが36点、ヘダイが１点、ボラ科が１点（MNI）出土しているが、全体にしめる割合は5.3%である。内湾・汽水性魚類も回遊性魚類同様、主要な捕獲対象とはなっていなかったと考えられる。

⑤　フエフキダイ科（Lethrinidae gen. indet）

Ⅰ・Ⅱ区より右前上顎骨が１点、Ⅲac区より右口蓋骨、左主鰓蓋骨が各１点、合計３点出土している(表２)。このうち右前上顎骨と右口蓋骨は、フエフキダイ属 *(Lethrinus sp.)* に属する。出土割合は4.2%である（図1, ２）。前上顎骨の形態はハマフエフキ、イソフエフキ等に近く、前上顎骨長は27㎜で全長40㎝前後の個体と考えられる。本種は城跡主郭においては全体の23.1％をしめているが、本遺跡では少ない。サイズについても、主郭出土資料は前上顎骨長35~40㎜、全長60㎝以上のものが主体をしめるが、本遺跡ではそうした大型個体は確認できなかった。

⑥　ベラ科（Labridae gen. indet）

本種は資料の採取方法によって、出土数に著しい差異が見られた。Pick up法では、Ⅲac区より下咽頭骨がわずかに２点確認されたのみであるが、Floatation法では前上顎骨、歯骨、上顎骨、上・下咽頭骨が合計21点得られた（表2, ３）。両者を合わせた出土資料数は、全魚種の中で最も多く、最小個体数は７で全体の29.2％をしめる（表４, ５, 図1, ２）。

Pick up法検出資料は、下咽頭骨幅が44㎜、34㎜で、体長30~40㎝と推定される（表６①）。他方、Floatation法検出資料は、下咽頭骨幅が４㎜、５㎜、歯骨咬合面長が7.3㎜、16㎜で、体長は10~20㎝と推定される（表６①, ②）。Floatation法で検出された前上顎骨、歯骨は、形態的にもヤマブキベラなど小型のベラ科に近い。従って本種は、大型個体と小型個体の双方が捕獲されていたと考えられる。特にFloatation法出土資料が多いことから、小型個体の捕獲が主体をしめていた可能性が高い。

城跡主郭においては、ベラ科出土割合は全体の18％（％ MNI）にとどまっており、本遺跡に比べ少ない。しかし本遺跡においてもPick up法検出資料のみで分析した場合には、全体の17％となる（図1, ２）。従って主郭においてベラ科の出土割合が少ないのは、小型個体がカウントされていないことによる可能性が考えられる。また主郭出土の下咽頭骨は、大部分が幅30㎜以上となっているが、この点についても採取方法の差異が大きく影響している可能性がある。

⑦　ブダイ科（Scaridae gen. indet）

Pick up法でⅠ・Ⅱ区より２点、Ⅲac区より７点、Ⅴ区より６点、前上顎骨、歯骨、上・下

咽頭骨が検出されている（表２）。Floatation法でもＶ区より９点、前上顎骨、歯骨、上・下咽頭骨が検出されている（表３）。ブダイ科の出土量は、全出土魚種中ベラ科に続いて２番目に多く、最小個体数は６となり全体の25%をしめる（表5，図２）。

Pick up法、Floatation法で検出した資料は、それぞれ大きさが異なっている（表７①，②）。Pick up法検出資料は、上咽頭骨歯板面幅が５~６㎜、歯骨咬合面長が26㎜、27㎜で、体長35~40㎝の中型個体であると推定される。他方Floatation法検出資料は、上咽頭骨歯板面幅が１~２㎜、歯骨咬合面長が７㎜と極めて小さく、体長20㎝以下と推定される。従って本種については、少なくとも中型個体と小型個体の両方を捕獲していたと考えられる。

本種は城跡主郭においても全体の約40%（% MNI）をしめており、推定体長40㎝以上の資料が多数確認されている。しかし主郭出土資料では体長20㎝以下の小型資料は、検出されていない。これはFloatation法、あるいは水洗選別法を用いていないことによると考えられる。

⑧　ニザダイ科　（Acanthuridae gen. indet）

Pick up法でⅢac区より尾椎が１点、Floatation法でＶ区より腹椎が１点、尾椎が２点、尾部鱗が１点検出されている（表2，３）。このほかおそらく本種のものと思われる歯骨が１点と、その遊離歯と考えられる資料が数点抽出されている。Floatation法で確認された尾椎２点は、径２㎜以下で体長15㎝未満の小型個体と推定される。出土割合は4.2%であるが、出土資料が極めて小さいので実数はより多い可能性が高い。本種は城跡主郭では報告されていないが、採取方法の精度が影響しているものと考えられる。

⑨　モンガラカワガハギ科（Balistidae gen. indet）

モンガラカワハギ科は、Floatation法によってのみ検出されている。Ｖ区より前上顎骨、歯骨、第１背鰭棘、腹椎骨が合計８点出土し（表３）、最小個体数は２で全体の8.3%をしめている（図1，２）。大きさは前上顎骨長10.1㎜のものが確認されていることから、体長20㎝以下の小型個体と考えられる。このほか本種のものと思われる鱗が、109点出土している。（表３）。城跡主郭では大型の歯骨が１点出土しているのみで、全体のわずか0.1%である。本種の出土状況についてもベラ科、ニザダイ科同様、採取方法の違いが影響している可能性がある。また本種についても、小型個体の捕獲が主体をしめていた可能性が考えられる。

⑩　ハリセンボン科　（Diodontidae gen. indet）

Pick up法でⅢac区より歯板４点、Ｖ区より棘１点が確認されている（表２）。Floatation法ではＶ区より棘が１点検出されているのみである（表３）。最小個体数は２で、全体の8.3%をしめている（表5，図２）。計測可能な下歯板２点は、いずれも咬合面長40㎜程度である。城跡主郭では30点（MNI）出土しているが、割合は４％にとどまっている。

⑪　小型魚類

本調査ではFloatation法により、径２㎜以下の椎骨が477点検出されている（表３）。これらは体長15㎝未満の小型魚類のものと考えられる。形態的にはニザダイ科に近いものが見られるが、比較標本不足のため正確な同定はできなかった。しかしながらFloatation法採取資料から、主に小型個体が捕獲されていたと推定されるベラ科、モンガラカワハギ科、ニザダイ科など小型のサンゴ礁魚類に属する可能性が高いと考えられる。

2. 獣類

獣類はPick up法でⅠ・Ⅱ区より98点、Ⅲac区より356点、Ⅴ区より467点、Floatation法でⅤ区より２点、合計923点が検出されている。このうち鳥類は７点、爬虫類が２点、哺乳類は277点である。鳥類は全て部位の同定できない骨片であるため、種の同定はおこなわなかった。爬虫類はウミガメ科の甲骨片が２点である。哺乳類で同定可能であった資料は、ネズミ科２点、マイルカ科１点、ウマ53点、リュウキュウイノシシ／ブタ38点、ウシ94点、ヤギ５点の合計193点である（表1, 8～15）。このほかウシ、ウマについては、いずれかに属すると考えられる遊離歯、四肢骨、肋骨等の破片が84点出土している（表14）。以下、動物種ごとに出土点数、出土割合（％MNI）、推定年齢、推定体高等について報告する。

①　ウミガメ科(Chelonidae gen. Indet)

Ⅴ区より背甲骨椎骨板と思われる資料が、２点出土している（表14）。最小個体数は１である（表17）。城跡主郭では四肢骨も出土し、最小個体数で９点確認されているが、本遺跡では極めて少ない。

②　ネズミ科（Muridae gen. indet）

Floatation法でⅤ区より左下顎骨１点、左下顎切歯１点が検出された（表15）。本種は食料残滓でない可能性もある。数量は不明であるが、城跡主郭でも出土している。

③　マイルカ科 (Delphinidae gen. indet)

Ⅲac区より胸椎骨が１点出土している（表14）。胸椎骨の側方突起下部には、刃物で切られたような痕跡がある（図版３）。城跡主郭においても２点（MNI）出土している。

④　ウマ *(Equus caballus)*

Ⅰ・Ⅱ区より４点、Ⅲac区より15点、Ⅴ区より34点出土している（表８）。このうち四肢骨は25点、遊離歯は21点、その他は７点である。各地区で全同定標本数（NISP）の25~30％をしめており、出土割合に偏りは見られない（表16, 図３）。また地区による出土部位の偏りも認められない。最小個体数は四肢骨、遊離歯の所見を総合して検討した場合４で、全体の22％をしめておりウシに次いで多い（表17, 図４）。

四肢骨は上腕骨、橈骨、尺骨、中足骨等が出土している（表８①）。出土量に部位による偏りは認められない。資料の一部には、骨幹部に強い打撃を加えて割ったと考えられる痕跡が残る(図版５－１)。切痕は見られない。Ⅲc区より近位端のはずれた橈骨が、１点出土している。Cornwall（1956）によれば、ウマの橈骨近位端は1.5歳で癒合する。従って本資料は、1.5歳以下の極めて若い個体であると考えられる。本資料を含め橈骨２点と中足骨１点については、Driesch（1976）に従ってBPを計測し、その値に基づき西中川・松元（1991）、林田・山内（1957）の方法を用いて、推定体高を求めた。この結果、本資料は88.88㎝、他の２点は112.82㎝、111.15㎝となった（表９）。後者２点は平均的なトカラ馬よりやや小さいが、４歳以上の成馬であると考えられる。前者は推定体高から考えても子馬である可能性が高い。

遊離歯は上顎歯が７点、下顎歯が14点出土している（表８②, ③）。上顎歯４点、下顎歯４点については、歯根中心部からの高さ(cant)を計測し、西中川・松元（1991）の方法を用いて、年齢推定をおこなった。その結果、出土資料は少なくとも４~６歳と９~10歳の２群に分かれることが明らかとなった(表８②, ③)。また３~４歳までに生え変わるdp２、dp３が出土していることから、４歳以下の個体が存在していた可能性も考えられる(Cormwall 1956)。

この結果は、Ⅲc区出土橈骨から得られた所見に合致する。従って本遺跡出土のウマは、トカラ馬よりやや小さいほどの小型馬で、少なくとも生後1.5歳以下と４~５歳、９~10歳の３群が含まれていると考えられる。

⑤　リュウキュウイノシシ／ブタ（*Sus leucrmystax riuliuanus*／*Sus scrota domesticus*）

Ⅰ・Ⅱ区より４点、Ⅲac区より13点、Ⅴ区より21点出土している（表10）。このうち四肢骨は16点、顎骨７点、遊離歯５点、その他が10点である。最小個体数は２で、全体の11%である（表17, 図４）。Ⅴ区より出土している右上顎骨、左下顎骨は、それぞれ年齢が異なっている（表10③, ④）。右上顎骨は乳臼歯dp４を残し、後臼歯M２が萌出途中である。従って年齢段階はⅠで、極めて若い個体であると考えられる（林ほか　1977）。左下顎骨は後臼歯M２が完出しており、M３歯槽部も残っているので、少なくとも年齢段階はⅡ以上と考えられる。

リュキュウイノシシ／ブタは、城跡主郭においては最小個体数で89点出土しており、全体の46%をしめている。本遺跡出土資料はこれに比べ、極めて少ないといえる。また城跡主郭おいては、Ⅰ・Ⅱ層出土四肢骨の計測値が下層に比べ著しく小さくなり、形態的にもブタに近い特徴を持つものが見られることから、少なくとも当該時期にはブタの飼育が開始されていたと考えられている。しかし本遺跡では出土資料も少なく、特に家畜化を示す事象は確認できなかった。

⑥　ウシ（*Bos taurus*）

Ⅰ・Ⅱ区より８点、Ⅲac区より31点、Ⅴ区より55点出土している（表11）。このうち四肢骨は48点、顎骨10点、遊離歯28点、その他が８点である。各地区で全同定標本数（NISP）の50%を超えている（表16, 図３）。最小個体数は四肢骨、遊離歯の観察所見を総合し検討した場合、５となり全体の27%をしめていて最も多い（表17, 図４）。

四肢骨は中手骨、中足骨、中節骨を中心に、上腕骨、橈骨、大腿骨等が出土している。一部資料にはウマと同様に、骨幹部に強い打撃を加え割った痕跡が認められる（図版６－２）。Driesch(1976）に従って、１~２箇所の計測が可能であった資料14点については、西中川・松元(1991）に従い、推定体高を求めた。その結果、110㎝代のものが10点、120㎝を超えるものが２点、110㎝未満が２点確認され、平均114.31㎝の値が得られた（表12）。最も多い111.01~119.26㎝の資料は、口之島牛や見島牛などのメスと同じか、やや大きい程度である。120㎝を超えるものは、そのオスであると考えられる（西中川　1991）。また小型の104.27㎝、105.12㎝の資料は、より若い個体である可能性が考えられる。

極めて若い個体が存在したことは、下顎骨の分析から明らかである（表11④）。Ⅲc区、Ⅴ区出土の左下顎骨No345、Dot245は、前臼歯Ｐ２～４が未萌出である。Ｐ２~４は、２~３歳で萌出する永久歯である（Cormwall 1956）。従って本遺跡出土ウシには、少なくとも２歳以下の若い個体が含まれていたと考えられる。このほかⅤ区よりＰ３、４の萌出した左下顎骨が、１点出土している。本資料は３歳以上と推定されるが、Ｐ４の咬耗段階がdであることから比較的若い個体であると考えられる（Grant 1982）。下顎骨遊離歯の咬耗段階も、２歳以降に萌出する後臼歯M３でbないしcであることから、本遺跡出土資料には比較的若い個体の多かったことが考えられる（表11③）。

⑦　ヤギ（*Capra hircus*）

Ⅰ区より左上顎歯が１点、Ⅲc区より右下顎歯が２点、左中手骨が１点、Ⅴ区より左上顎歯が１点出土している（表13）。Ⅲc区出土の左中手骨は、遠位端が未癒合である。最小個体数

は２で、全体の13％をしめる（表17, 図４）。城跡主郭でも上腕骨、橈骨、中手骨、距骨などが出土しているが、最小個体数は１である。

3. 考察

本遺跡では、Pick up法とFloatation法により、総数1692点の動物骨資料を得た。このうち276点について動物種の同定を行い、最小個体数にして17種類42点を確認できた。他方、城跡主郭遺跡においては、Pick up法のみで最小個体数にして36種類876点が確認されている。両遺跡出土資料は採取方法が異なり、出土量にも差があるので一概に比較することは難しい。しかしながらこれらの資料は、今帰仁城をめぐる人々の階級差と動物利用の関係を反映している可能性がある。本節ではそのような観点から、両遺跡出土資料の相違点について検討したい。

①　魚類

図５は、本遺跡と城跡主郭遺跡出土の脊椎動物種組成（％MNI）を示したグラフである。城跡主郭出土資料は、Pick up法のみで採取されたものであるが、魚類が全体の77%をしめている。他方、本遺跡ではPick up法採取資料で46％、Floatation法採取資料をも含めた全資料で59％と、城跡主郭より低い割合を示している。魚種別に検討した場合（図６）、著しく減少しているのはフエフキダイ科である。先述したようにフエフキダイ科は、城跡主郭においては全長60㎝を超える大型のものを中心に、全体の23.1％をしめている。一方、本遺跡では全長40㎝前後の個体が、わずか１点確認されたのみである。増加している魚種は、小型のベラ科やモンガラカワハギ科、ニザダイ科などである。この点については発掘調査時の採取方法の違いが影響していると考えられる。しかし少なくとも、本遺跡においてはサンゴ礁に生息する小型魚類の捕獲が主体をしめており、大型魚の利用頻度は城跡主郭に比べ低かったと考察できる。

小型のベラ科、モンガラカワハギ科、ニザダイ科魚類は、現在でも「イノー」と呼ばれる礁池内でおこなう追い込み網漁によって、よく捕獲されている（名島　2001, 2004）。特に体長15㎝未満の小さなニザダイ科魚類は、奄美・沖縄地方において「クシィコ」、「クチク」、「クスク」などと呼ばれ、礁池内の網漁で捕獲される最もポピュラーな魚種である（横井1989；名島　2001）。他方、大型のフエフキダイ科は、「タマン」、「クチナギ」などと呼ばれ、主に礁縁~礁斜面付近で釣り漁によって捕獲されている。大型のハタ科やフエダイ属魚類とともに「ヒシィバナイュ（礁縁付近の魚の意）」とも呼ばれ、他の魚種に比べうまい魚であると言われる。両遺跡間における魚類利用の違いは、このような魚種による捕獲域の差異や、嗜好性を反映しているのかもしれない。

②　獣類

図７は、本遺跡と今帰仁城跡主郭遺跡を含め、グスク時代に属する遺跡出土の獣類組成（％MNI）を示したグラフである。本遺跡ではウシ、ウマ類が全体の49％と主体をしめており、イノシシ／ブタ類は11%にとどまっている。他方、城跡主郭ではイノシシ／ブタ類が46％と圧倒的多数をしめており、ウシ、ウマ類は24％と少ない。ウシ、ウマ類が少なく、イノシシ／ブタ類が多いという状況は、同時期の代表的城跡遺跡である勝連城跡二の丸遺跡でも確認できた。逆にウシ、ウマ類が多数をしめる本遺跡と類似した組成は、浦添城に隣接する集落遺跡である当山東原遺跡Ⅱ－A区で認められた。勝連城跡南貝塚Ⅱ層（城跡遺跡）と銘苅原遺跡Ⅲ層（集落遺跡）では、それぞれ海獣類やネズミ科が主体をしめているが、相対的に城跡遺跡ではイノシシ／ブタ類が多く、集落遺跡ではウシ、ウマ類が多いという状況が確認され

た。このような遺跡による獣類組成の違いは、そこに居住した人々の食生活の違いを反映している可能性がある。

従来の研究成果から、沖縄島におけるウシ、ウマ、ブタなどの家畜飼育は、遅くともグスク時代には開始されたと考えられる（金子　1991；樋泉2002；松井ほか　2003)。しかしその飼育状況の詳細については、十分に検討されていない。文献史学研究によれば、沖縄島における獣肉食の主体は、17世紀までウシ、ウマ、ヤギといった草食性の家畜であり、ブタ肉食習が一般に普及するのは18世紀以降とされている（當山　1979；金城　1987)。17世紀後半、首里王府はたびたびウシの屠殺禁止令を出し、冠婚葬祭に牛肉をご馳走としてふるまうことを戒めている 註１)。一方で冊封使一行をもてなす豚肉不足に悩んだ王府は、18世紀以降養豚奨励政策をとっている 註２)。これらの文献史料に基づけば、少なくとも17世紀以前は、ブタよりもウシ、ウマ類の方が広く一般に食されていたと考えられる。

グスク時代の集落遺跡である本遺跡と当山東原遺跡Ⅱ－A区において、イノシシ／ブタ類が少なく、ウシ、ウマ類が多いという組成が確認できたことは、以上のような文献史に基づく見解に合致している。当時の一般的状況を示している可能性が考えられる。一方、今帰仁城跡主郭遺跡や勝連城跡二の丸遺跡で認められた獣類組成は、当時から中国との強い結びつきを持っていたであろう城跡遺跡ならではの特徴であるかもしれない。このことは、ブタ飼育、ブタ肉食の普及過程が人々の社会的階級によって、異なっていたことを示唆しているのではないだろうか。

本遺跡ではこのほかにウシ、ウマの大きさについても、城跡主郭とは異なる特徴を確認できた。本遺跡出土のウシは、体高104.27~126.32㎝、平均114.31㎝で、２歳以上ではあるが比較的若い個体が多い。一方、城跡主郭出土のウシは、体高101.22㎝~133.82㎝、平均117.85㎝である（西中川　1991)。年齢構成は不明であるが、少なくとも本遺跡より大型の個体が多いといえる。本遺跡出土のウマは、体高88.88㎝～112.82㎝といずれも小型で、橈骨近位端未癒合の1.5歳以下と考えられる極めて若い個体が含まれている。他方、城跡主郭遺跡出土のウマは、骨端部未癒合の資料はなく、体高102.69~127.76㎝で中型馬を含む。従って本遺跡出土のウシ、ウマは、総じて城跡主郭遺跡よりも小さく、若い個体が多いといえる。両遺跡間に見られる獣類組成、サイズの違いは、居住者の社会的階級の差異との関連性も含めた家畜飼育の実態を検討していく上で、重要な手がかりになると考えられる。

おわりに

本報告では、Pick up法とFloatation法により得られた総数1692点の動物骨資料について報告をおこなった。その上で今帰仁城跡主郭遺跡出土資料との差異を明らかにし、今帰仁城をめぐる人々の階級差と動物利用の関係性について検討した。グスク時代における人々の社会的階級差と動物利用については、他の遺跡出土資料も含め、より詳細な分析を実施しながら検討していく必要がある。このような視点から動物骨資料を整理していくことは、階層化が進み、後の琉球王国誕生へと繋がるグスク時代の社会環境を解明する上で、今後の重要な研究課題の一つとであるといえる。

謝　　辞

本報告を記すにあたり、このような貴重な資料を分析する機会を与えてくださった宮城弘樹氏はじめ、今帰仁村教育委員会の方々、出土資料同定作業にあたり、所蔵資料を快く参照させてくださった西本豊広先生（国立歴史民俗博物館)、山田格先生（国立科学博物館)、角田恒雄氏（国立科学博物館)、そして日頃より全般にわたってご指導いただいている近森正先生、佐藤孝雄先生、山口徹先生、末筆ながら心より御礼申し上げます。

註　釈

註1. 『羽地仕置』（1667）、『法式』（1697）に次のように記載がある。

『羽地仕置』（1667）

「田舎葬礼のとき、牛共殺大酒仕候儀、前々より禁止したりと雖も、頃日、猥にこれあり、
弥稠敷、申付らるべく候」

『法式』（1697）

「田舎衆中、婚礼の時、肴は豚以下たるべきこと、牛共殺す事は、向後、禁止」

註2. 尚益、尚敬王時代（1710～1751）の半世紀にわたって王府に仕えた蔡温の著書『独物語』には、当時の状況が次のように示されている。

「弐拾年以前はぶた切とて首里那覇一人宛立置候に付て諸方のぶた繁栄不仕候、依之冠船
御渡来の時、毎日ぶた弐拾匹宛唐人御馳走用に殺せ申候処御当国中のぶたにて致不足、与論島、永良部、大島、鬼界島よりぶた取寄漸く筈合為申事に候、然処弐拾年以来ぶた繁栄させ候為、首里那覇ぶた切何十人にても心次第可仕旨申し候に付、諸方のぶた致繁栄最早首里那覇都合四五十疋程毎日殺せ候得共首里那覇泊近方田舎計のぶたにて相済不足無之候」

参考文献

浦添市教育委員会2003「自然遺物」『当山東原遺跡』pp.125-129

金子浩昌1984「勝連城跡出土の脊椎動物遺体」『勝連城跡―南貝塚および二の丸北地点の発掘調査―』勝連町教育委員会pp.195-259

金子浩昌1991「今帰仁城跡出土の脊椎動物遺骸」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会pp.361-401

金城須美子1987「沖縄の肉食文化に関する一考察―その変遷と背景―」『生活文化史』11号pp.14-30

久保和士・松井章1999「家畜その２―ウマ・ウシ」『考古学と動物学』西本豊弘・松井章編　同成社pp.169-208

樋泉岳二2002「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」『先史琉球の生業と交易―奄美・沖縄の発掘調査から―』木下尚子編pp.47-66

當山眞秀1979『沖縄県畜産史』那覇出版社

名島弥生2001「サンゴ礁の漁場の利用―奄美大島小湊湾南側の事例から―」『民族考古』５号pp.51-67

名島弥生2004「琉球列島におけるサンゴ礁環境利用研究―漁撈活動復元研究を通して―」『時空をこえた対話―三田の考古学―』pp.23-29

那覇市教育委員会1997「節足・脊椎動物遺骸」『銘苅原遺跡』pp.156-167

西中川駿1991「今帰仁城跡出土のウシおよびウマの骨の計測値の比較」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会pp.402-404

西中川駿・松元光春1991　「遺跡出土骨同定のための基礎的研究―とくに在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較―」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書pp.164-188

林良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂1977「日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定」『日本獣医学雑誌』39- 2　日本獣医学会pp.165-174

林田重幸・山内忠平1957「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第６号pp.122-126

松井章・石黒直隆・本郷一美・南川雅男2003「考古遺跡出土のイノシシ／ブタ研究の現状」『動物考古学的方法による日本、および周辺地域における古代家畜史の研究』平成12年度~平成14年度科学

研究費補助金（基盤B）研究成果報告書pp.1-14.
横井謙典1989『方言でしらべる沖縄の魚図鑑』沖縄出版
Cornwall,I.W. 1956 *Bones for the Archaeologist.* J.M.Dent & Sons Ltd. London.
Driesch, A.von den. 1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sitres.* Peabody Museum Bulletin 1. Harvard:Peabody Museum.
Grrant, A. 1982 *The use of tooth wear as a guide to the age of domestic ungulates:Ageing and sexing animal bones from archaeological sites.* BAR British Series 109. pp.91-108.

表１　今帰仁城跡周辺遺跡出土動物遺体

魚類　Fish

軟骨魚綱　Chondrichthyes
　サメ類
　Lamniformes fam. indet.

硬骨魚綱　Osteichthyes

スズキ目　Order Perciformes
　ハタ科
　Serranidae gen. indet
　アジ科
　Carangidae gen. Indet
　タイ科クロダイ属
　Acanthopargas sp.
　フエフキダイ科
　Lethrinidae gen. indet
　フエフキダイ科フエフキダイ属
　Lethrinus sp.
　ベラ科
　Labridae gen. indet
　ブダイ科
　Scaridae gen. indet
　ニザダイ科
　Acanthuridae gen. indet
　モンガラカワハギ科
　Balistidae gen.indet
　ハリセンボン科
　Diodontidae gen. indet

爬虫類　Reptile

　ウミガメ科
　Chelonidae gen. Indet

鳥類　Bird

　種不明

哺乳類　Mammal

齧歯目　Order Rodentia
　ネズミ科
　Muridae gen. indet

クジラ目　Order Cetacea
　マイルカ科
　Delphinidae gen. indet

奇蹄目　Order Perissodactyla
　ウマ科　ウマ
　Equus caballus

偶蹄目　Order Artiodactyla
　イノシシ科　リュウキュウイノシシ／ブタ
　Sus leucrmystax riukiuanus
　／*Sus scrota domesticus*
　ウシ科　ウシ
　Bos taurus
　ウシ科　ヤギ
　Capra hircus

表２　出土魚骨資料（Pick up法採取資料）

＊1/3以下の破片はfrを付す。

地　区	魚　　種	部　　位	左右・上下	出 土 数	備　　考
Ⅰ・Ⅱ区	フエフキダイ属	前上顎骨	右	1	ハマフエフキタイプ
	ブダイ科	歯骨	右	fr1	
		上咽頭骨	右	1	
	フエフキダイ科？	前鰓蓋骨	左	fr1	
	同定不可	骨片		fr1	
		椎骨		1	
Ⅲ区a,c	アジ科	尾椎骨		1	
	フエフキダイ属	口蓋骨	右	1	
	フエフキダイ科	主鰓蓋骨	左	1	
	ベラ科	下咽頭骨		2	
	ブダイ科	前上顎骨	右	fr1	
		前上顎骨	左	1	
		歯骨	右	1	
			左	1	
		上咽頭骨	右	1	
		下咽頭骨		2	
	ニザダイ科	尾椎		1	
	ハリセンボン科	歯板	下	2	
		歯板	不明	2	
	未同定	上顎骨？	右？	1	関節面なし　大きい
	同定不可	舌弓		1	
		臼歯		1	
		椎骨		10	
		腹鰭骨		1	
		鰭骨		3	
		鰭棘		7	
		前鰓蓋骨？		fr1	
		骨片		22	
Ⅴ区	サメ類	椎骨		2	
	クロダイ属	関節骨	左	1	
	ブダイ科	前上顎骨	左	fr２	
		歯骨	左	1	
		上咽頭骨	左	1	
		下咽頭骨		1	
	イロブダイ？	下咽頭骨？		fr1	
	ハリセンボン科	棘		fr1	
	同定不可	第1椎骨		1	
		腹椎骨		4	
		椎骨		4，fr1	
		鰭骨		3	
		骨片		24	

表３　出土魚骨資料（Floatation法採取資料）

＊1/3以下の破片はfrを付す。

地　区	魚　　種	部　　位	左 右	出土点数	備　　考
V	ハタ科	歯骨	左	1	
	ベラ科	前上顎骨	右	2	
			左	fr3	ヤマブキベラなど小型のベラ科に近い
		歯骨	右	1，fr2	ヤマブキベラなど小型のベラ科に近い
			左	5，fr1	ヤマブキベラなど小型のベラ科に近い
		上顎骨	右	1	
		上咽頭骨	右	1	
			左	2	
			不明	fr1	
		下咽頭骨		2	
	ブダイ科	前上顎骨	右	1	
		歯骨	右	1	
		顎骨		fr1	
		上咽頭骨	左	1	
			右	3，fr1	fr1：焼痕あり
		下咽頭骨		fr1	
	ニザダイ科	腹椎		1	
		尾椎		2	
		尾部鱗		1	
	モンガラカワハギ科	前上顎骨	左	1	
		歯骨	左	fr1	
		第1背鰭棘		1，fr1	
		第2腹椎骨		2	
		腹椎		2	
	ハリセンボン科	棘		1	
	モンガラカワハギ科？	第1背鰭棘？		fr2	
	ニザダイ科？	歯骨	左？	fr1	
	ベラ科？	顎骨		fr2	
	未同定	前上顎骨	右	1	
		上顎骨	左	1	
		関節骨	右	3	
			左	1	
		方骨	右	2	ベラ科に近い。
			右	1	ニザダイ科に近い。
		舌顎骨	右	1	
		第1椎骨（2㎜以下）		4	
		尾骨（2㎜以下）		3	
		椎骨（2㎜以上）		72	3点焼痕あり。
		椎骨（2㎜以下）		398	15点焼痕あり。
		ウロコ		109	モンガラカワハギ科？9点は焼痕あり。
				7	

表４　出土魚種組成（NISP）

魚　　種	NISP(Pick)	NISP(float)	全資料
サメ類	2		2
ハタ科		1	1
アジ科	1		1
クロダイ属	1		1
フエフキダイ科	3		3
ベラ科	2	21	23
ブダイ科	15	9	24
ニザダイ科	1	4	5
モンガラカワハギ科		8	8
ハリセンボン科	5	1	6

表５　出土魚種組成（MNI）

魚　　種	MNI(Pick)	MNI(float)	全資料
サメ類	2		2
ハタ科		1	1
アジ科	1		1
クロダイ属	1		1
フエフキダイ科	1		1
ベラ科	2	5	7
ブダイ科	3	3	6
ニザダイ科	1	1	1
モンガラカワハギ科		2	2
ハリセンボン科	2	1	2

図１　今帰仁城跡周辺遺跡出土魚種組成（NISP）

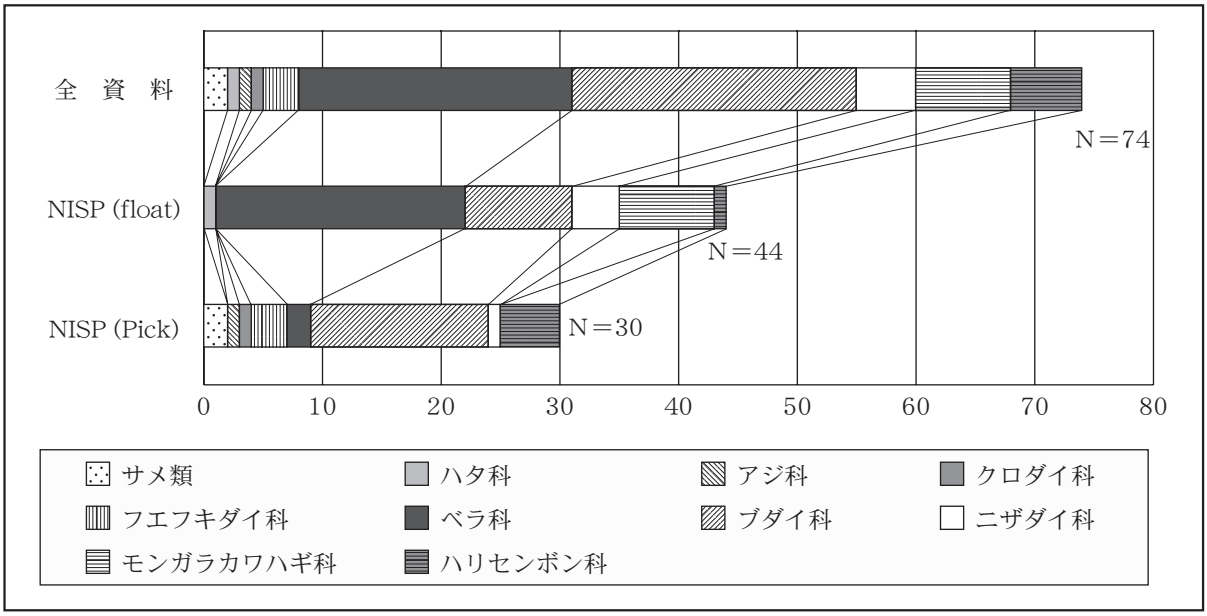


図２　今帰仁城跡周辺遺跡出土魚種組成（MNI）

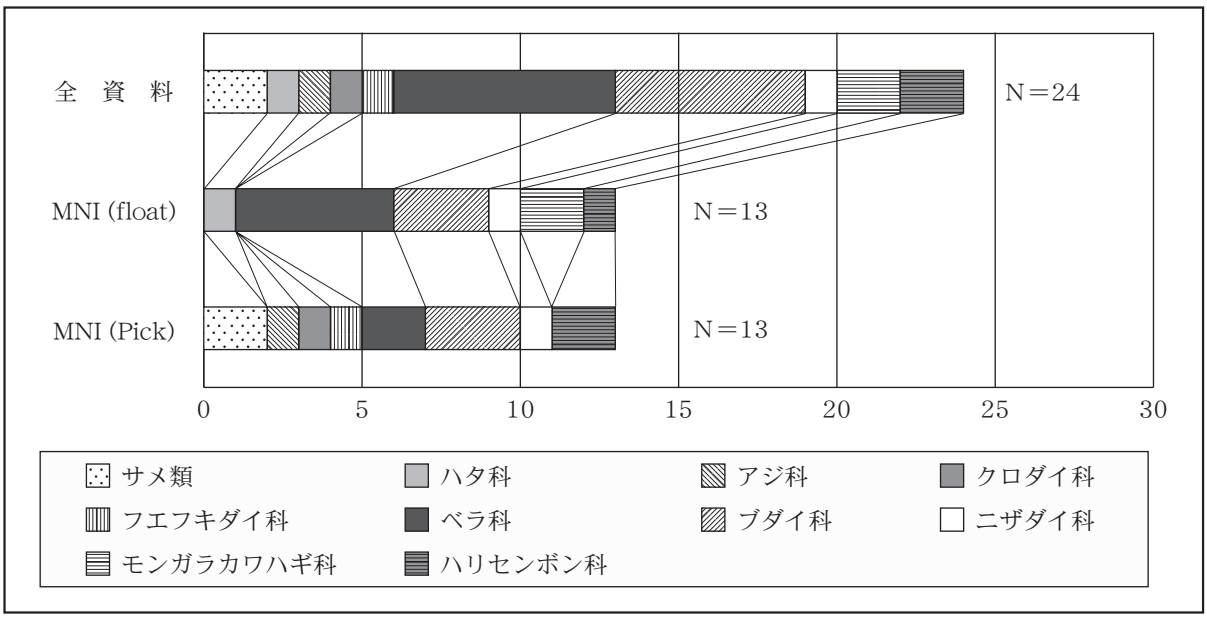
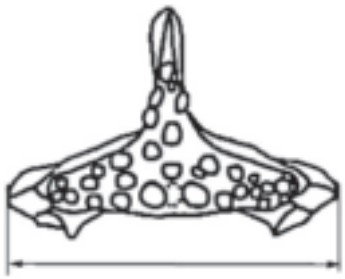


表６　ベラ科サイズ分析

①

資料No	下咽頭骨幅(㎜)	
	Pick up	Floatation
Ⅲac-35	44	
Ⅲac-238	34	
Ⅴ-310		4
Ⅴ-312		5



②

資料No	歯骨咬合面長(㎜)
	Floatation
Ⅴ-312①	7.3
Ⅴ-312②	7.3
Ⅴ-314	16

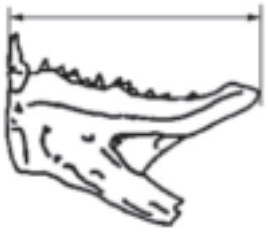


表７　ブダイ科サイズ分析

①

資料No	上咽頭骨歯板幅(㎜)	
	Pick up	Floatation
Ⅱ-472	5	
Ⅲac-60	5.2	
Ⅴ-1161	6	
Ⅴ-323		1
Ⅴ-314①		2
Ⅴ-314②		1.3
Ⅴ-314③		1.5

②

資料No	歯骨咬合面長(㎜)	
	Pick up	Floatation
Ⅲac-305	27	
Ⅲac-256	26	
Ⅴ-325		7

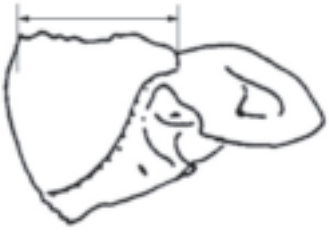


表８　出土ウマ骨資料

①ウマ・四肢骨

地区	遺物No	部位	左右・前後	残存状況＊2	カットマーク	計測値（㎜）＊1											備考
					打撃痕	GL	SD	GB	Bp	BFp	Bd	BFd	BPC	LA	LAR	Lfo	
Ⅰ	No291	上腕骨	右	(M)	骨幹												遠位部・関節部付近
Ⅱ	Dot167	寛骨＊3	右	Ace，Pub，Isc										62	58	59.8	
Ⅲac	Dot144	上腕骨	左	(M)													上腕骨稜～鉤突窩付近
Ⅲc	Dot95	橈骨	左	〈PM〉		－	27.1		55		－						
Ⅲc	No41	橈骨	右	(M)fr		－	－		－		－						近位部～中部破片
Ⅲc	Dot84	尺骨	左	(M)		－	－						31.3				近位部・関節面あり
Ⅲc	不明	大腿骨	左	(M)fr													遠位部
Ⅲc	Dot131	脛骨	右	(M)fr													
Ⅲc	Dot56	膝蓋骨	右	ほぼ完													
Ⅲa	No60	踵骨	左	完		97.6		51.3									
Ⅴ	Dot235	上腕骨	左	(M)fr													
Ⅴ	No522	上腕骨	右	(M)fr	骨幹												
Ⅴ	Dot486	尺骨	左	(M)		－	－						29.2				近位部・関節面あり
Ⅴ	No595	橈骨	右	(PM)		－	－		66.2	63.8	－						
Ⅴ	No595	橈骨	右	(D)fr													
Ⅴ	No43	第3手根骨	右	fr													
Ⅴ	Dot755	第4中手骨	左	(PM)	骨幹												
Ⅴ	Dot480	基節骨	前	(MD)		－	－		－	－	－						
Ⅴ	Dot406	寛骨	左	Ace，Pub													
Ⅴ	Dot652	大腿骨	不明	(D)													関節面・大腿骨滑車破片
Ⅴ	No1038	大腿骨	右	(M)fr													遠位部
Ⅴ	Dot755	第3足根骨	左	完				40.5									Dot755中足，足根骨は同一個体
Ⅴ	Dot291	中心足根骨	左	ほぼ完				40.5									
Ⅴ	No521	中足骨	左	(D)	骨幹	－	－		－		43						
Ⅴ	Dot755	中足骨	左	(PM)		－	－		40.8		－						Dot755中足，足根骨は同一個体
－	No268	基節骨	前	完		66.8	27.8		－	－	37.8	35.3					

＊1. 計測項目はDriesch(1976)に従う。カットマークのあるものは、その部位を記載。以下、他の動物種についても同じ。
＊2. 四肢骨残存状況については、以下の表記で示した。以下、他の動物種についても同じ。
完：骨端部の癒合した完形のもの。　　ほぼ完：若干欠けている部分はあるが、ほぼ完形のもの。
(P)骨端が癒合した近位端が残存。　　(PM)骨端が癒合した近位端～骨幹部が残存。
(D)骨端が癒合した遠位端が残存。　　(DM) 骨端が癒合した遠位端～骨幹部が残存。
〈P〉骨端が癒合していない近位端が残存。　　〈PM〉骨端が癒合していない近位端～骨幹部が残存。
〈D〉骨端が癒合していない遠位端が残存。　　〈DM〉骨端が癒合していない遠位端～骨幹部が残存。
(M)骨幹部のみが残存
＊3. 寛骨については、残存部位を(ACE:寛骨臼)、(IL:腸骨)、(ISC:恥骨)、(PUB:坐骨) で示す。以下、他の動物種についても同じ。
＊ 1/3 以下のものはfrを付す。以下、他の動物種についても同じ。

表８　出土ウマ骨資料

②ウマ・上顎歯

地　区	遺物No	左　右	歯　式	計　測　値（㎜）＊1,2				推定年齢＊３	備　　考
				L	B	ram	cant		
Ⅲac	Dot149	左	M1	25	24	67.5	57.5	4.6	
Ⅴ	Dot410	左	P3	25	26.8	52＜	40	9.4	
	Dot478	左	P4	26	26	40＜	40	9.9	
	Dot40	左	P3 ？	－	－	56＜	41＜		咬合面欠損
	Dot580	左	M2	29	22	62＜	62＜	5.2以下	
	No44	右	M2	23＜	21.8＜	43＜	43＜	9.0以下	
	No444	右	M3	－	－	64	59	4.9	咬合面前葉欠損

③ウマ・下顎歯

地　区	遺物No	左　右	歯　式	計　測　値（㎜）＊1,2				推定年齢＊３	備　　考
				L	B	ram	cant		
Ⅰa	No360	右	M2	30	14.5	73＜	57＜	6.4以下	後端部若干磨耗
Ⅱb	No504	左	M1	23	15	61.7＜	55	6.1	
Ⅲac	No397	左	I1or2fr	－	－	－	－		
Ⅲc	No104	左	M1	28.7	14.9	61.5＜	61.5＜	4.8以下	
Ⅴ	No444	右	I3fr	－	－	－	－		
	No459	右	I3fr	－	－	－	－		歯根部破片
	Dot42	右	Dp2	29.9	18.2	38.2＜	20.2		
	Dot42	右	Dp3	32	17.8	40＜	22		Dot42・Dp2と同一個体？
	Dot548	右	P2	31	16.2	45＜	31	9	
	No24	右	M2	－	－	45.8＜	45.8	9.1	前葉欠損
	No11	右	M2fr	－	－	－	－		後葉欠損
	Dot479	左	M1	26	16.1	66＜	56.1	5.9	
	No332	左	M2	30.2	13.5	46.1＜	46.1＜	9.0以下	
	No699	左	M3	－	－	44＜	44＜	9.6以下	前葉欠損

＊1. 計測項目はDriesch(1976)，西中川・松元(1991)に従う。L, Bについては以下、他の動物種においても同じ。
L：Length　B：Breadth
ram：Total Height ram（歯根尖からの高さ）
cant：Total Hergat cant（歯根中心部からの高さ）
＊2. ＜：～以上の意。
＊3. 推定年齢は西中川・他(1991)に従って、cantより算出。

④ウマ・その他の部位

地区	部　位	左右	部位詳細	備　　考
Ⅲac	頭頂骨	右	fr1	
		左	fr1	
	軸椎		前間接突起＋歯突起1	
	腰椎		椎窩fr1	
Ⅴ	上顎骨	右	臼歯fr1	
	上顎骨	不明	頬歯骨1	
	下顎骨	不明	頬歯骨1	歯根部破片

表９　出土ウマ推定体高

地区	遺物No	部位	推定体高(㎝)
Ⅲc	Dot95	橈骨	88.88
Ⅴ	No595	橈骨	112.82
Ⅴ	Dot755	中足骨	111.15

推定体高(㎝)	
平均	104.28
最小値	88.88
最大値	112.82
中央値	111.15

＊推定体高は、西中川・松元(1991)に従い各標本の計測値から求めたGLに基づき、
林田・山内(1957）に従って算出した。

表10　出土イノシシ／ブタ骨資料

①イノシシ／ブタ・上顎歯

地区	遺物No	左右	歯　式	咬 耗 状 況	計測値(㎜)		備　　考
					L	B	
Ⅲc	No110	右	M2or3fr	磨耗ほとんどなし	－	－	第2咬頭以下欠損
Ⅴ	Dot92	右	M1	磨耗ほとんどなし	15.4	11	
Ⅴ	Dot92	右	M2	磨耗ほとんどなし	－	14	第2咬頭欠損

②イノシシ／ブタ・下顎歯

地区	遺物No	左右	歯　式	咬 耗 状 況	計測値(㎜)		備　　考
					L	B	
Ⅴ	Dot529	左	P2	著しく磨耗	8	4.2	
Ⅴ	No372	左	M3	磨耗ほとんどなし	27.5	12.5	第3咬頭未萠出

③イノシシ／ブタ・上顎骨

地区	遺物No	左右	歯　　式	萠 出 状 況	咬 耗 状 況	年齢段階	備考
Ⅲc	No308	左	(I1,2,×)	I1：萠出　I2：萠出途中	磨耗ほとんどなし	－	
Ⅴ	Dot524	右	(P1,(P2,3,４),×,×,dp4,M1,M２)	P1：完出　P2,3,4：未萠出 dp4：完出,生え変わる直前 M1：完出　M２：萠出途中	dp4,M1：象牙質露出 M2：ほとんど磨耗なし	Ⅰ	M2：第1咬頭欠損

＊年齢段階は林ほか（1977）に基づく。

④イノシシ／ブタ・下顎骨

地区	遺物No	左右	歯　　式	萠 出 状 況	咬 耗 状 況	計測値(㎜)		年齢段階
						L	B	
Ⅴ	No472	左	(×,M2,×)	M2：完出	エナメル質磨耗	18	11.3	Ⅱ以上

＊計測はＭ２について実施。年齢段階は林ほか(1977)に基づく。

⑤イノシシ／ブタ・四肢骨，その他

地区	部位	左右	残存状況	備考・計測値
Ⅰ・Ⅱ	大腿骨	右	(M)fr1	カットマークあり
	四肢骨		fr1	
	肩甲骨	左	(M)1	近位端・関節面欠損
	肋骨		fr1	
Ⅲac	踵骨	右	〈PM〉1	
	脛骨	左	(M)1	
	踵骨	左	ほぼ完〈P〉1	近位端未癒合
	上腕骨	右	(M)1	
	基節骨		fr1	
	口蓋骨		fr1	
	下顎骨	不明	fr1	
	胸椎		1	突起部欠損
	胸椎		椎体fr1	
	胸椎		棘突起fr1	
	肋骨		fr1	
Ⅴ	上腕骨	右	(M)1	
	上腕骨	左	(D)1	
	距骨	左	完1	
	上腕骨	左	(M)1	
	第3中手骨	左	(PM)1	
	寛骨	左	腸骨fr1	
			寛骨臼fr1	
	指骨		fr1	
	下顎骨	左	fr2	下顎角部分破片
	顎骨fr	－	fr1	
	頭骨fr	－	fr1	
	胸椎	－	fr1	棘突起片
	肋骨		fr2	

表11　出土ウシ骨資料

①ウシ・四肢骨

地　区	遺物No	部　　位	左右・前後	残存状況	カットマーク	計　測　値（㎜）										備　　考
					打撃痕	GL	GLm	Glpe	Bp	Bd	SD	DLS	MBS	Ld	LA	
Ⅱ	No587	橈骨	左	(M)		－			－	－	32.5					遠位部～中部
Ⅲac	Dot22	上腕骨	右	(D)fr												関節部のみ残存
Ⅲac	No135	上腕骨	右	(M)	骨幹											遠位関節部付近
Ⅲac	No681	第4手根骨	左	完												
Ⅲac	No90	中手骨	不明	(M)fr												遠位関節部付近
Ⅲc	Dot92	中手骨	右	完		186			53	53	29.7					
Ⅲc	Dot103	中手骨	左	(PM)	骨幹	－			52.8	－	27					
Ⅲac	No273	中手骨	不明	(D)												関節部のみ残存
Ⅲc	No217	中手骨	右	(M)	骨幹											
Ⅲc	Dot35	中手骨	右	(M)fr												
Ⅲc	No29	中手骨	不明	(M)fr												
Ⅲc	No22	中手骨	不明	(M)fr												
Ⅲac	－	基節骨	前4	ほぼ完				－	－	27.3	25.3					背面一部欠損
Ⅲac	No100	中節骨	前3	ほぼ完		－			30.8	27.1	25.9					
Ⅲc	Dot82	寛骨	左	Ace，IL											71	
Ⅲc	Dot146	大腿骨	左	(PM)	骨幹											近位部関節面 一部欠損 大腿骨頭残存
Ⅲac	No342	大腿骨	左	(M)fr												近位部付近
Ⅲa	－	脛骨	左	(D)fr												内果fr
Ⅲac	Dot191	距骨	右	ほぼ完			57.4									背面2/3欠損
Ⅲac	Dot175	中足骨	右	(DM)	骨幹	－			－	48.8	25.2					
Ⅲc	No22	中足骨	左	(M)fr												
Ⅲc	No92	中足骨	右	(M)							20					極めて小さい。
Ⅲac	No112	中節骨	後3	ほぼ完		－			－	25.5	－					内面1/2欠損
Ⅲac	No384	中節骨	後3	ほぼ完		－			27.8	22.8	22					
Ⅲac	No316	末節骨	後3	完								64	20	55		No384とおそらく 同一個体
Ⅲac	No316	末節骨	後4	ほぼ完								－	－	55		外側1/3欠損。 No384,316(上記)とおそらく同一個体。
Ⅲac	No681	末節骨	後3	完								66.3	26.7	53		
Ⅴ	No678	第2・3手根骨	右	1/2欠損												
Ⅴ	Dot131	第2・3手根骨	右	1/3欠損												
Ⅴ	No42	中間手根骨	右	完												
Ⅴ	No288	橈側手根骨	右	ほぼ完												
Ⅴ	Dot388	中手骨	左？	(M)fr												
Ⅴ	Dot438	中手骨	右	(P)fr												
Ⅴ	Dot438	中手骨？	不明	(M)fr												
Ⅴ	Dot575	中節骨	前4	(P)		－			－	－	25.5					
Ⅴ	Dot610	末節骨	前4	ほぼ完								74.6	25.5	44.5		
Ⅴ	Dot652	大腿骨	右	(DM)	骨幹											関節部2/3欠損。大腿骨頭残存。
Ⅴ	Dot653 ?	大腿骨	右	(D)fr												遺構内　大腿骨滑車部破片
Ⅴ	No1038	大腿骨	右	(D)fr												大腿骨滑車破片
Ⅴ	No459	膝蓋骨	左	ほぼ完												
Ⅴ	No1038	中心・第4足根骨	右	完												
Ⅴ	Dot846	中足骨	右	(P)fr	骨幹											背面のみ残存 打撃により縦に割られている。
Ⅴ	表採	中足骨	右	(M)fr												
Ⅴ	No1020	基節骨	後3	(DM)				－	－	24.7	－					遠位端、背面欠損。 No472と同一個体。
Ⅴ	Dot405	基節骨	後3	完				67	28	25	21.6					おそらくDot181と同一個体。
Ⅴ	No7	中節骨	後4	ほぼ完		35			26.8	－	－					背面若干欠損
Ⅴ	No472	中節骨	後3	完		37.4			27.3	21	21					おそらくNo1020と同一個体。
Ⅴ	Dot181	中節骨	後3	完		38			26	21.6	21.2					おそらくDot405と同一個体。

表11　出土ウシ骨資料

②ウシ・上顎歯

地　区	遺物No	左　右	歯　式	計測値（㎜）＊1,2					備　考
				L	B	歯冠高（舌側）			
						前	中	後	
Ⅱb	No469	右	P3	19	16.5	－	30	－	
	No465	右	M2	23	20	16	18		
Ⅴ	No521	右	P2	15	12	－	29.5	－	
	No443	右	P3	18.8	13.6	－	28＜	－	
	Dot137	右	M3	28	13	43.2	43	－	
	No33	右	M3	－	20	35＜	－	－	後葉欠損
	Dot203	右	M3	26.2	14.8	39.4＜	39＜	－	
	Dot203	右	M3ｆｒ	－	－	35.8＜	－	－	第2咬頭欠損
	No1203	右	M3	27.5	15.1	41＜	41＜	－	
	No54	左	M2	－	16	－	23.6＜	－	前葉欠損
	Dot31	左	M2or3	－	－	－	－	－	
	No50	左	M3	30	17	36＜	38.2＜	－	
	Dot330	左	M3	31.2	18	41.3＜	42.5＜	－	

③ウシ・下顎歯

地　区	遺物No	左　右	歯　式	計測値（㎜）＊1,2					咬耗段階＊3	備　考
				L	B	歯冠高（舌側）				
						前	中	後		
Ⅰa	No324	右	M3	－	－	44.5＜	41.5＜	－	c	後葉欠損
Ⅱb	No570	右	dp4	28	13	11.2	8.5	－	k	
	No570	右	P3？	－	－	－	－	－	－	
	No502	左	M3	－	－	－	－	－	－	後葉2/3欠損
Ⅲc	No101	右	I3	－	－	－	－	－	－	
Ⅲa	No77	左	M3	－	－	52	50.8	－	b	後葉欠損
Ⅴ	Dot494	左	P2	10	5.8	－	－	－	－	
	Dot712	左	M1	－	－	－	－	－	l	前葉欠損
	No474	左	M2	26	14	35	33	－	k	
	Dot838	左	M2	28	11	42	36＜	－	g	
	No12	左	M3	－	－	52＜	50＜	－	c	後葉欠損
	No444	左	M2or3fr	－	－	－	－	－	－	後葉剥片
	No1037	右	P3or4	－	－	－	－	－	－	
	No29	右	M2or3fr	－	－	－	－	－	b	
	No97	右	M2or3fr	－	－	－	－	－	－	舌側剥片

＊1. 計測項目はDriesch(1976), 西中川・松元(1991)に従う。
L：Length　　B：Breadth
＊2. ＜：～以上の意。
＊3. 咬耗段階はGrant(1982)に従う。

表11　出土ウシ骨資料

④ウシ・下顎骨

地　区	遺物No	左右	歯　　式	萌 出 状 況	計 測 値(㎜)				咬耗段階	
					PML	P2B	P3B	P4B	P3	P4
Ⅲc	No345	左	((P2，3，4))	P2，3，4：未萌出	ー	ー	ー	ー	ー	ー
V	Dot246	左	(×，P3，4，×)	P2：歯根部若干残存 P3,4：完了 M1：歯槽部のみ	49	ー	11.6	12.2	ー	d
V	Dot245	左	(×，(P3))	P3：未萌出	ー	ー	ー	ー	ー	ー

＊計測項目はDriesch(1976)に従う。
＊咬耗段階はGrant(1982)に従う。

⑤ウシ・その他の部位

地　区	部　位	左右･前後	残 存 状 況	備　　考
Ⅰ・Ⅱ	口蓋骨	右	fr1	
Ⅲac	頬骨	右？	眼窩部fr1	
	胸椎		棘突起fr1	
V	下顎骨	右	下顎体復縁fr1	
			筋突起fr1	
		左	関節突起fr1	
			筋突起fr1	
		不明	後臼歯fr2	
	顎骨	不明	後臼歯fr1	
	環椎		fr3	うち2点は歯突起窩片
	椎骨		fr1	
	頸椎		後関節突起fr1	

表12　ウシ推定体高

地　区	遺物No	部　　位	推定体高(㎝)
Ⅱ	No587	橈骨	105.12
Ⅲc	Dot92	中手骨	104.27
Ⅲc	Dot103	中手骨	111.01
Ⅲac	－	基節骨・前4	119.26
Ⅲac	No100	中節骨・前3	120.72
Ⅲc	Dot82	寛骨	117.57
Ⅲac	Dot175	中足骨	112.44
Ⅲc	Dot92	中足骨	114.29
Ⅲac	N0384	中節骨・後3	115.41
V	Dot575	中節骨・前4	126.32
V	Dot405	基節骨・後3	114.06
V	No472	中節骨・後3	112.62
V	Dot181	中節骨・後3	114.67
V	No7	中節骨・後4	112.56

推定体高(㎝)	
平均	114.31
最小値	104.27
最大値	126.32
中央値	114.06

＊推定体高は、西中川・松元(1991) に従い、各標本1～2箇所の計測値より求めた値の平均を示す。

表13　出土ヤギ骨資料

①ヤギ四肢骨

地区	遺物No	部位	左右	残存状況	計測値(㎜)	
					BD	SD
Ⅲc	No285	中手骨	左	〈DM〉	－	18.8

②ヤギ・上顎歯

地区	遺物No	左右	歯式	計測値					備考
				L	B	歯冠高(舌側)			
						前	中	後	
Ⅰ	No255	左	M1	14	9.2	－	－	－	
Ⅴ	No49	左	M1	13	9	－	－	－	前葉咬合面欠損

③ヤギ・下顎歯

地区	遺物No	左右	歯式	計測値					咬耗状況	備考
				L	B	歯冠高（舌側）				
						前	中	後		
Ⅲc	No91	右	M2	15	－	31.5＜	－		－	後葉咬合面欠損
Ⅲc	No91	右	M3	18.6	7	26.3＜	24.1＜	－	a	後葉欠損

＊1. 計測項目はDriesch(1976), 西中川・松元(1991)に従う。
L：Length　　B：Breadth
＊2. ＜：～以上の意。
＊3. 咬耗段階はGrant(1982)に従う。

表14　その他の出土獣骨資料（Pick up法）

＊1/3以下の破片はfrを付す。

地　区	動 物 種	部　　位	備　　考
Ⅰ・Ⅱ	ウシorウマ	遊離歯fr2	
		肩甲骨・関節窩fr1	
		上腕骨(M)fr1	遠位部
		腰椎・椎体fr1	
		椎骨fr2	
		肋骨fr1	
		四肢骨fr4	
		骨片fr3	
	イルカ類？	腰・尾椎/側突起fr1	
	鳥類	骨片fr2	
	未同定	遊離歯fr1	
		左上腕骨(M)1	形態はウシに似るが小さい。
		指骨(M)2	
		指骨・骨端部fr1	
		骨片fr3	
	同定不可	骨片fr55	
Ⅲac	ウシorウマ	頭骨fr1	
		顎骨fr2	
		左大腿骨(M)fr1	遠位部
		大腿骨(M)fr1	遠位部
		指骨？ fr2	
		四肢骨fr4	
		骨片fr2	
	イルカ類	胸椎骨1	側方突起下部にカットマークあり
	鳥類	骨片fr5	
	未同定	遊離歯fr1	
		側頭骨fr2	
		左上腕骨(M)1	形態はウシに似るが小さい。
		左上腕骨(M)fr1	
		上腕骨？(M)fr1	
		寛骨fr1	
		指骨(M)1	
		四肢骨fr1	
		骨片fr17	
	同定不可	骨片fr249	7点は焼痕あり
Ⅴ	ウシorウマ	遊離歯fr11	
		四肢骨fr26	
		骨片fr6	
		肋骨fr13	
	ウミガメ科	背甲骨・椎骨板？ 2	
	未同定	遊離歯fr3	
		側頭骨fr4	
		椎骨・棘突起fr1	
		骨片fr11	
	同定不可	骨片fr279	5点は焼痕あり

表15　出土獣骨資料（Floatation資料）

＊1/3以下の破片はfrを付す。

地　区	動 物 種	部　　位	備　　考
Ⅴ	ネズミ科	左下顎骨1	歯式　(I)
		左下顎骨歯切歯1	

表16　地区別出土獣骨組成（NISP）

動 物 種	Ⅰ・Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	全資料
ウミガメ			2	2
イノシシ／ブタ	4	13	21	38
ウシ	8	31	55	94
ウマ	4	15	34	53
ヤギ	1	3	1	5
イルカ類		1		1
ネズミ科			2	2
その他	2	5		7

表17　地区別出土獣骨組成（MNI）

動 物 種	Ⅰ・Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	全資料
ウミガメ			1	1
イノシシ／ブタ	1	1	2	2
ウシ	2	3	5	5
ウマ	1	2	2	4
ヤギ	1	1	1	2
イルカ類		1		1
ネズミ科			2	2
その他	1	1		1

図３　地区別出土獣骨組成（NISP）

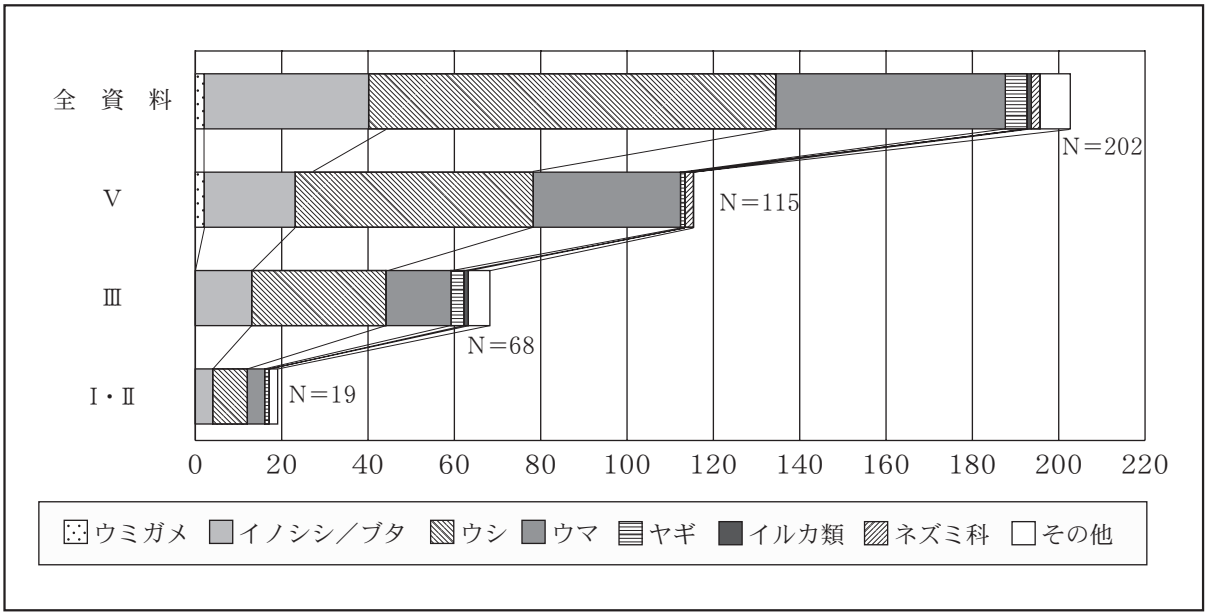


図４　地区別出土獣骨組成（MNI）

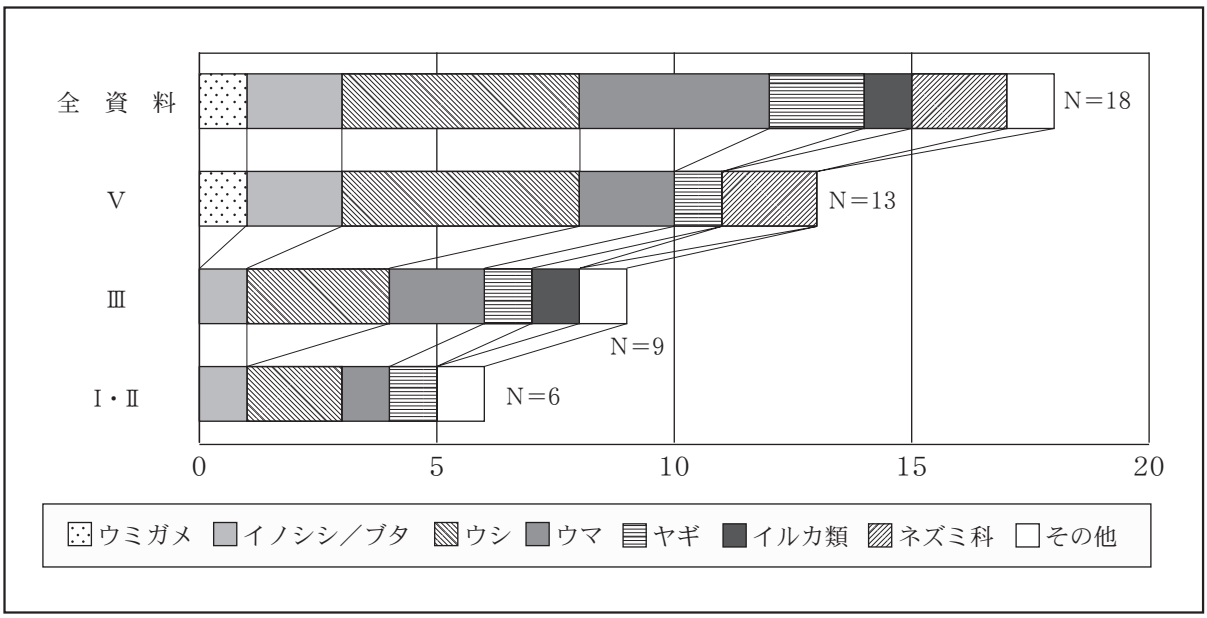


表18　今帰仁城跡関連遺跡別出土動物種組成（MNI）

動　物　種	城跡主郭	周辺遺跡（Pick）	周辺遺跡（全資料）
魚類	684	12	24
ウミガメ・ジュゴン	15	1	1
ニワトリ	23		
イルカ類	2	1	1
イノシシ／ブタ	89	2	2
ウシ	32	5	5
ウマ	14	4	4
ヤギ	1	2	2
ネズミ科	1		2
その他	15	1	1

表19　今帰仁城跡関連遺跡別出土魚種組成（MNI）

魚　　種	城跡主郭	周辺遺跡（Pick）	周辺遺跡（全資料）
サメ類	15	2	2
エイ類	1		
ウツボ科	4		
ダツ科	1		
ボラ科	1		
ハタ科	43		1
アジ科		1	1
タイ科	1		
クロダイ属	36	1	1
シイラ	1		
フエフキダイ科	158	1	1
フエダイ科	3		
ベラ科	123	2	7
ブダイ科	266	3	6
ニザダイ科		1	1
モンガラカワハギ科	1		2
ハリセンボン科	30	2	2

図５　今帰仁城跡関連遺跡別出土脊椎動物種組成（%MNI）

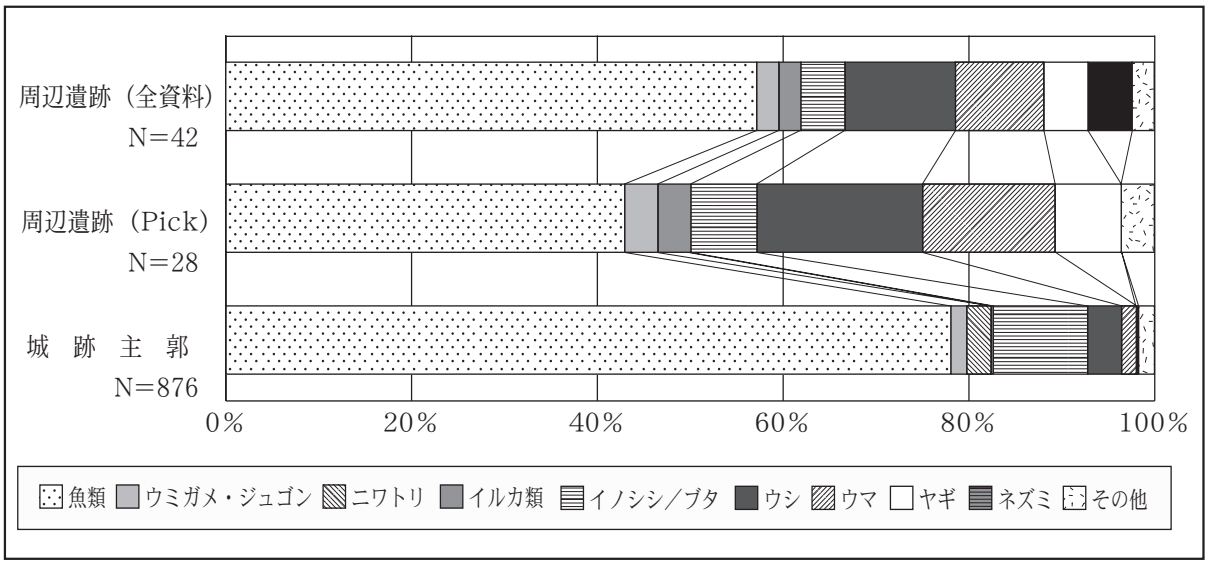


図６　今帰仁城跡関連遺跡別出土魚類組成（%MNI）

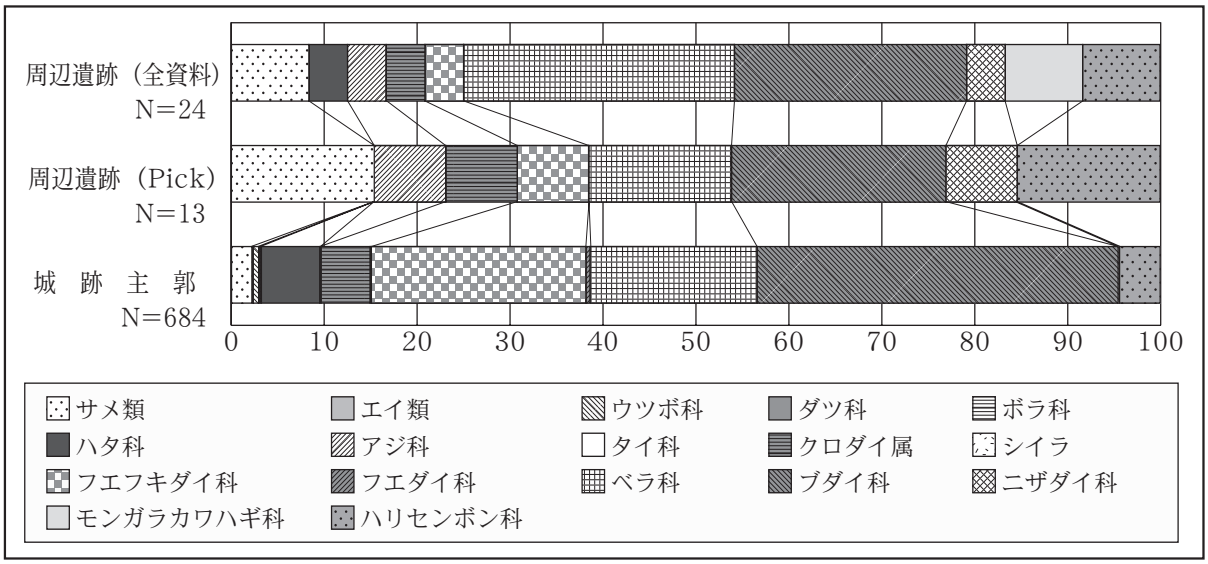
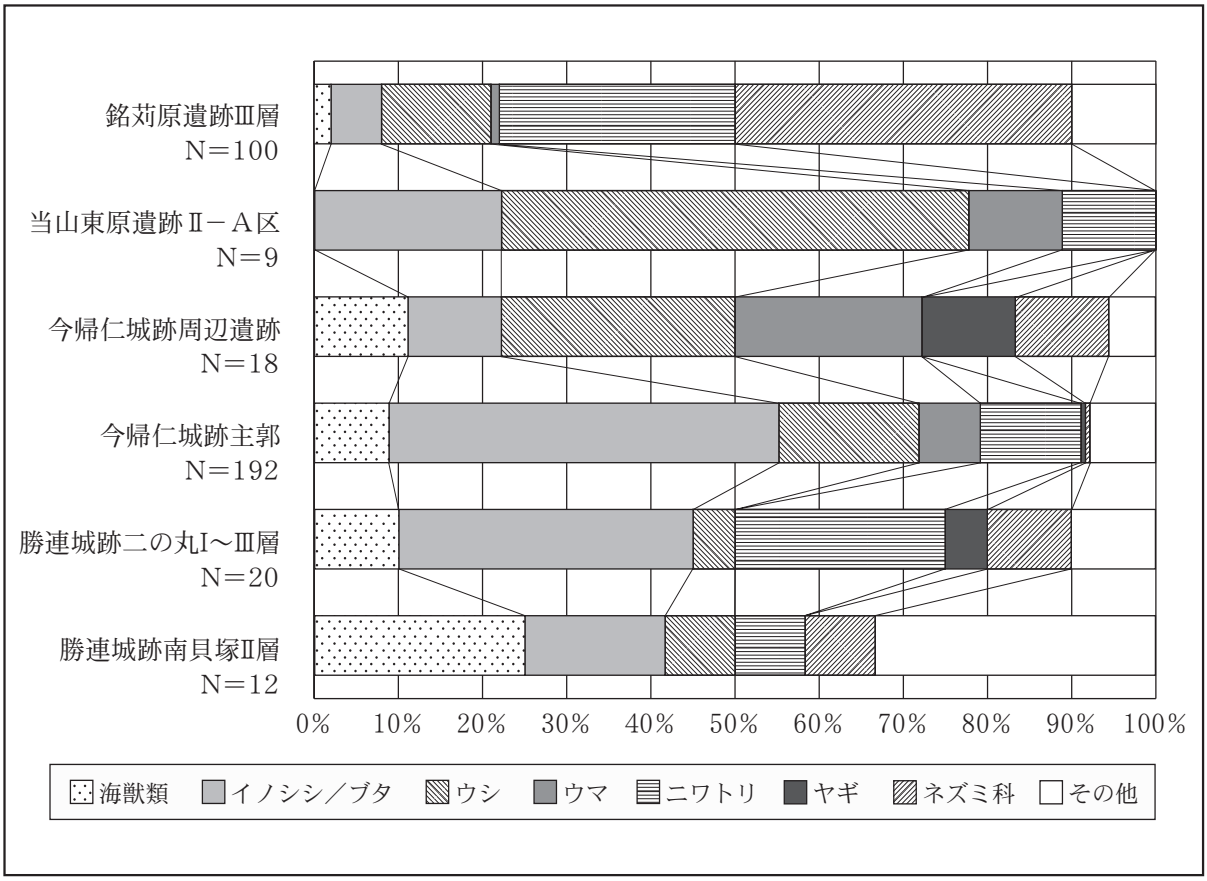


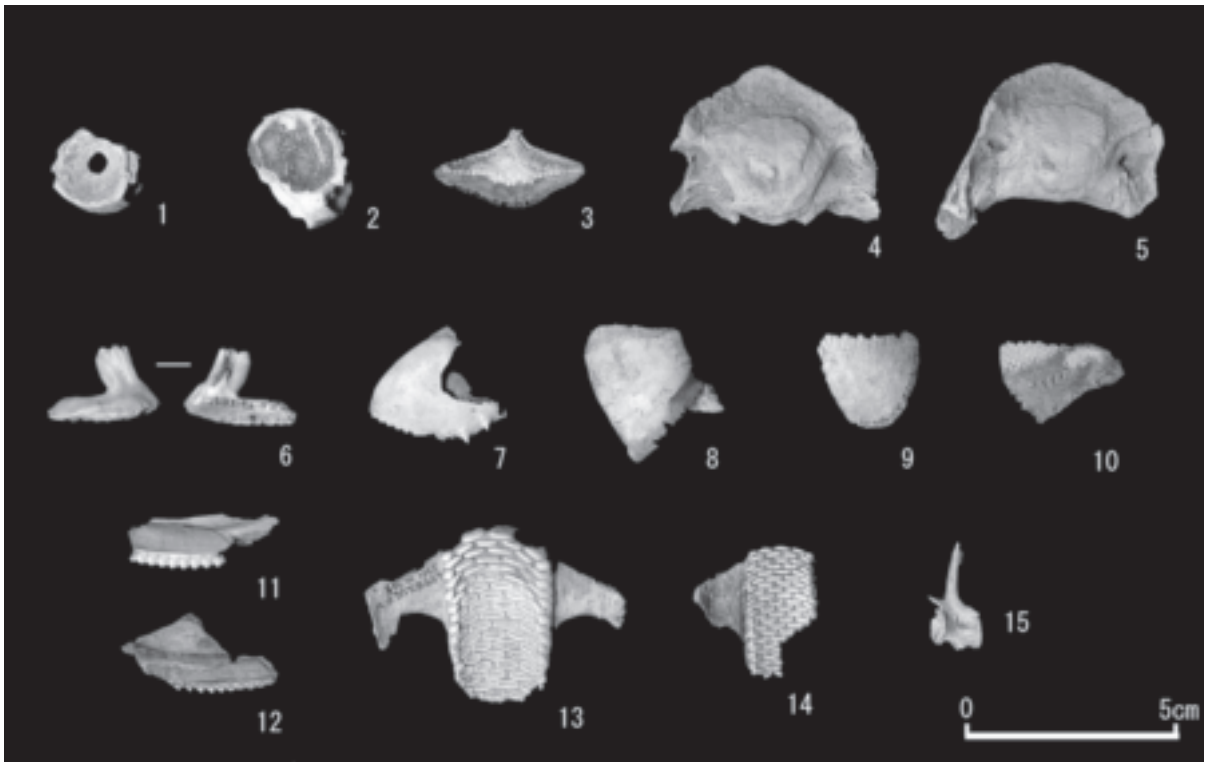
表20　グスク時代城跡・集落遺跡出土獣類組成（ＭＮＩ）

動　物　種	勝連城跡南貝塚Ⅱ層	勝連城跡二の丸Ⅰ～Ⅲ層	今帰仁城跡主郭	今帰仁城跡周辺遺跡	当山東原遺跡Ⅱ-A区	銘苅原遺跡Ⅲ層
海獣類	3	2	17	2		2
イノシシ／ブタ	2	7	89	2	2	6
ウシ	1	1	32	5	5	13
ウマ			14	4	1	1
ニワトリ	1	5	23		1	28
ヤギ		1	1	2		
ネズミ科	1	2	1	2		40
その他	4	2	15	1		10

図７　グスク時代城跡・集落遺跡出土獣類組成（％MNI）

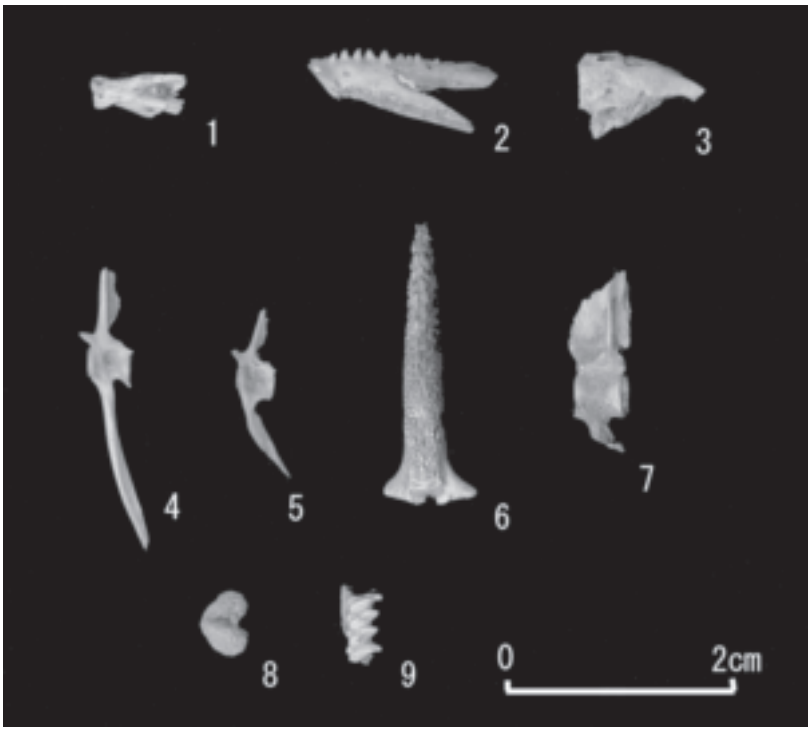


図版１　Pick up法採集魚類



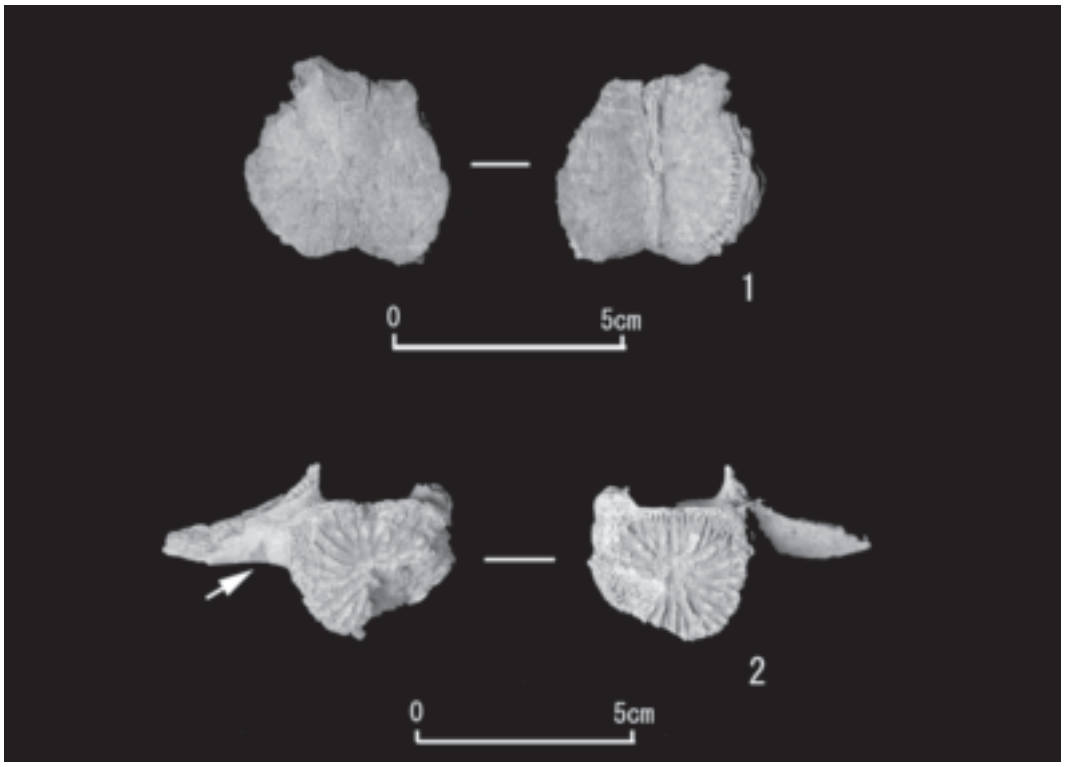
1，2）サメ類・椎骨　3）ベラ科・下咽頭骨　4,5）ハリセンボン科・下歯板
6）フエフキダイ属・右前上顎骨　7)ブダイ科・左前上顎骨　8,9,10）ブダイ科・左歯骨
11）ブダイ科・右上咽頭骨　12）ブダイ科・左上咽頭骨　13,14）ブダイ科・下咽頭骨　15）ニザダイ科・尾椎

図版２　Floatation法採集魚類



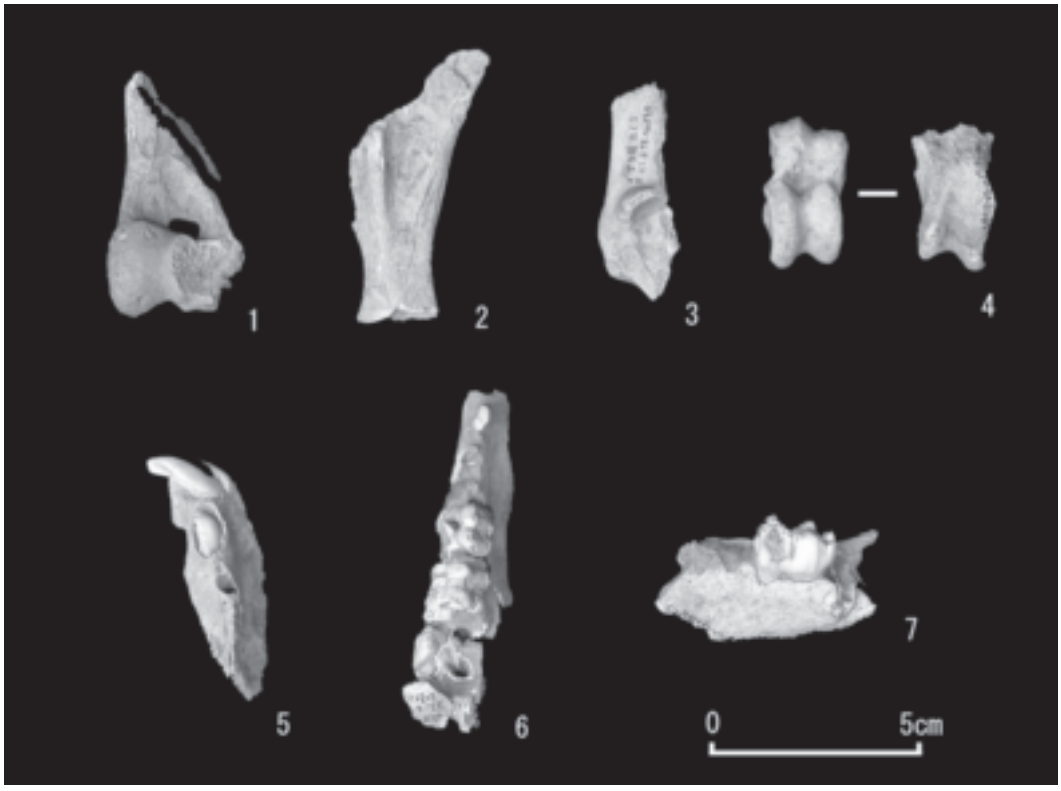
1）ハタ科・左歯骨　2）ベラ科・左歯骨　3）モンガラカワハギ科・左前上顎骨
4・5）ニザダイ科・尾椎　6）モンガラカワハギ科・第1背鰭棘　7)モンガラカワハギ科・第2腹椎
8）ニザダイ科・尾部鱗　9）ブダイ科・右上咽頭骨

図版３　ウミガメ科・マイルカ科



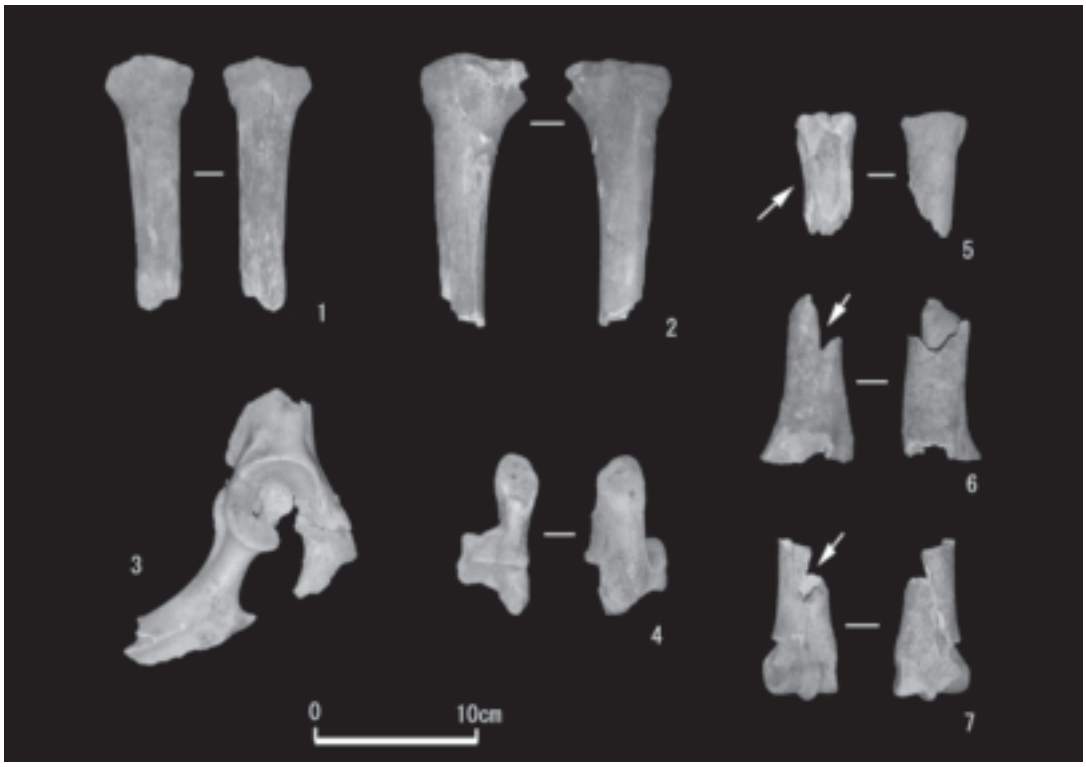
1）ウミガメ科・背甲骨　2）マイルカ科・胸椎骨（↑：カットマーク）

図版４　リュウキュウイノシシ／ブタ



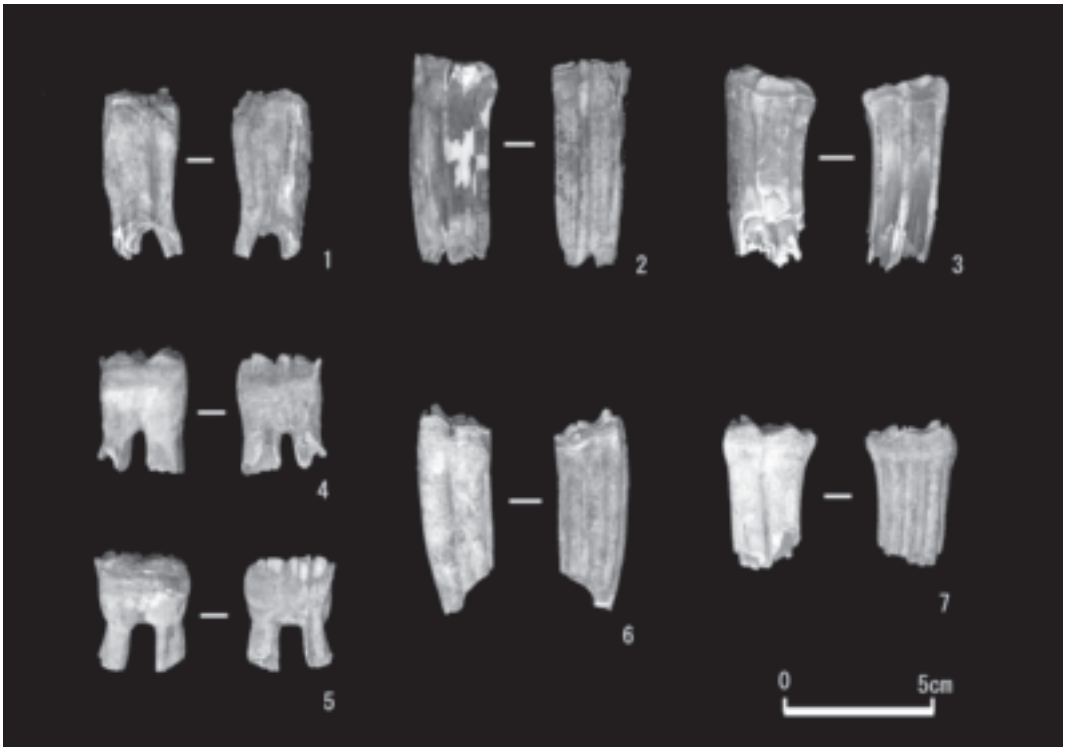
1）左上腕骨　2）左肩甲骨　3）左踵骨　4）左距骨
5）左上顎骨　6）右上顎骨　7）左下顎骨

図版５－１　ウマ四肢骨



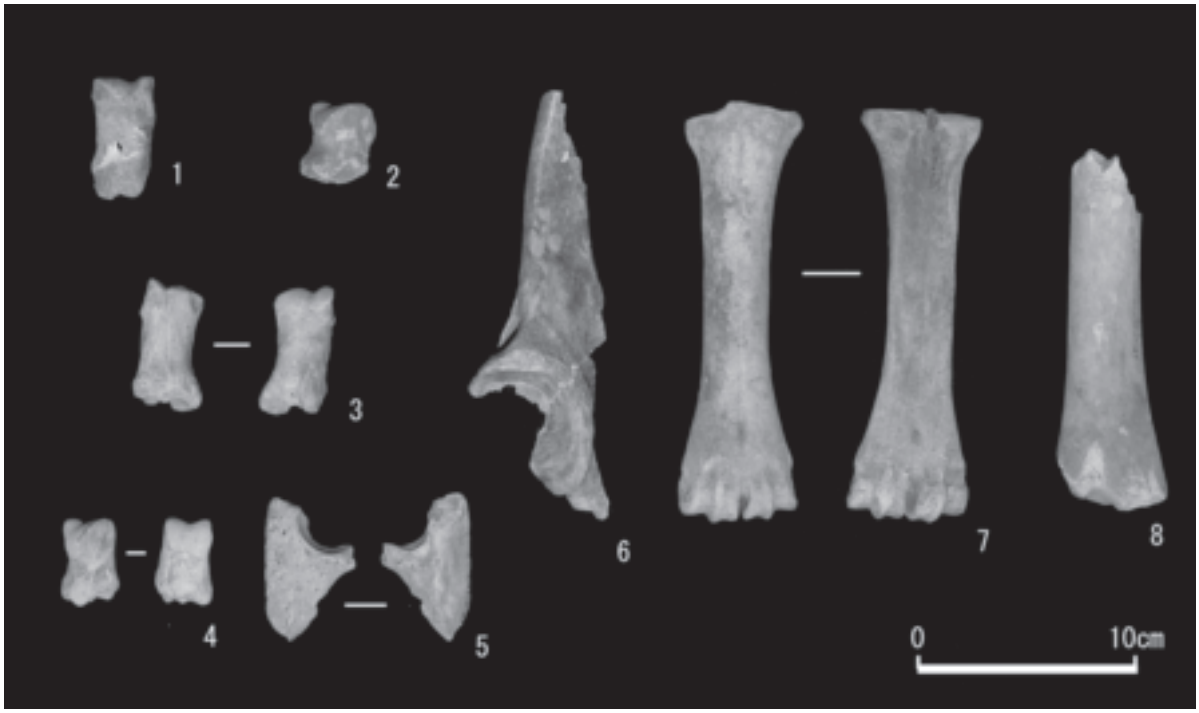
1）左橈骨　2）右橈骨　3）右寛骨　4）左踵骨
5）左第4中手骨　6）右上腕骨　7）左中足骨　（↑：カットマークあり）

図版５－２　ウマ遊離歯



1）左上顎骨・P3　2）左上顎骨・M1　3）左上顎骨・M2
4）右下顎骨・dp2　5）右下顎骨・dp3　6）左下顎骨・M1　7）左下顎骨・M2

図版６－１　ウシ四肢骨

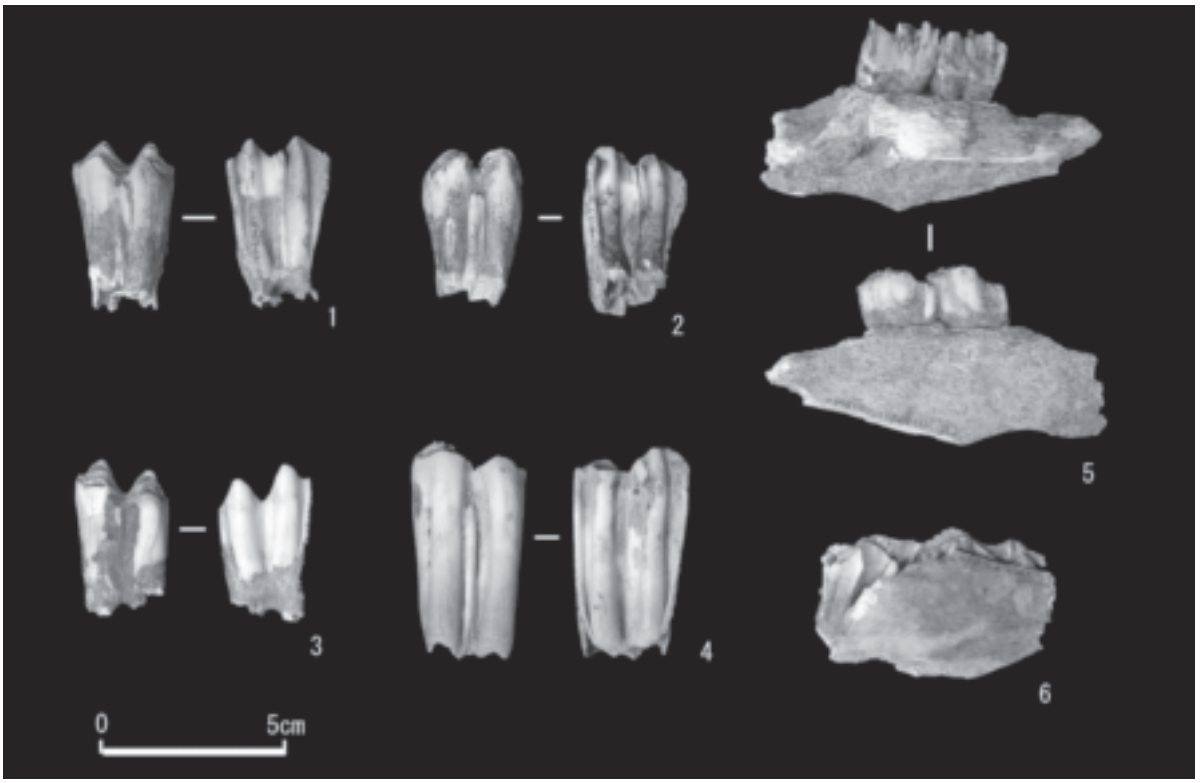


1）前基節骨Ⅳ　2）前中節骨Ⅲ　3）後基節骨Ⅲ　4）後中節骨Ⅲ　5）後末節骨Ⅲ
6）左寛骨　7)右中手骨　8）左橈骨

図版６－２　ウシ四肢骨（カットマークあり）

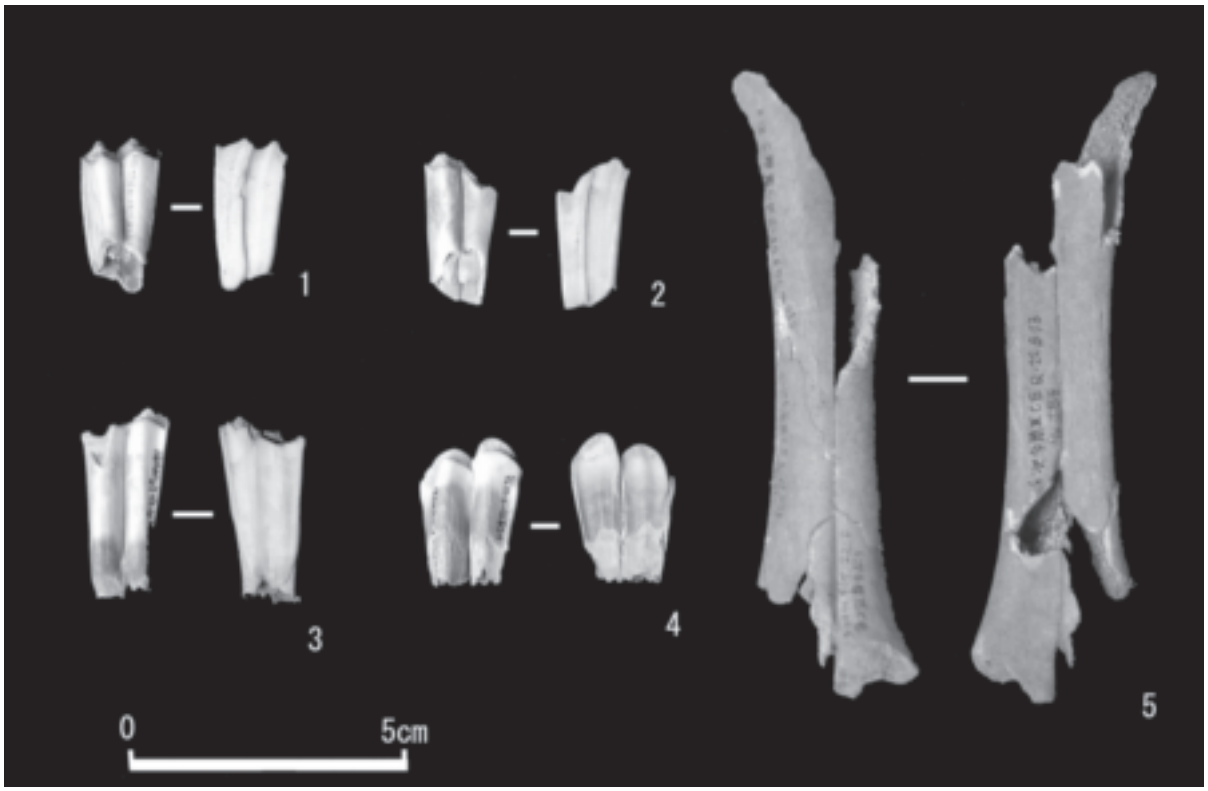
1）右大腿骨　2）右上腕骨　3）左大腿骨左中手骨　4）右中足骨　5）左中手骨

図版６－３　ウシ遊離歯・顎骨



1，2）右上顎骨・M3　3）左下顎骨・M2　4）左下顎骨・M3　5，6）左下顎骨

図版７　ヤギ



1，2）左上顎骨・M1　3）右下顎骨・M2　4）右下顎骨・M3　5）左中手骨

第５節　今帰仁城跡周辺遺跡から得られた貝類遺体

黒　住　耐　二（千葉県立中央博物館）

今帰仁（なきじん）城跡周辺遺跡は、国指定史跡で世界遺産でもある今帰仁城跡周辺の遺跡である。今回、この遺跡内のグスク時代の遺構内等から得られた貝類遺体について検討することができたので、家臣団クラスの貝類採集の実態の推定を含め、ここにその結果を述べる。

本遺跡の調査に際し、今帰仁村教育委員会の宮城弘樹氏には内容の検討を含め大変お世話になった。記してお礼申し上げる。

貝類遺体の内容

今回対象としたのは、今帰仁城跡の北西に位置する３つの屋敷地と隣接した非屋敷地である。その詳細は、本報告書のⅤ章を参照されたい。これらは、城外の家臣団クラスと想定される住居を含み、その年代は13世紀から今帰仁城廃城の16世紀までで、15～16世紀が中心になると考えられている。これらの地域から、現地で採集された（ピックアップ法：現場資料）貝類遺体を対象として解析し、土壌サンプルから得られたものは含まれていない。ただ、いくつかの水洗選別法によるサンプルを検討したが、貝類遺体は含まれていなかった。

今回のサンプルには、殻皮が残っていたり、光沢を持っているなど、明らかに遺跡の形成時期のものより後代の貝類遺体も多く含まれており、可能な限り後代のものを除くように努力した。一方、遺跡形成の時代の遺体では、溶解している個体も多く、水洗選別で小型種が得られなかったことも、この溶解に起因するものと考えられる。

結果および考察

１）組成

今回の調査で得られた貝類遺体の詳細な組成を表１に示した。この表中には、前述したように、遺跡の時代よりも新しいものも多数含まれている。これらは、除くべきかも知れないが、逆に今後、後代（ほとんど現代）の状況を示す一例ともなるので、ここではあえて全てのデータを掲載した。今回対象とした各遺構等の食用貝類の最少推定個体数(MNI）は、それぞれの遺構等のところに示してある。

遺跡の時代のものを対象に食用として利用された貝類は、少なくとも海産腹足類14科76種、海産二枚貝類９科22種、淡水産腹足類２科２種と多数の種であった。ここでは、各遺構等での総出土個体数の10％を越える種（あるいはグループ）を優占種とし、その結果を表２に示した。最も多かったのは、マガキガイで、いずれの場所でも20％を越えており、２つの屋敷地では全体の１／３に達していた。多数の種を含むイモガイ類も、屋敷地１で、20％を越え、他でも10％程度であった。チョウセンサザエ・コオニコブシ・タカラガイ類(特にハナマルユキ）も、場所によって割合は異なっていたが、全体の中では多かった。

また、今回の出土種の中には、トミガイ・リスガイ・フトコロガイ類・ヨフバイ類等の小型で丸く、殻表が平滑で光沢のある巻貝類が認められた。これらは、破損しておらず、明らかに食用ではなく、同時代の北谷町玉代勢原遺跡でも想定されたような（黒住, 1993)、「おはじき」様の遊具として遺跡に持ち込まれたものではないかと考えられる。

次ぎに、貝類各種の生息場所（表１参照）を採集空間を考え、どのような場所で採集が行われたかを検討した（表２)。その結果は、明瞭で、いずれの場所でも外洋－サンゴ礁域(以下、

サンゴ礁域）のものが生息場所の明らかになったものの90％以上を占めていた。その中でも、優占種のマガキガイの生息するイノー内が50％を越える場所があり、チョウセンサザエ・コオニコブシ・ハナマルユキの見られる干瀬（リーフ）も30－40％を占めていた。一方、内湾－転石域（以下、内湾域）は５％程度で、河口干潟－マングローブ域（以下、河口干潟域）の貝類はほとんど採集されていなかった。この組成は、「王を支える側近の武士たち」の屋敷群（金武,1986）である城内の志慶真門郭の組成とかなり類似する（表２）。ただ、この志慶真門郭の組成に関しては、報告のベニシリダカやオニコブシをそれぞれサラサバテイラとコオニコブシに変えるなどの、これまでの同定結果に基づく変更を行っている。

また、今回は３つの屋敷地とひとつの非屋敷地のサンプルを検討できたが、表２に示したように、およその出土個体数やその組成･生息場所類型がいずれもほぼ同様な値を持っていた。つまり、屋敷間や屋敷と非屋敷の間での相違は認められないという結果であった。

今回示されたマガキガイなど外洋－サンゴ礁の貝類が優占する遺跡は、その立地により成立し（例えば嘉手納町野国Ｂ貝塚［盛本,1984］等）、貝塚時代後期に多い（例えば黒住，1989；島袋，1996等）。しかしながら、グスク時代になると、貝塚時代後期のサンゴ礁域の貝類組成から、カンギクやアラスジケマンの優占する内湾域や河口干潟域が採集の空間となることが知られている（例えば比嘉,1983；黒住，2002等）。今帰仁城跡の主郭でも、かなり明瞭に13～14世紀にはサンゴ礁域の貝類の多い組成から、16～17世紀の河口干潟域のアラスジケマンの優占するものへの変化が報告されている（黒住，1991）。

また、貝塚時代後期からグスク時代にかけて、イノー内に生息するシャコガイ類のサイズも小型になることが知られている（黒住，1991,2002）。今回、本遺跡で確認できたシャコガイ類は比較的少なく、サイズの計測も僅かな個体でしか行えなかった。そのサイズはヒメジャコで38－66㎜、シラナミで38－93㎜、シャゴウで70－170㎜、ヒレジャコで230－270㎜という推定値を含んだ範囲にあった。これは、前２種では、今帰仁城跡主郭の下部の層の、ヒレジャコでは新しい東斜面の値に近いものであった。

２）家臣団クラスにおける貝類採集実態の推定

前述したように、今回の結果ではサンゴ礁域の貝類がほとんどを占めており、グスク時代の今帰仁城域という同一地域内でも、これまでの内湾域と河口干潟域の貝類が優占するという結果と全く異なっていることが示された訳である。このような現象をどのように理解するかは大変興味深いことと思われる。つまり、文献資料の多くなる1609年の島津侵入以前の身分制が強固に確立していない時代の家臣団クラス（武士とも考えられるが、身分制・位階制の中での実体は不明であろう：田名，1990も参照）の生活様式の一端を、今回の貝類遺体の組成は物語っていると、筆者には考えられるからである。

今回のようなサンゴ礁域の貝類の優占する遺体群の形成要因を以下に、考えてみたい。いくつかの要因が考えられるが、それらは、１）投棄場所の問題、２）貝殻溶解の問題、３）採集者の問題という順に考察し、前記の家臣団クラスの生活様式の検討に入れるものであろう。１）の投棄場所の問題は、小型の貝類やサンゴ礁以外のものは別な場所に投棄したという想定である。今回は屋敷地と非屋敷地で、組成に大きな相違が認められなかったので（表２）、投棄場所が貝類群の間で異なっていたとは考えにくい。しかし、前述した城内の志慶真門郭の報告において、金武（1986）は「貝殻は郭内には少ないことから郭外に捨てられたものと考えられる」とし、黒住（1991）の報告した東斜面でアラスジケマンの割合が極めて高いことは、金武（1986）の想定を裏付けていると考えられる。今回の周辺遺跡においても、アラスジケマン等は調査区外の別の場所に投棄された可能性は否定しきれない。ただ、今回の調

査では、アラスジケマンの出土個体数は極めて少なく（表１）、志慶真門郭よりも低い割合であり（表２参照）、周辺遺跡ではアラスジケマンはそれ程多くなかったと考えられる

次に、２）の溶解の問題は、発掘地点の土壌の性質や貝殻の堆積が少なかったため、薄質の貝類が溶解してしまうということで、厚質のヤコウガイ等でも溶解が認められ、確実に存在していた。水洗選別によって、小型貝類遺体がほとんど認められなかったことも、この溶解によるものであろう。この溶解で、厚質のサンゴ礁域の貝類の割合が増加したことは間違いないであろう。しかし、グスク時代に多くなる河口干潟域のアラスジケマンは厚質であり、溶解による生息場所類型組成の本来の廃棄組成との差は、存在するものの、それ程大きいとは考えられない。

１）の投棄場所の問題でアラスジケマンが極めて多いとは考えられず、２）の溶解が基本的に否定されたので、本遺跡ではサンゴ礁のものが多かったという遺体群の特徴は、３）の採集者の問題によるものと考えられる。つまり今回の結果は、ここに住んでいた家臣団クラスの人々の生活実態を貝類遺体の組成から示すことなると思われる。例えば、志慶真門郭では米と麦が多量に認められたが、農具はほとんど出土せず（金武, 1986）、この場所の人々はあまり農作業に従事せず、穀類は何らかの形で供給されたものというこれまでに想定されている事象を検証していると言えよう。

まず河口干潟域のアラスジケマンが極めて少なかったことから（表１）、前述の異なった投棄場所という可能性も残るが、この集団ではアラスジケマンの採集はそれ程大きなものではなかったと考えられる。しかし、マガキガイやチョウセンサザエ等のサンゴ礁域のものが個体数でも種数でも比較的多いことから、この集団自らがサンゴ礁で採集を行っていた可能性が高いように思われる。つまり、他の集団が得た貝類を受け取るだけであったならば、貝類の組成が食用の種により集中するのではないかと考えられる。このことは、ヤマト近世のシジミ売りのような単一種のみを意識した供給は、アラスジケマンでその可能性があるものの、この時代の主郭を含む本遺跡周辺では、それ程発達していなかったのではないかということも考えられる。

ここで得られたサンゴ礁域のマガキガイ等は、自家消費されたことは確実であろうが、これらのサンゴ礁の貝類が城内のより階層の高い集団への供給されたかどうかは現時点では不明である。さらには、このマガキガイ等を採集した人間は、いわゆる主人を含む男性であったのか、女性を含む家族であったのかは、もちろん明らかにできない。逆に言うと、男性は漁労活動に参加せず、それ以外の家族がサンゴ礁での貝類採集に従事した可能性も否定できない。ただ、本遺跡では、最も安全な採集空間であるサンゴ礁域の岸側潮間帯の貝類が少ないので、貝類採集にも男性がかかわっていた可能性が高くなろう。このことは、魚類の採集でもブダイ類以外にも小型のベラ科が得られているなど（金子, 1991；名島, 2005）、網漁のような男性を含む活動が考えられよう。

前述したように、本遺跡と城内の志慶真門郭の貝類組成は比較的類似しているが、後者ではフタが中心であるがヤコウガイが多く、ハナマルユキが出土していないという相違が認められる（表２）。志慶真門郭では金属器等の貴重品が比較的多く出土し、金属製の釣り針は出土しているものの貝錘等の漁労具は出土していないことから、この場所の集団が自らヤコウガイを得ていたとは考えにくい。そう考えると、志慶真門郭の多いヤコウガイは、城内に供給された多量のヤコウガイの中から多くの配分を受けていた結果と考えられよう。付記であるが、志慶真門郭ではヤコウガイの殻が報告されておらず、殻は別な集団へ再供給された可能性も考えられる。今回の周辺遺跡では、ヤコウガイは殻・フタとも少なく、また志慶真門郭で比較的多かったサラサバテイラも少なく、やはりこの集団がヤコウガイの採集を担って

いたとは考えにくい。そうすると、供給されたヤコウガイに関して、志慶真門郭よりも周辺遺跡で、その配分が少なかったと考えられ、これは何らかの城内と城外の階層差のひとつと考えられるかも知れない。逆に周辺遺跡での、ハナマルユキの多さは、集団間の嗜好の差ということも考えられるが、貝錘としての利用の差としても捉えることも可能ではないかと思われる。つまり、周辺遺跡の集団の方が、志慶真門郭の集団より、より貝類採集等の漁労にエネルギーを使っていたと考えられよう。

貝類遺体からのみではあるが、今回の周辺遺跡の人々は、少なくとも自給的に男性を含めてサンゴ礁域で中心的に貝類採集を行い、アラスジケマンの採集にはほとんど労力を投下せず、城内のより階層の高い者たちからのヤコウガイの配分を余り受けていなかったと想定した。そして、今帰仁城内・外の遺跡の出土貝類組成から、河口干潟域のアラスジケマンやサンゴ礁域のヤコウガイを採集し、主郭等へ供給していた集団、つまり近世の百姓層の一部の存在も想定できよう。

このように、貝類遺体からみた1609年の島津侵入以前の城外の家臣団クラス集団の生活実態を想定したわけであり、漁労がある程度の比重を占めていたと考えられた。このこと自体の検証や近世の身分制・位階制の確立に伴い、それぞれの集団で貝類採集様式の変化、ヤコウガイ等の各種貝類の採集集団の存在様式、さらにはこれらと農耕従事との関係等で、より詳細な検討が望まれる。

もちろん、今回の周辺遺跡の集団が、身分制と位階制の中でどのような位置にあったのかは今後の検討によらねばならないが、漁労とは別に「本務」があり、そちらが生活の主体であったことは確実であろう。ただ、これまでのグスク時代にサンゴ礁域の貝類採集が低下する現象の主要因を、黒住（2002）は農耕に従事することによる貝類採集時間の低下と考えており、この仮定に対し、今回の周辺遺跡の結果は、サンゴ礁域での採集を可能にする時間的な余裕を有していたことを示していると考えられる。

まとめ

今回検討できた貝類遺体は、マガキガイ・チョウセンサザエ・コオニコブシ・ハナマルユキの優占する外洋－サンゴ礁域の貝類で全体の90％以上が占められていた。今回と同時期の今帰仁城跡主郭の貝類遺体では、他のグスク時代の遺跡と同じくアラスジケマンの優占する河口干潟－マングローブ域が採集空間であった。グスク時代の遺跡において、このようなほとんど外洋－サンゴ礁域の貝類で構成されている例ははほとんど報告されていなかったと思われる。今回の結果は、この遺跡の集団が少なくとも自給的に男性を含めてサンゴ礁域で貝類採集を行っていた結果であると考えられた。今帰仁城跡の他地点との比較等から、アラスジケマンやヤコウガイは、別な集団から城内へ供給され、ヤコウガイはその後配分された可能性等も想定された。また、本遺跡では、グスク時代の他の遺跡でも確認されている食用にならない小型球形の巻貝が得られ、おはじき様の遊具であった可能性も考えられた。

参考・引用文献

田名真之. 1990. 身分制－士と農－. In 高良倉吉（編）, 新琉球史.中世編.下. pp. 37-62. 琉球新報社, 沖縄.

比嘉春美. 1983. 貝類遺存体. In 大城慧（編）, 我謝遺跡, 西原町文化財調査報告書, （５）:185-189. 西原町教育委員会, 沖縄.

金子浩昌. 1991. 今帰仁城跡出土の脊椎動物遺骸. In 金武正紀ら（編）, 今帰仁城跡発掘調査報告書, II, 今帰仁村文化財調査報告書, (14):361-401. 今帰仁村教育委員会, 沖縄.

金武正紀. 1986. 食料残滓. In 金武正紀・宮里末廣（編）, 今帰仁城跡発掘調査報告書, In 今帰仁村文化財調査報告書, （９）:130. 今帰仁村教育委員会, 沖縄.
黒住耐二. 1989. 貝類遺存体. In 岸本義彦（編）, 宇佐浜遺跡発掘調査報告書, 沖縄県文化財調査報告書, (93):95-117. 沖縄県教育委員会, 沖縄.
黒住耐二. 1991. 貝類遺存体. In 金武正紀ら（編）, 今帰仁城跡発掘調査報告書, II, 今帰仁村文化財調査報告書, (14):340-351. 今帰仁村教育委員会, 沖縄.
黒住耐二. 1993. 貝類遺存体. In 中村 愿（編）, 玉代勢原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (13):287-293. 北谷町教育委員会, 沖縄.
黒住耐二. 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活. In 木下尚子（編）, 先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－, pp. 67-86. 熊本大学文学部, 熊本.
盛本勲. 1984. 動物遺体. In 岸本義彦（編）, 野国.野国貝塚群Ｂ地点発掘調査報告書, 沖縄県文化財調査報告書, (57):23-68. 沖縄県教育委員会, 沖縄.
名島弥生. 2005. 今帰仁城跡周辺遺跡出土脊椎動物遺体. In 宮城弘樹（編）, 今帰仁城跡周辺遺跡, Ⅱ, 今帰仁村文化財調査報告書, (14). 今帰仁村教育委員会, 沖縄.（本報告書）
島袋春美. 1996. 軟体動物遺体. In 島袋洋 (編), 平敷屋トウバル遺跡, 沖縄県文化財調査報告書, (125):161-167. 沖縄県教育委員会, 沖縄.

表１－１　今帰仁周辺遺跡の貝類遺体の詳細組成

		屋敷地1	屋敷地3	屋敷地4	非屋敷地	生息場所類型
軟体動物門 Mollusca						
腹足綱(海産) Gastropoda (Marine)						
リュウテン科 Turbinidae						
＊コシダカサザエ	Turbo (Marm.) stenogyrum			2	1	Ⅰ-2-a
＊チョウセンサザエ	Turbo (Marm.) angyrostomus	1,1c,4u,3uC	4u,3c,5uc	6u(1d),2b	1u,1c,1uC	Ⅰ-3-a
同（フタ）	(operculum)	58(1d),48c	31(1d),2C,12c	24	22,7c	
＊ヤコウガイ	Turbo (Lunatia) marmoratus	2b	2b	8b	1b	Ⅰ-4-a
同（フタ）	(operculum)	2u	3,1c	8, 2b	1,1f	
＊カンギク	Lunella moniliformis			1		Ⅱ-1-b
＊オオウラウズ	Astralium rhodostoma	1	1C			Ⅰ-2-a
ニシキウズ科 Trochidae						
＊ニシキウズ	Trochus (s.s.) maculatus	1uC,2bC	1b,1f	1	1u,1uC	Ⅰ-2-a
＊ムラサキウズ	Trochus (s.s.) stellatus	1bc	1f	1u		Ⅰ-3-a
＊ベニシリダカ	Trochus (Tectus) conus	1fc	2c,1uc			Ⅰ-4-a
＊サラサバテイラ	Trochus (Rochia) niloticus	3u	2,4u,1b,1c,2uc	3u	4u,1uc	Ⅰ-4-a
アマガイモドキ科 Neritopsidae						
アマガイモドキ	Neritopsis radula	1				Ⅰ-2-b
アマオブネ科 Neritidae						
＊アマオブネ	Nerita (Thely.) albicilla		1			Ⅰ-1-b
＊マルアマオブネ	Nerita (Thely.) squamulata	5		1	1	Ⅱ-1-b
＊ニシキアマオブネ	Nerita (Ampninerita) polita				1c	Ⅰ-1-c
＊カノコガイ	Clithon sowerbianus		1		1	Ⅲ-1-e
オニノツノガイ科 Cerithiidae						
＊オニノツノガイ	Cerithium (s.s.) modulosum	7,1u	8,7c	4	9	Ⅰ-2-c
＊コオニノツノ	Cerithium (s.s.) columnum	1,6c				Ⅰ-2-a
＊クワノミカニモリ	Clypeomorus chemnitziana	4		1	17	Ⅰ-1-b
＊オシマカニモリ	Clypeomorus subbrevicula	2	1ch			Ⅱ-1-b
スイショウガイ科 Strombidae						
＊ムカシタモト	Strombus (Can.) mutabilis	11c	1,1C,1u	2	2,4c,1uC	Ⅰ-2-b
＊オハグロガイ	Strombus (Can.) urceus				1	Ⅱ-2-c
＊マガキガイ	Strombus (Con.) luhuanus					Ⅰ-2-c
完形			18,4c,26C	1	2c	
外唇欠		10b	54,12c,9Cj	34	32,4c	
螺塔		83(73H)	49(10H),7c	79(57H)	29H, 1c	
＊ネジマガキ	Strombus (Gibb.) g. gibbosus	1		1	1	Ⅰ-2-c
＊イボソデ	Strombus (Lentigo) lentiginosus	1	1			Ⅰ-2-c
ゴホウラ	Strombus (Tric.) latissimus				1u	Ⅰ-4-c
＊クモガイ	Lambis lambis	1u	1,2u,2b,2c,2uc	2b	4u,2b,3uc,3bc	Ⅰ-2-c
＊スイジガイ	Harpago chiragra		1,1f,1c		4f	Ⅰ-2-c
タカラガイ科 Cypraeidae						
＊キイロダカラ	Cypraea (Monetaria) moneta	1,1dL,1ubc	1c			
＊ハナビラダカラ	Cypraea (Monetaria) annulus	3,2dL,1ub,1ol	2ub	3dL,1ub,1ol	1,1dL	Ⅰ-1-a
＊ハナマルユキ	C. (Rav.) caputserupentis	2,4c,17dL,4dLc,13ub, 7ubc,5il,25ol,17olc	2c,3dL,4dLc,3ub, 4ubc,1uc,2ol,5olc	6dL,3ub,1il,2ol	3,1c,12dL,6ub, 1ubc,16ol,4olc	Ⅰ-1-a Ⅰ-3-a
＊カモンダカラ	Cypraea (Erosaria) helvola			1	1	Ⅰ-2-a
＊コモンダカラ	Cypraea (Erosaria) erosa				1	Ⅰ-2-b
＊ナツメモドキ	Cypraea (Eronea) errones	1c,1ol		6c		Ⅰ-2-b
＊スソムラサキダカラ	Cypraea (Ovatipsa) chinensis			1dL,1ol		Ⅰ-2-a
＊ウスムラサキダカラ	Cypraea (Blas.) luchuana	1c		1		Ⅰ-2-b
＊クチムラサキダカラ	Cypraea (Ponda) cearneola			1e	1	Ⅰ-2-a
＊ホシキヌタ	Cypraea (Ponda) vitellus		2dL,1ol,1olc	1ub,1ol	1,1ub,1il	Ⅰ-2-a
ヒメホシダカラ	Cypraea (Lyncina) vitellus		1c			Ⅰ-2-b
＊ヤクシマダカラ	Cypraea (Arabica) arabica	1f	6ol			Ⅰ-2-a
＊ホシダカラ	Cypraea (s.s) tigris		1ol	1ol		Ⅰ-2-c
＊タカラガイ類	Cypraea spp.	1ub,3ol,5il	1ub,6ol,3il	7ol,7il	6ol,2il	Ⅰ
タマガイ科 Naticidae						
トミガイ	Polinices tumidus			1		Ⅰ-2-c
リスガイ	Mammilla melanostoma	1				Ⅰ-2-c
フジツガイ科 Ranellidae						
＊ミツカドボラ	Cym. (Cymatr.) nicobaricum	3,3b	1C		1u	Ⅰ-3-a
＊サツマボラ	C. (Cymatriton) aquatile			2b		Ⅰ-3-a
＊シロシノマキ	Cymatium (Septa) mundum	2,1b				Ⅰ-2-a
＊シオボラ	C. (Gutturinum) muricinum		1bc	1		Ⅰ-2-a
＊ホラガイ	Charonia tritonis		1jb,1f			Ⅰ-4-a
オキニシ科 Bursidae						
＊オキニシ	Bursa (s.s) bufonis dunkeri	4,3b	4,1u,5b,1bc	2j	2,1u	Ⅰ-3-a
＊イワカワウネボラ	B. (Col.) granularis	1,1b	1b			Ⅰ-3-a
アッキガイ科 Muricidae						
テングガイ	Chicoreus (s.s.) ramosus		1fd			Ⅰ-4-a
＊ガンゼキボラ	C. (Triplex) burunneus			1b	2,1c	Ⅰ-2-a
ウネレイシダマシ	Cronia (s.s.) margariticola	1				Ⅰ-1-b
＊シラクモガイ	Thais (Stramonita) armigera	3,1u	1,2b	3	2	Ⅰ-3-a
＊ツノレイシ	Thais (Stramonita) savignyi	12,4u,1c	14,2u,1b	9,2b		Ⅰ-3-a
＊ツノテツレイシ	Mancinella hippocastanus			1	6,1u	Ⅰ-1-a
＊テツレイシ	Mancinella tuberosa			1		Ⅰ-1-a
＊レイシ類	"Thais" spp.			3		Ⅰ
＊ムラサキイガレイシ	Drupa (s.s.) morum	1b				Ⅰ-3-a
＊アカイガレイシ	Drupa (Ricinella) rubusidaeus	1	1,1c	2		Ⅰ-3-a
＊キイロイガレイシ	Drupa (Drupina) grossularia		1			Ⅰ-3-a
クチムラサキサンゴヤドリ	Coralliophila neritoides	1c				Ⅰ-2-a
オニコブシ科 Vasidea						
＊コオニコブシ	Vasum turbinellum	17,1u,2b	16,1u,15b	16,24b	11,5b	Ⅰ-3-a
フトコロガイ科 Columbellidea						
フトコロガイ	Euplica vesicolor	2				Ⅱ-2-d
ムシエビ	Pyrene flava	1,1b				Ⅰ-2-a
オリイレヨフバイ科 Nassariidea						
アワムシロ	Nioth albescens	3				Ⅰ-2-c
アツムシロ	Nioth semisulcata	2		1		Ⅰ-1-a
ヨフバイモドキ	Telasco limnaeiforims	14	1			Ⅱ-2-c

表１－１　今帰仁周辺遺跡の貝類遺体の詳細組成（つづき）

		屋敷地1	屋敷地3	屋敷地4	非屋敷地	生息場所類型
イトマキボラ科 Fasciolariidae						
＊イトマキボラ	Pleuroploca trapezium	2j,2b	5,24b	1	2u,2b,1c	Ⅰ-2-a
＊リュウキュウツノマタ	Latirus polygonus	1			1	Ⅰ-2-a
＊ツノマタモドキ	Latirus belcheri	1	2u,1bc			Ⅰ-3-a
＊ベニマキ	Benimakia fastigia			2		Ⅰ-2-a
＊キイロツノマタモドキ	Peristernia luchuana	2				Ⅰ-2-b
＊ムラサキツノマタモドキ	Peristernia nassatula	1f				Ⅰ-2-a
＊チトセボラ	Fusinus nicobaricus	2(1j)	1			Ⅰ-2-c
マクラガイ科 Olividae						
ジュドウマクラ	Oliva miniacea				1c	Ⅰ-2-c
チョウセンフデ科 Mitridae						
チョウセンフデ	Mitra mitra		1c			Ⅰ-2-c
＊ニシキノキバフデ	Mitra stictica	2	1bc,1uC		1	Ⅰ-2-a
コシマヤタテ	Strigatella zebra	1				Ⅰ-1-a
イモフデ	Pterygia dactylus	1c	1c		1c	Ⅰ-1-a
イモガイ科 Conidae						
＊マダライモ	Conus (Virro.) ebraeus	5b,1c		2,1b	4c	Ⅰ-1-a
＊サヤガタイモ	Conus (Virro.) fulgetrum	9	2		1c,1uc	Ⅰ-1-a
＊ハナワイモ？	Conus (Virro.) sponsalis?				1	Ⅰ-1-a
＊ジュズカケサヤガタイモ	Conus (Virro.) coronatus	1				Ⅰ-1-a
＊キヌカツギイモ	Conus (Virgi.) flavidus	1,1u	1c,1uc		1,1c	Ⅰ-2-a
＊イボシマイモ	Conus (Virgi.) lividus	1,6u,4c	2,1c,1uc	2,1u	1,3c,2uc	Ⅰ-2-a
ヒラマキイモ	Conus (Dauciconus) planorbis				1c	Ⅰ-2-c
ササラモドキ	Conus (Dauciconus) vitulinus		1c,1uc			Ⅰ-2-c
＊ヤナギシボリイモ	Conus (Rhizo.) miles	3,2u,1bc	3,2uc	1	1u,1uC	Ⅰ-3-a
＊ハイイロミナシ	Conus (Rhizo.) rattus		1			Ⅰ-3-a
＊サラサミナシ	Conus (Rhizo.) capitaneus	1f	1f			Ⅰ-2-c
イタチイモ	Conus (Rhizo.) mustelinus				1bc	Ⅰ-2-c
＊クロミナシ	Conus (s.s.) marmoreus	1,2u	1c,2uc	2(1j)	1,1c,1bc	Ⅱ-2-c
＊ミカドミナシ	Conus (Rhombus) imperialis		1f			Ⅰ-2-c
＊アカシマミナシ	Conus (Leptoconus) generalis	1b				Ⅰ-2-c
＊ゴマフイモ	Conus (Puncticulis) pulicarius	1b	1c		1c	Ⅰ-2-c
＊コモンイモ	Conus (Puncticulis) arenatus	4	1fc			Ⅰ-2-c
クロザメモドキ	Conus (Lithoconus) eburneus		1c			Ⅰ-2-c
＊アンボンクロザメ	Conus (Lithoconus) litteratus		1u,1uc,1bc	1f	1c	Ⅰ-2-c
タガヤサンミナシ	Conus (Dario.) textile		1fc			Ⅰ-2-c
＊アジロイモ	Conus (Dario.) pennaceus	1,2c,1cd	1bc	1u,1b	1e	Ⅱ-2-c
ニシキミナシ	Conus (Strioconus) striatus				2uC	Ⅰ-2-c
＊小形イモガイ	Conus spp. (small size)	20	2	2,9u(5H)	3	
＊中形イモガイ	Conus spp. (middium size)	7,34u,3b	4,13u,1uc	1,1b,18u(5H)	4,13u(1H)	
＊大形イモガイ	Conus spp. (large size)	1b	4u,2b		3u,1b	
ナツメガイ科 Bullidae						
コナツメ	Bulla punctata	1c				Ⅰ-2-c
腹足綱（淡水産）Gastropoda (Fresh water)						
トウガタカワニナ科 Thiaridae						
＊トウガタカワニナ	Thiara scabra	8,2h,3c		2	2	Ⅳ-5/6
ヌノメカワニナ	Melanoides tuberculatus		1c			Ⅳ-6
カワニナ科 Pleuroceridae						
＊カワニナ	Semisulcospira bensoni	5	3c		5	Ⅳ-5/6
腹足綱（陸産）Gastropoda (Terrestrial)						
キセルガイ科 Clausiliidae						
ツヤギセル	Luchuphaepusa p. praeclara	2	2c			Ⅴ-8
ナンバンマイマイ科 Camaenidae						
シュリマイマイ	Satsuma (s.s.) m. mercatoria	2f,2fc	2f		2bc	Ⅴ-8
二枚貝綱（海産）Bivalvia (Marine)						
フネガイ科 Arcidae						
＊エガイ	Barbatia (Abarbatia) lima	1/0				Ⅰ-1-a
＊クロミノエガイ	Barbatia cruciata	1/1			1/4	Ⅱ-2-a
＊ベニエガイ	Barbatia (Ustularca) fusca	0/1				Ⅰ-2-a
＊リュウキュウサルボオ	Anadara antiquata	5(1d),4c,4uc/5,3c,3uc	1,1u,2c/2u	1d/2f(1d)	2,1ue/1,2u	
タマキガイ科 Glycymerididae						
ソメワケグリ	Glycymeris reevei				1uc/1u	Ⅱ-2-c
シラスナガイ科 Limopsidae						
シラスナガイ	Oblimpoa multistriata				1c/0	Ⅰ-4-c
ウグイスガイ科 Pteriidae						
ミドリアオリ	Pinctada panasesae		1c/0			Ⅰ-1-a
イタヤガイ科 Pectinidae						
イタヤガイ科の一種	Pectinidae gen. & sp.			1f		Ⅵ-12
ウミギク科 Spondylidae						
＊メンガイ類	Spondylus sp.	4e/1	1ue/1c	1f	3/1,2c	Ⅰ-2-a
ミノガイ科 Limidae						
ミノガイ	Lima vulgaris		1ud/0			Ⅰ-2-a
ベッコウガキ科 Picnodonteidae						
ヒラガキ	Parahyotissa numisma				0/1c	Ⅰ-2-a
イタボガキ科 Ostreidae						
ニセマガキ？	Saccostrea echinata?	0/1c				Ⅱ-1-b
キクザル科 Chamidae						
＊シロザル？	Chama brassica			1f	0/1	Ⅰ-2-a
＊キクザル類	Chama sp.	0/3				Ⅰ-2-a
ザルガイ科 Cardiidae						
＊リュウキュウザル	Regozara flavum	1f			1f	Ⅱ-2-c
＊カワラガイ	Fragum unedo	4u/2u	1f	2u/0		Ⅱ-2-c
シャコガイ科 Tridacnidae						
＊シラナミ	Tridacna maxima	1,3u/2,2u	3u/1c	2u/1u	1u/1	Ⅰ-2-a
＊ヒレジャコ	Tridacna squamosa	2f	0/1u	1f	1u/0	Ⅰ-2-c
＊ヒメジャコ	Tridacna crocea	1u/0	0/2	2u/1,1u	2/1	Ⅰ-2-a

表１－１　今帰仁周辺遺跡の貝類遺体の詳細組成（つづき－３）

		屋敷地1	屋敷地3	屋敷地4	非屋敷地	生息場所類型
*シャゴウ	Hippopus hippopus	1u/0	1u/1u	1u/1u	0/1u,1uc	Ⅰ-2-c
*シャコガイ類	Tridacnidae spp.	4u/2u	1u/3u	2u/1u	2u/4u	Ⅰ-2
チドリマスオガイ科	Mesodesmatidea					
*イソハマグリ	Atactodea striata	5(1d),1u,1c/7,3u,1c	2/1	11/4	6,3c/2,4c	Ⅰ-1-c
*ナミノコマスオ	Davila plana	1/0		0/1		Ⅰ-1-c
ニッコウガイ科	Tellinidae					
リュウキュウシラトリ	Quidnipagus palatam	1fc			0/1c	Ⅱ-1-c
*サメザラ	Scutarcopagia scobinata	1f	1f		1f,1fc	Ⅰ-2-c
イソシジミ科	Psammobiidae					
リュウキュウマスオ	Asaphis violacens				1fc	Ⅱ-1-c
シジミ科	Corbiculidae					
*シレナシジミ	Geloina erosa		1/0			Ⅱ-0-c
マルスダレガイ科	Veneridae					
*ヌノメガイ	Periglypta purpera	4u/4u	2u,1c/1u	8f	0/1u,1uc	Ⅱ-2-c
*アラヌノメ	Periglypta reticulata		0/1	1f	0/1	Ⅰ-3-c
*ホソスジイナミ	Gafrarium pectinatum	2,1u/0	4,1u/1,1u	2f	1,1c,3uc/1,3c	Ⅱ-1-c
*アラスジケマン	Gafrarium tumidum	1,3u/1	2u/1u			Ⅲ-1-c
*ヒメイナミ	Gafrarium disper	1c/1				Ⅰ-1-c
アサリ*2	Ruditapes philippinarum		1,1u/1			Ⅵ
造礁サンゴ片	fragmets of eroded corals			4		

＊：グスク時代の食用貝類を含む種, ＊2:明らかに現代の持ち込み.
C:色残り, c:非グスク, d:死殻, dL:背面欠, e:磨滅, f:破片, H:穿孔穴, h:オカヤドカリ宿貝, j:幼貝, il:内唇, ol:外唇, u:殻頂, 二枚貝は左殻/右殻.

生息場所類型 (Habitat)

Ⅰ：外洋ーサンゴ礁域
Ⅱ：内湾ー転石域
Ⅲ：河口干潟ーマングローブ域
Ⅳ：淡水域
Ⅴ：陸域
Ⅵ：その他

0：潮間帯上部（Ⅰではノッチ, Ⅲではマングローブ）
1：潮間帯中・下部
2：亜潮間帯上縁部（Ⅰではイノー）
3：干瀬（Ⅰにのみ適用）
4：礁斜面及びその下部
5：止水
6：流水
7：林内
8：林内・林縁部
9：林縁部
10：海浜部
11：打ち上げ物
12：化石

a：岩礁／岩盤
b：転石
c：礫／砂／泥底
d：植物上
e：淡水の流入する礫底

表２　今帰仁周辺遺跡および志慶真門郭（金武，1986）の貝類遺体の生息場所類型と優占種

	屋敷地１	屋敷地３	屋敷地４	非屋敷地	志慶真門郭
総出土個体数	460	354	324	272	550
（生息場所不明のイモガイ類を除いた個体数）	405	331	294	249	550
生息場所類型（頻度：%）					
外洋ーサンゴ礁域（Ⅰ）	91.11	96.68	95.24	92.77	93.82
潮間帯中・下部（Ⅰ-1）	9.14	1.51	3.74	13.25	1.63
イノー内（Ⅰ-2）	40.00	58.01	51.36	13.37	29.10
干瀬（Ⅰ- 3）	41.23	32.63	32.65	32.13	46.19
礁斜面（Ⅰ-4）	1.23	3.02	4.42	2.41	16.90
内湾ー転石域（Ⅱ）	5.43	2.41	4.08	4.02	0.54
河口干潟ーマングローブ域（Ⅲ）	0.25	0.90	0.00	0.40	5.64
淡水域（Ⅳ）	3.21	0.00	0.69	2.81	0.00
優占種（頻度：%）＊					
マガキガイ	20.22	34.18	35.19	22.43	16.73
チョウセンサザエ	12.39	8.76	7.41	8.09	13.83
コオニコブシ	4.35	8.76	12.35	5.88	22.00**
タカラガイ類	11.74	6.78	7.72	17.28	2.00
ハナマルユキ	9.57	1.69	2.78	12.50	0.00
イモガイ類	20.65	9.60	12.65	9.93	2.55

＊：いずれかの場所で総出土個体数の10%以上のもの, **：報告のオニコブシを含む

第６節　今帰仁阿応理屋恵勾玉について

宮　城　弘　樹（今帰仁村教育委員会）

（１）はじめに

今帰仁城跡周辺遺跡には「今帰仁阿応理屋恵（あおりやえ）ノロ殿内火之神の祠」が現存する。ここには、現在も信仰の対象地で、参拝者が訪れている。火之神の祠は居住者が引っ越してもなお「火之神」を安置して祀った祠である。このため当地は今帰仁阿応理屋恵が居住した場所と想定される。よって、今帰仁阿応理屋恵について研究することは、今帰仁城跡周辺遺跡を検討する上で極めて重要な事であるといえる。そこで、本項では今帰仁阿応理屋恵ノロが継承していた勾玉についてその詳細を記載し、今帰仁阿応理屋恵に関する研究の一助としたい。

（２）寄託資料の概要

今帰仁阿応理屋恵ノロ勾玉は今帰仁阿応理屋恵ノロに継承される勾玉である。所有者は比嘉良寛氏（名護市）で、平成12年度に今帰仁村歴史文化センターに寄託され常設展示されている[註1]。寄託された資料は下記の資料である（写真１～３）。

写真１　勾　玉　一連
（勾玉22個、水晶玉30個）

写真２　水晶玉　一連
（水晶玉79個）

写真３　草　履　一式？
※従来草履といわれてきたが、その形状から足袋であるとされる。

（3）今帰仁阿応理屋恵ノロ勾玉の概要

今帰仁阿応理屋恵は地元では「オーレー」や「アットーメー」と呼ばれいる(『今泊誌』)。阿応理屋恵とは、聞得大君を頂点とする神女組織の上級神女「三十三君」の一人で、久米島の「きみはゑ」(チンベー)、伊平屋（伊是名）の伊平屋大あむ、奄美諸嶋大あんしゃり、宮古･八重山大阿母（つかさ)、などと同格の神女である（図１)。

図１　神女組織

今帰仁阿応理屋恵の継承については平敷令治が詳述（平敷1979）するので以下にこれを参考にしてまとめる。『女官御双紙』(1705年成立？）に記載された記録から16世紀から18世紀初めまでの五代記録されている。いずれも、第二尚氏系統の初代山北監守を勤めた尚詔威(しょうしょうい)(？～1500年代半ば頃）の一族ゆかりの女性がその職についている。なお、監守一族の墓が運天港付近にある大北(うーにし)墓で、別名按司墓と呼ばれる。過去に調査された厨子甕に記銘された被葬者名には「アヲリヤイアンシ」として三人の名がある（島袋1919)。

1701年に五代目の阿応理屋恵職に任じられたのは六代目の山北監守縄祖(じょうそ)の息子向従宣(こうじゅうせん)（与那嶺按司朝隣）の室であったが、1731年には旧慣改正を行う蔡温(さいおん)によって上級女官職が廃止される。今帰仁阿応理屋恵もその対象となり、これまでの与えられていた俸禄が無くなった。しかし、山北監守一族は無禄の阿応理屋恵を選任し祭祀を司らせていた。1761年に祭温が死去すると旧規に改める動きがあり、1769年には親泊村の兼次親雲上の娘が阿応理屋恵職として王府より公認されている。兼次親雲上と山北監守一族との系譜関係については不明だが、伝承では山北監守の落胤（らくいん）とされている（島袋1919)。残念ながら1769年に任じられた阿応理屋恵職の代数は判然としない。

1830年代以降は、旧親泊村長嶽原の糸洲家の娘が阿応理屋恵職を次いでいる。糸洲家は向従宣を祖系とする一族の宗家が首里寒川の糸洲家であるので、これの分家と考えられるとされる。糸洲家の初代は糸洲カマド（1811～1899?)、二代が糸洲ナビ（1881～1890年代頃?)、三代が糸洲ナベ（1896～現在）となっている。なお、二代の位牌を安置している祠が「阿応理屋恵御殿（オーレウドゥン)」として現在も今泊68番地に所在している。

平敷が調査した1978～79年当時、阿応理屋恵職は比嘉ウトさんであった。今帰仁村歴史文化センターに資料を寄託された比嘉良寛氏はウトさんのご子息にあたる。

次に、今帰仁阿応理屋恵ノロ職に継承された勾玉について確認しておきたい。一番最初の今帰仁阿応理屋恵職については不明であるが、『女官御双紙』をたよりに16世紀頃まで遡ることができる。その在職中は王府より俸禄が与えられたようであるが、18世紀には一時節減され、その後復活しているのは先に述べたとおりである。また、後年の1899～1903年の土地整理期間には阿応理屋恵按司の役地は百姓地に編入されている。勾玉そのものが今帰仁阿応理屋恵職に際

して、いつ頃から継承されたかについては不明な点が多い。いずれにせよ代々今帰仁阿応理屋恵職とともに継承され現在に至っている点は重要である。継承された宝物を具体的に記した文献としてやはり、『女官御双紙』がある。これに記された今帰仁阿応理屋恵の項には「金釵１個、玉加玻羅一連、玉草履一具」と記載されている。この記載から阿応理屋恵職の宝物として早い段階から継承されていたのではないかと推定される。その次は大正末期、鎌倉芳太郎が行った今帰仁阿応理屋恵御殿の遺品調査があげられる。『鎌倉芳太郎氏ノート』によると「曲玉一連（①大曲玉１ヶ、小曲玉21ヶ、水晶玉31ヶ／②水晶玉80ヶ）、玉がはら一連（かはら１大形、同22小形、水晶之玉106個）、玉御草履、冠玉たれ一連・同玉之緒一連、胸当一連」などがあったことがわかる（仲原1992）。同様の報告は島袋源一郎によってオーレーノロ所蔵の宝物として「曲玉（大形１、小形21）、冠玉たれ、同玉の緒、玉の胸あて、玉のぞうり、水晶玉（116）」として報告していることから、現在伝承される勾玉一連、水晶玉一連、玉草履以外にも、金釵（簪）、胸当等いくつかの伝承品があったことが分かる。

阿応理屋恵ノロとは別だが、これまでに各神女には文献史の研究等から王府が辞令を発給したことが分かっている。また各地域の地方ノロに継承されているものとして、神衣裳、簪、勾玉、扇、これらを入れる丸櫃、あるいは祭祀に使用される道具としての杯などの器や、玉貫なども知られている。今帰仁阿応理屋恵が『女官御双紙』や『鎌倉義太郎ノート』、『沖縄県國頭郡志』などに記載された祭具以外にも祭具等を所持していたことはほぼ確実と考える。

最後に、現存する勾玉の数について確認しておきたい。昭和７（1932）年に沖縄本島を中心に島田貞彦（島田1933）が調査している。この中で今帰仁阿応理屋恵ノロ勾玉についても詳述している。引用すると。「この按司の勾玉は大形勾玉１個、硬玉勾玉22個、水晶丸玉28個からなっている一連である」として報告する。昭和11（1936）年に調査した河村只雄（1999）は「径8.5センチの大きな黒い色をした丁子頭の二本ついた勾玉を中心に21個の小勾玉が」あるとしており、1932年から1936年の間に勾玉１個が紛失したであろうと想定される。現存する勾玉一連は大形勾玉１個、硬玉勾玉21個で河村の1936年の調査以後増減は無い。他方、水晶玉の個数は島田が28個として報告するが（島田1933）、現存するものは30個あり前述する調査からの増が認められる。島田（写真４）と河村（写真５）は調査時に撮影したと考えられる写真を報告論文に掲載しているので、これが参考になる[註2]。

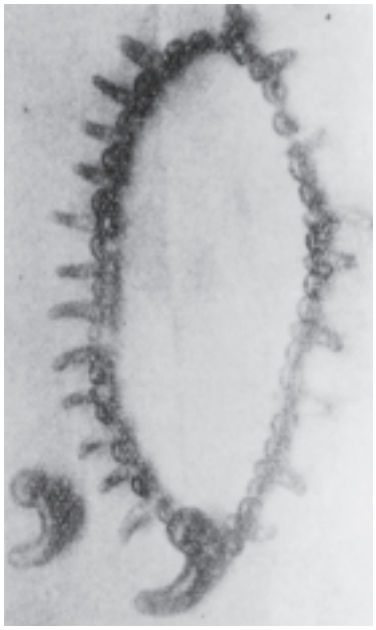


写真４　島田1933掲載写真

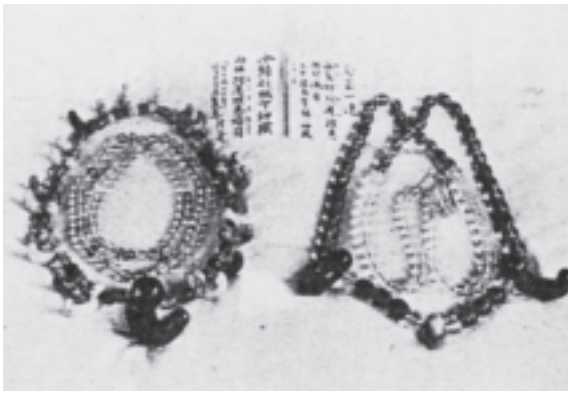


写真５　河村1999掲載写真

（５）勾玉調査報告

これまで示してきたように、今帰仁阿応理屋恵ノロの勾玉は今帰仁阿応理屋恵職が継承してきた祭具である。寄託された勾玉一連と水晶玉一連、そして玉御草履（足袋）の合計３点が現存するが、かつては簪や胸当等、寄託された資料以外の祭具等があったようである。

ここでは勾玉資料の基礎的な形状や材質などを紹介し、その出自や特徴などについて検討する材料としたい。本調査は2004年12月13・14日に以下の体制で実施した。

調　査　担　当：宮城弘樹（今帰仁村教育委員会文化財係）
実測・計測等：仲里なぎさ、上間恵子、鈴木美和、松本綾子（同上臨時職員）
鑑　　定：松本幡郎（元熊本大学教授）
調　査　指　導：木下尚子（熊本大学教授）・仲原弘哲（今帰仁村歴史文化センター館長）
　　金武正紀（今帰仁村発掘調査アドバイザー）

今回の主な調査対象としたのは大形勾玉を中央に配し水晶玉と勾玉で交互に繋ぐ勾玉一連である。この勾玉は写真１にあるよう一連となって継承されており、写真のとおりに展示されている。このため、実測や鉱物の鑑定・計量を行うにあたっては個々の勾玉を取り外すことが必要であった。手順としては先ず最初に図２のように個々の勾玉及び水晶玉に連番を付して整理を行った。図３・４の〇内に付された番号は図２の整理番号に一致する。

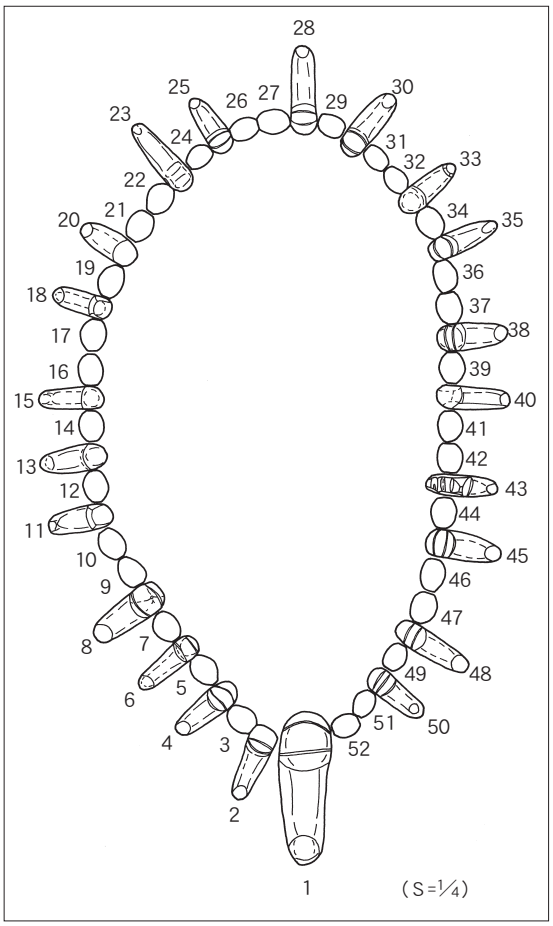


図２　阿応理屋恵勾玉配置図

今帰仁阿応理屋恵伝承の勾玉を本州日本の一般的な型式分類に従って紹介する。図３・４(以下図番号は省略枝番号のみ記載) １は勾玉一連の中で最も大きな勾玉で阿応理屋恵ノロ勾玉一連の中で象徴的な機能を果たしている勾玉である。定形的な丁子頭勾玉で紐通しの孔に向かって溝が２本、屈曲部分に一条合計３本の溝が刻まれている。材質は黒曜石とされ、北海道十勝産のものであると鑑定いただいた。２は溝が４本認められる事例で、３～10は１と同様に３本の溝が刻まれている。11は屈曲部に溝が刻まれていないが孔に向かって３本の溝が刻まれている。12～14は孔に向かって２本の溝が刻まれ溝も簡略化している。15は屈曲部に１本の溝が刻まれている。16～20は屈曲部が緩やかになりやや小形の定形勾玉である。21は特殊な事例で、勾玉の頭部がくぼみ頭部に１つ、体部に１つ穴が穿たれている。22は獣形勾玉で本勾玉一連の中でも唯一の事例である。これらの勾玉の石質から分類すると先に記したように１が黒曜石でそれ以外は蛇紋岩(２・４・８・９・18・14・20・21)と玉髄(３・５・６・７・10・13・15・16)を主体に流文岩(12)、石英(17)、蝋石(11)、碧玉(19)、緑色片岩(22)となっている。従来翡翠とされていた21・22(仲原ほか2001) については石質の鑑定によって正確には蛇文岩と緑色片岩と鑑定された。

一方、連結された勾玉は水晶玉（石英）を幾つか挟み一連となって繋がれる。最小の物は4.43gを計る。23はそれに継ぐ4.6gで、最大の物(24)でも5.69gを計ることから平均すると約５gのやや太鼓形の形状の丸玉である。一方水晶玉だけで繋がれた数珠は勾玉一連として繋がれているものに比べてやや球形に近い。25はその事例として１点だけ図示した。

（６）勾玉の年代について

日本本州における勾玉研究によれば、一般的な勾玉に関する歴史的な盛衰はその形態的特徴より諸種の概説がある。先ず勾玉のはじまりは縄文時代後・晩期に発達をとげるとされる。単純な牙形のほか、頭部にひだをつけるなど一つ一つで形が異なる。勾玉を珍重する風習が弥生時代にも引き継がれ、形はスマートになり、頂部に丁子頭とよぶ刻目をいれたものも登場する。前期後半ごろからガラスの玉が登場するようである。古墳時代にも弥生時代の伝統を引き継いで玉が作られるが、中期から後期になると、滑石の玉が大量に生産される。勾玉の初源については諸説あるが、縄文時代には登場し弥生時代から古墳時代に隆盛を迎えるとするのが一般的である。また、その消滅については７世紀中頃のヤマト政権の祭祀権･統治権の確立によって消滅し、国家宗教となった仏教に吸収され、鎮壇具、荘厳具などに変容しているとされる（浜本2004)。

他方沖縄の事情は日本本州とやや異なる。今帰仁阿応理屋恵ノロが今帰仁城等で祭祀を司っていたのは、日本本州で勾玉の持つ呪術的機能が衰退し、使用されなくなって以後、数世紀を経て祭具として採用されたことが伺える。勿論沖縄においてその継承を古墳時代や弥生時代に遡らせて考えることも可能であると思量されるが、これまでの県内の発掘調査からはこれを肯定的に考える材料は少ない。現在の研究ではグスク時代から近世の遺跡から出土品として登場することから（岸本2003)、勾玉に呪術的機能を見いだした、あるいはこれを装飾品として取り入れるといった伝統は14世紀前後に定着したものと考えられる。

さて、沖縄諸島における開始年代を考える上で、先ず今帰仁城跡出土の勾玉について紹介する。今帰仁城跡ではこれまで２つの郭で本格的な発掘調査が実施されている。一つは主郭（俗称本丸）の調査でここでは、層序から９枚の層に分層され、遺構の変遷等より４つの時期区分が想定されている。出土した勾玉は３点である。26はガラス製の勾玉で、27は翡翠製の勾玉、28は瑪瑙の勾玉である。26がやや大形の勾玉となる以外は27・28はやや小形の資料である（金武ほか1991)。28の出土層位がⅡ層上部であるため時期区分によれば、15世紀中頃～17世紀初頭に比定されると考える。他方、26・27はⅦ層から出土するため年代的にはⅡ期に該当し13世紀後半～14世紀前半頃で整理できると想定されている。もう一つ調査された郭に志慶真門郭がある。出土した勾玉は29～32で、29の翡翠の勾玉が出土している。30～32は小形の勾玉で形状も彎曲が緩やかな曲線となるものでガラス製である（金武ほか1983)。志慶真門郭はその発掘成果から14～16世紀頃に比定されると考えられている。またこの他本報告書で報告したⅡ区（屋敷地１）出土資料の33の石質は緑色片岩とされる。

次に今帰仁城跡以外の年代が抑えられる出土例として３例紹介する。１例は那崎原遺跡（那覇市）のⅢ層で土製の勾玉が出土する（図３-34)。本層はいわゆる貝塚時代後期のくびれ平底土器の単純層で貝塚後期終末期あるいはグスク時代直前の遺跡として知られ、当該期の出土例として唯一確認できる希有な例である。年代的には12世紀を遡る可能性が高い。２例目は天界寺（那覇市）の基壇内Ⅴ層の小形ガラス製の勾玉が１例（図３-35）ある。年代的には14後半～15世紀前半頃を想定している（島ほか2000)。３例目として首里城跡二階殿の落ち込み（SR11・12・24・32周辺）の一括資料に含まれる勾玉が４点がある（図３-36・37：報告される２点を図示)。年代的には13世紀末～15世紀中葉で捉えられるとされる陶磁器資料一括と一緒に出土するとされる。37の形状は石製（白色）の丁字頭勾玉とガラス製の勾玉である。

以上のように、阿応理屋恵ノロの勾玉一連は、一般的に言われる丁子頭勾玉や定形式勾玉と呼ばれる弥生時代に発達した勾玉を主に繋いだものであると言える。しかし沖縄での各地の発掘事例に照らし合わせても、初出が12世紀で各遺跡から安定的に出土しはじめるのは14世紀以降と考えられることから、本州日本の型式的所見から得られる帰属年代と沖縄の各グスクの発掘から得られる年代とには大きなギャップを認めざるを得ない。

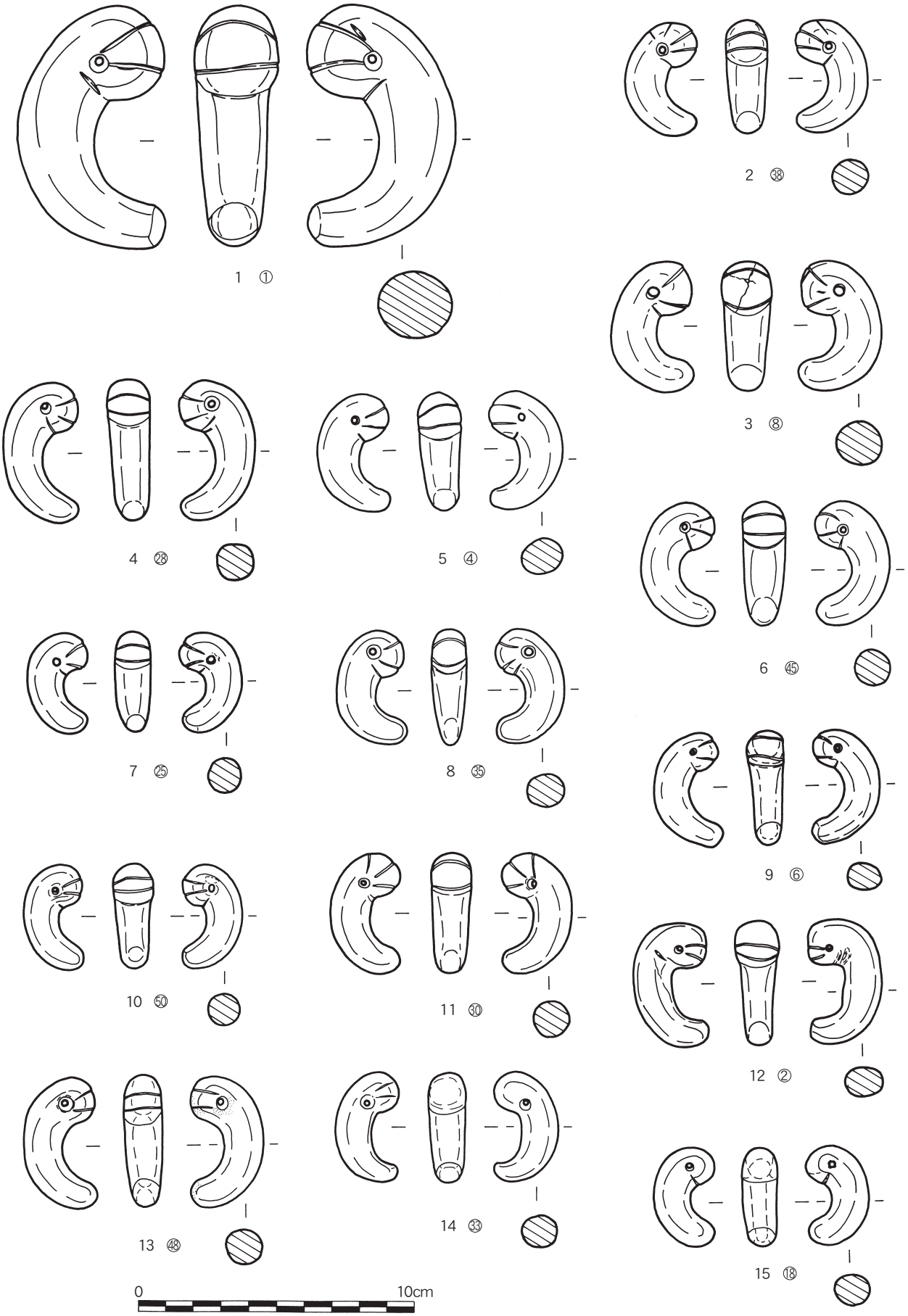


図３　勾玉実測図（１）

１～15：阿応理屋恵ノ口勾玉一連

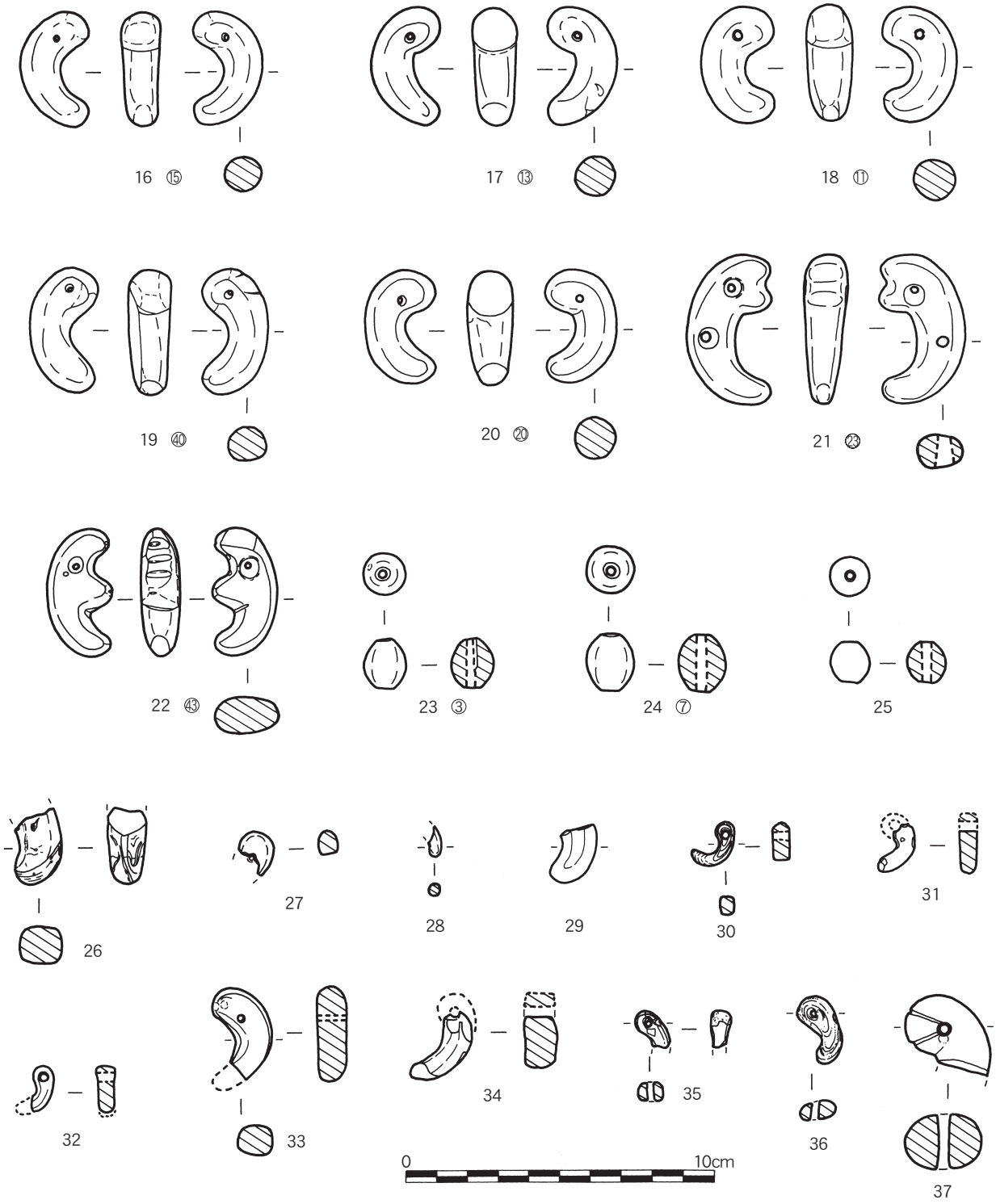


図４　勾玉実測図（２）

16～24：阿応理屋恵ノ口勾玉一連　25：阿応理屋恵ノ口水晶玉一連　26～28：今帰仁城跡主郭出土勾玉
29～32：今帰仁城跡志慶真門郭出土勾玉　33：今帰仁城跡周辺遺跡（Ⅱ区）出土勾配玉　34：那崎原遺跡出土勾玉
35：天界寺出土勾玉　36・37：首里城跡二階殿出土勾玉

（7）おわりに

今帰仁阿応理屋恵ノロが継承する勾玉がはたして「いつ、どこでつくられ、どのように入手したか」については大きな課題である。これについて考えるための基礎的な形状や材質等に関する内容を記載し紹介した。材質からは図３-１の大形勾玉が黒曜石であること、またこれが北海道十勝産のものである可能性が高いことを指摘いただいた。その他の硬玉製勾玉の材質について松本先生よりご教示いただき基礎的資料を提供することができた。形態については弥生時代から古墳時代前期頃に盛行する丁子頭勾玉が多く含まれることが分かった。本土の編年観を借用すればもう少し細かな年代や、その類例品の分布する地域が限定されることもあるかと考えるが、今回は概略的な考察となった。

朝鮮半島には丁子頭勾玉が出土しない点、中国や台湾東南アジアには勾玉の文化が発展しない点、形態や材質等から勾玉の形態的な模範が日本本州にあったことはほぼ間違い無いと考える。『おもろさうし』には以下のような謡が記されている。

一伊敷下
　世果報　寄せ付ける　泊
　（中略）
又楠は　こので
又大和船　こので
又大和旅　上て
又山城旅　上て
又珈玻瓏　買いに　上て
又手持ち　買いに　上て
又重い子の　為す
又わり金が　為す
『第十　ありきゑとのおもろ御さうし』（天啓三年癸亥三月七日）

大意は「伊敷の下の方の浜は世果報を寄せ付ける泊である。（中略）楠船、大和船を作って、大和旅、山城旅に上って、勾玉、手持ち玉を買いに上って、思い子、わり金様のためにこそ上るのだ。（外間2000）」珈玻瓏には諸説あるものの、勾玉を大和や京都へ買い付けに行く旅を謡ったとされている。しかしその源流が日本本州に求められたとしても、はたしていつ頃から勾玉を使う文化が沖縄に採用されたのかについては明確な答えは用意できていない。今回の調査によって勾玉の形態が日本本州との近縁関係で説明ができることが再確認された一方、グスク時代あるいは、それ以降の近世から現代に至る時代において神女が勾玉を継承している点についても明確な答えを得ることはできなかった。今後の課題である。琉球で勾玉が祭祀において極めて重要な位置を占めていることは、日本本州の勾玉を信仰した祭祀観念からすれば特異である。またその初出・定着がグスク時代に遡ることは出土状況から看取できる。今後はこの点についても更に検討を加えると共に、勾玉に関する基礎的資料を充実させることが重要であると考える。

参考文献

仲原弘哲　1992年「鎌倉芳太郎ノート」『なきじん研究』Vol.2　今帰仁村教育委員会（初出：仲原弘哲　1990年「鎌倉芳太郎ノート」『すくみち』第16号　今帰仁村教育委員会）
仲原弘哲ほか　2001年『なきじん研究』Vol.10　今帰仁村教育委員会（p５「今帰仁阿応理屋恵ノロ曲玉」）

島田貞彦　1933年「琉球勾玉考」『歴史と地理』31巻１号
平敷令治　1979年「今帰仁城をめぐる祭祀について」『国指定史跡保存管理計画書　今帰仁城跡』今帰仁村教育委員会
河村只雄　1999年『南方文化の探求』講談社
島袋源一郎　1919年『沖縄県國頭郡志』沖縄出版会
新城徳祐　1975年「史跡」『今帰仁村史』今帰仁村役場

註　釈

註１　仲原弘哲氏のご教示による。

註２　写真からは写りが悪いので判断に苦慮するが29個までは数えることができるので数え間違いということが考えられる。

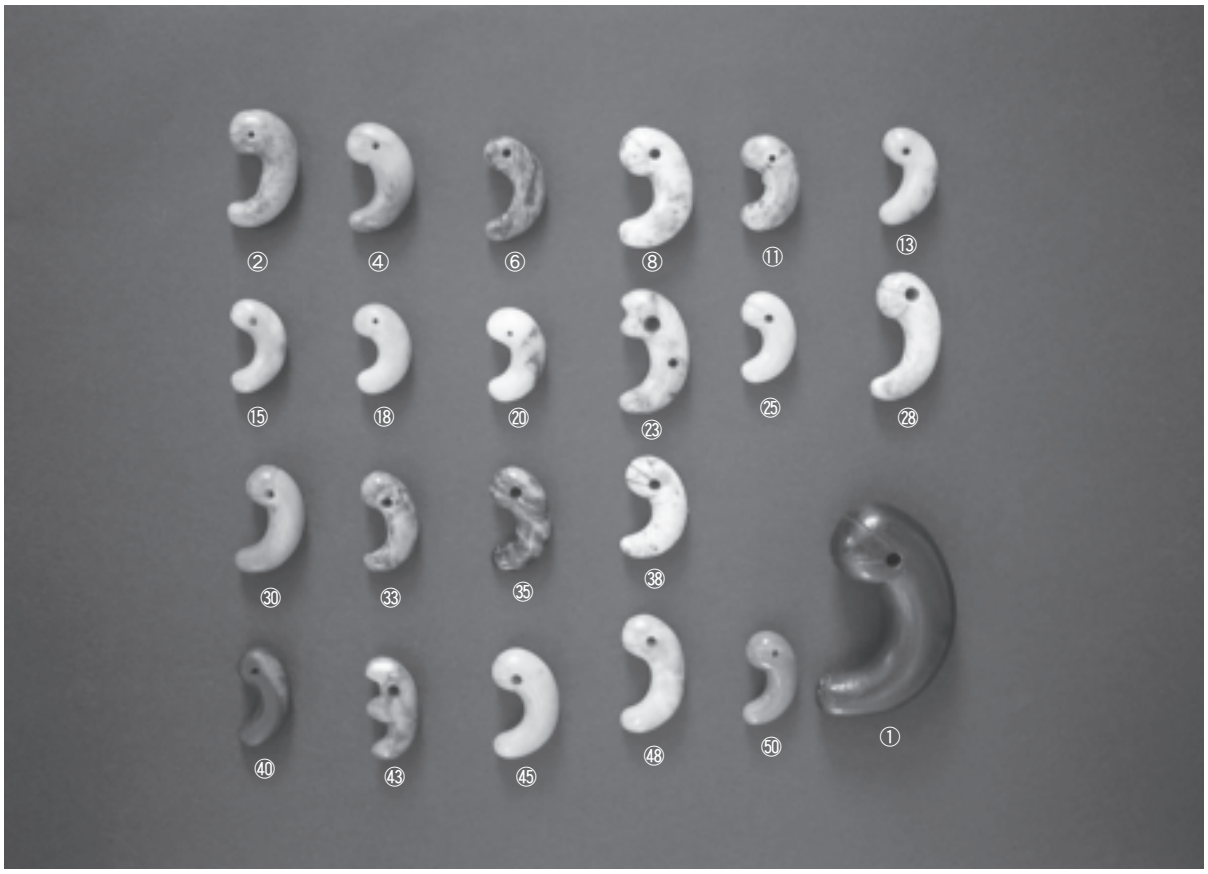
岸本竹美　2003年「グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察」『紀要沖縄埋文紀要』第１号　沖縄県立埋蔵文化財センター
岸本竹美　2005年「玉製品・骨製品」『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第29集
浜本隆志　2004年『謎解き　アクセサリーが消えた日本史』光文社
島弘ほか　2000年『天界寺跡』那覇市文化財調査報告書第43集　那覇市教育委員会
金武正紀ほか　1983年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告第９集　　今帰仁村教育委員会
金武正紀ほか　1991年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告第14集　　今帰仁村教育委員会
外間守善（校注）2000年『おもろさうし（上)』岩波書店p358-359

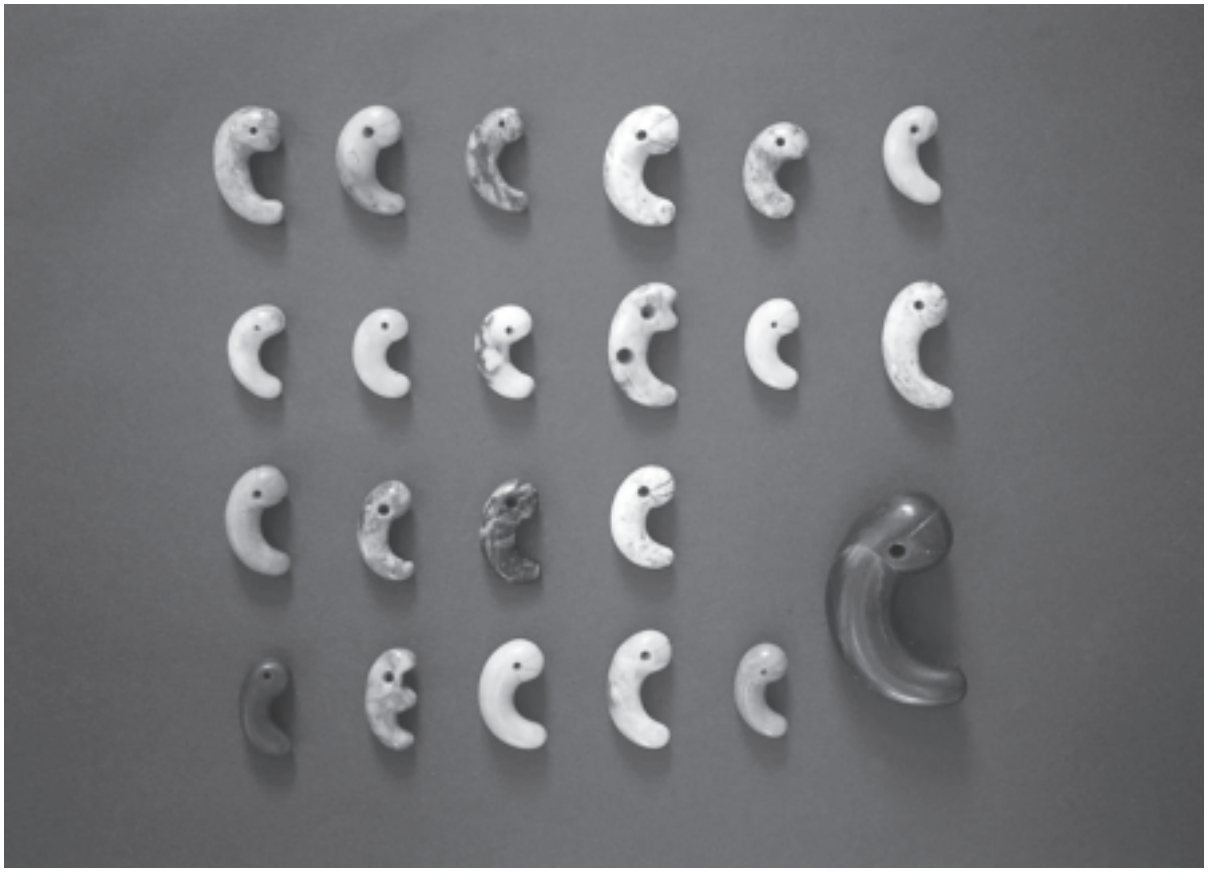
表１　阿応理屋恵ノ口の勾玉観察表

No.	図番号			型式分類	石質	重量(g)	備考
1	3	-	1	丁字頭勾玉	黒曜石	175.04	大、線刻３本
2	3	-	12	丁字頭勾玉	流文岩	21.89	線刻２本
3	4	-	23	丸玉	褐色石英	4.60	
4	3	-	5	丁字頭勾玉	玉髄	25.13	線刻２本
5				丸玉	褐色石英	5.71	
6	3	-	9	丁字頭勾玉	蛇紋岩	16.49	線刻２本
7	4	-	24	丸玉	石英	5.69	
8	3	-	3	丁字頭勾玉	玉髄	35.59	線刻３本
9				丸玉	石英	5.71	
10				丸玉	褐色石英	5.52	
11	4	-	18	定型勾玉	蛇紋岩	19.93	
12				丸玉	褐色石英	5.20	
13	4	-	17	定型勾玉	石英	15.07	
14				丸玉	褐色石英	5.37	
15	4	-	16	定型勾玉	玉髄	14.91	
16				丸玉	石英	5.32	
17				丸玉	石英	5.91	
18	3	-	15	丁字頭勾玉	玉髄	15.91	線刻１本
19				丸玉	褐色石英	5.40	
20	4	-	20	定型勾玉	蛇紋岩	17.59	
21				丸玉	褐色石英	5.34	
22				丸玉	褐色石英	5.52	
23	4	-	21	定型勾玉	蛇紋岩	27.33	穴２つ有り
24				丸玉	褐色石英	5.23	
25	3	-	7	丁字頭勾玉	玉髄	16.15	線刻２本
26				丸玉	褐色石英	6.57	

No.	図番号			型式分類	石質	重量(g)	備考
27				丸玉	褐色石英	4.52	
28	3	-	4	丁字頭勾玉	蛇紋岩	27.96	線刻３本
29				丸玉	石英	4.71	
30	3	-	11	丁字頭勾玉	蝋石	19.17	線刻３本
31				丸玉	石英	4.98	
32				丸玉	石英	5.58	
33	3	-	14	丁字頭勾玉	蛇紋岩	17.49	線刻１本
34				丸玉	褐色石英	4.55	
35	3	-	8	丁字頭勾玉	蛇紋岩	17.66	線刻３本
36				丸玉	褐色石英	4.43	
37				丸玉	石英	5.65	
38	3	-	2	丁字頭勾玉	蛇紋岩	22.33	線刻４本
39				丸玉	褐色石英	5.18	
40	4	-	19	定形勾玉	碧玉	14.78	
41				丸玉	石英	6.73	
42				丸玉	褐色石英	4.57	
43	4	-	22	獣形勾玉	緑色片岩	17.10	
44				丸玉	石英	5.92	
45	3	-	6	丁字頭勾玉	玉髄	27.75	線刻３本
46				丸玉	石英	6.49	
47				丸玉	褐色石英	5.18	
48	3	-	13	丁字頭勾玉	玉髄	24.91	線刻２本
49				丸玉	褐色石英	6.61	
50	3	-	10	丁字頭勾玉	玉髄	15.29	線刻２本
51				丸玉	褐色石英	6.42	
52				丸玉	褐色石英	6.16	

写真1　阿応理屋恵ノ口勾玉





※番号は図番号でなく、整理No.とした。